

55号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

55号横穴墓は北支群の最も南よりの斜面上位に立地し、1つの墓道に対し2基の横穴墓が造られ、主横穴である55-A号墓は南西方向に開口する。当横穴墓の南側は、谷状に窪んでおり、この地点で北支群は終結する。全長は13.12mで、標高は墓道部の入口で約32mを測る。墓道主軸方向は、N-27°-Eを測る。保存状態は、墓道部中央に中世の溝の横断はあるもののおおむね良好であったが、玄室内は天井崩落後の窪みのごみ穴として使用されていたため、攪乱が著しかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設の除去後、玄室内のごみ除去作業を行い、遺物・礫床等の検出を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道部は長さ約9.2m、幅は墓道入口で0.8m、羨門付近で上部幅4.3m、底面幅1.25mを測る。墓道床面は、凹凸を持ちながらも約5~10°の緩やかな傾斜で羨門に向かって上がる。なお、墓道右肩には、長さ6m、幅0.3mと長さ3.3m、幅0.4mのテラス状の壇を敷設している。羨門付近中央には、玄室からの排水溝が見られ、排水溝には大形の河原石を2個蓋石として使用している。羨門両脇には幅10cm、高さ10cm程の三角柱状の土柱を設けている。側壁は羨門部で高さ約2.0mであり、60°前後の傾斜で立ち上がる。羨門壁は70°前後の傾斜を持ち、側壁とほぼ直角に接している。なお、当墓道には、主軸に対して平行に1基と北方向に直角に1基の計2基の横穴墓が穿たれており、このような形状は群中唯一のものである。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり全体で4層群11層に区分できた。以下堆積順に説明する。

第1層群(Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層)は閉塞下面より墓道入口付近まで最も厚い所で50cm前後ほぼ水平に堆積し、上面を第2層群によってカットされている。本層はさらに3層に区分される。(1)下層(Ⅸ層)は基盤層の2次堆積土で閉塞石下面全体を覆う。上・中層とは漸移的变化をする。(2)中層(Ⅷ層)も基盤層の2次堆積土で下層に連続して3.5mほど堆積している。(3)上層(Ⅶ層)は風化の進んだ基盤層の2次堆積土であり、墓道全体に堆積している。Ⅶ層の中央より羨門側に一括埋置状態の遺物(第324図33~40)を包含する。本層群は初葬時の埋土とその風化土と考えられる。

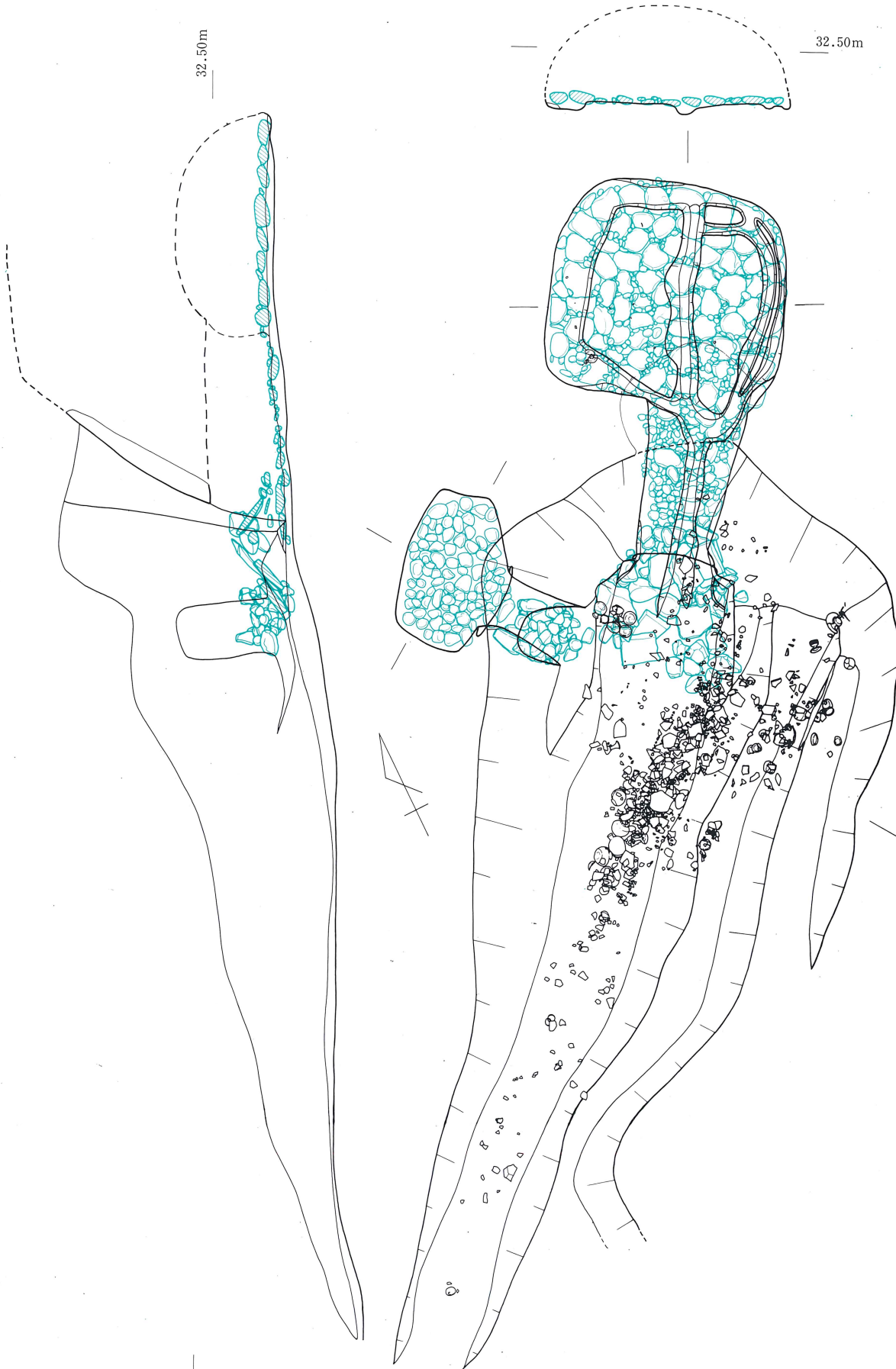
第2層群(Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層)は閉塞上面から墓道入口付近まで最も厚い所で70cm前後やや斜めに堆積し、羨門付近で3層群によってカットされている。本層はさらに3層に区分される。(1)下層(Ⅵ層)は若干風化した基盤層の2次堆積土でやや軟質である。上層とは漸移的变化をする。(2)中層(Ⅴ層)は基盤層の2次堆積で固く締まっている。(3)上層(Ⅳ層)はクロボク質の風化の著しい土層でほぼ墓道全体に堆積している。Ⅵ層の中央より羨門側に破碎散布状態の遺物(第323図23~27)及び同層全体に破碎散布状態の甕(第325、326図46、47)を包含する。本層群は第1次追葬時の埋土と考えられる。

第3層群(Ⅲ・Ⅹ・ⅩⅠ層)は羨門から墓道入口付近まで最も厚い所で70cmほど斜めに堆積している。本層はさらに3層に区分される。(1)下層(ⅩⅠ層)は羨門下面を覆う層で羨門に向かって斜下方に堆積する基盤層の2次堆積土で固く締まっている。(2)中層(Ⅹ層)は羨門全体を覆う層でレンズ状に堆積した基盤層の2次堆積土である。(3)上層(Ⅲ層)はクロボク質の風化土層であり墓道全体を約30cm前後の厚さで覆っている。遺物はⅢ層下面で一括埋置状態のもの(第322図1~7・第326図50、58)が、ⅩⅠ層上面で遺物(第322図8~10・第326図51、52)の一括埋置状態が認められた。本層群は最終埋葬時の閉塞埋土及びその風化土と考えられる。なお、55-B号横穴墓は横断土層の観察結果からⅢ層中より切り込まれていた。

第4層群(Ⅰ・Ⅱ層)は羨門壁上面ほぼ墓道全体に堆積した層で近年の2次堆積土である。以上の土層観察結果から55-A号横穴墓では少なくとも3回の埋葬が行われたと考えられる。

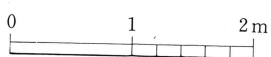
32.50m

32.50m



34.00m

134



第319图 55号横穴墓平·断面图

2) 羨道、玄室

55-A号横穴墓

羨門は天井が一部残存しており、羨門高は0.9m、幅は0.85mを測る。閉塞施設は最終埋葬時の状況であり、羨門全体を覆っていない。閉塞施設の構築方法は溝の蓋石を根石とし、上面に安山岩製の板石を5枚立てて羨門全体を覆っていたと考えられるが、最終埋葬時に1枚の板石を羨門方向に倒して使用した状況がうかがわれる。またこの板石の根石として10個前後の川原円礫が認められた。羨道は長さ1.68m、玄門幅1.14mを測る。天井はすべて崩落しており高さは不明である。玄室は長さ2.35m、裾部幅2.23m、奥壁幅1.85mのやや胴膨らみの片袖平入り長方形を呈する群中唯一のものである。床面には幅30～50cm前後のやや幅広な排水溝が周壁および中央に設けられ、玄門付近で合体し羨門まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室には人頭大の川原石を、羨道には50cm大の板石2個と人頭大の川原石7個、拳大の川原石をそれぞれ全面に敷き詰めている。玄室内の敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に広げるように行い最後に5～10cmの河原小礫を礫の隙間に補填している。天井は崩落が激しく形態、高さなどは不明である。

55-B号横穴墓

本横穴墓は、墓道主軸に対して北西に約115°振ってつくられており、東南方向に開口する。全長は2.25m、玄室主軸はN-53°-Wである。標高は羨門の下面で32.2mを測る。保存状態は良好であった。本横穴墓は墓道発掘中に発見されたが、横断土層観察の結果、Ⅲ層中より切り込まれたことが判明した。調査は、供献土器の検出、閉塞施設の検出を行なった後、玄室内の遺物・礫床等の検出を実施した。

羨門は天井がほぼ残っており、羨門高は約0.8m、幅0.65mを測る。閉塞施設は大形の石を下に敷き人頭大の川原石20個前後と2段積みになっている。羨道は長さ0.92m、幅は0.6m前後を測る。天井は大部分が崩落しているが床面からの推定高0.7m前後である。玄室との境はゆるいくびれがある。玄室は長さ1.11m、最大幅1.65mの平入り隅丸長方形を呈す。床面はほぼ平坦で排水溝等は認められず、玄室内のみに人頭大の川原石を敷き詰めている。隙間に小礫の補填は認められない。天井は若干崩落があるがドーム状を呈し、床面からの高さは中央付近で0.9m前後と推定される。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

55-A号横穴墓

玄室内には天井が崩落し大量のごみが廃棄されていたが、清掃後に土器、装身具類、鉄器類が検出された。土器は左裾コーナー付近で須恵器平瓶(第326図8)が、鉄器は右裾壁付近に鉄鏃(第326図51、52)が、装身具類は中央よりやや羨道側で耳環4個(第327図59～62)と3個のガラス玉(第327図70～72)が検出された。他の多数の玉類(第327図65～69、73～222)は玄室内埋土の水洗中に発見された。

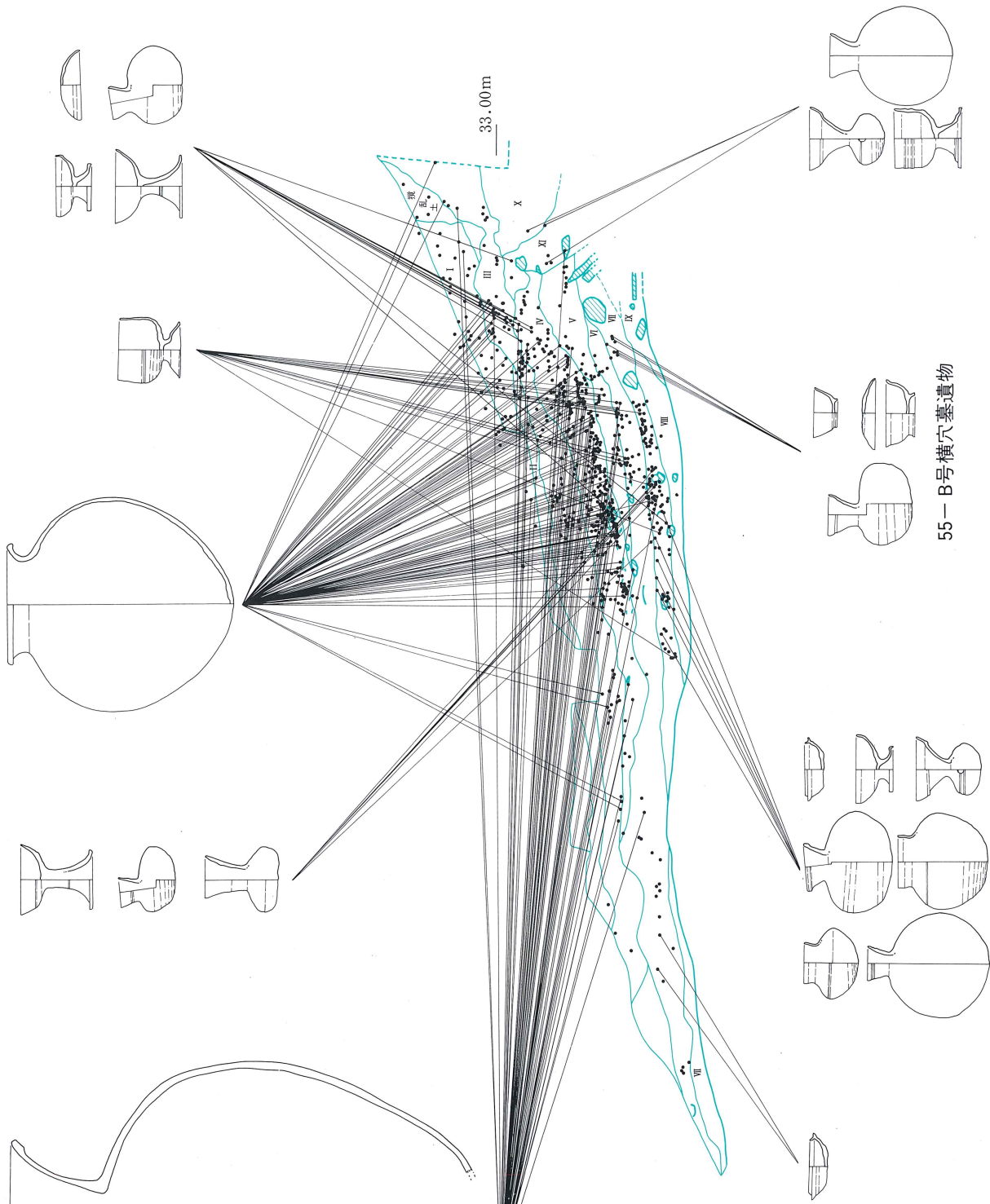
55-B号横穴墓

玄室内には天井部の崩落土が若干認められたが、ほとんど旧状をとどめていた。しかしながら遺物は中央奥壁よりに大腿骨片が検出された以外にはなにも発見されていない。

2) 墓道内

55-A号横穴墓

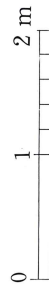
墓道内の遺物の出土層位については、墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状況について述べる。本墓道より多量の遺物が検出された。まず、墓道右側の上段テラス状遺構羨門寄り直刀・馬具(鏡板)・須恵器坏蓋、坏身、高坏、平瓶(第322図1～7・第326図50、58)が、下段テラス状遺構の羨門コーナーで鉄鏃・須恵器提瓶、臄、高坏(第322図8～10・第326図51、54、55)が一括埋置状態で検出された。これらは、最終埋葬時にかかわる墓道祭祀と考えられるが、鉄器は玄室内からの掻き出しであろう。また、墓道中央の羨門寄りに土器(第322図12～14・第323図30～32・第324図33～40)の一括埋置状態が検出された。これらは初葬時のものである。



55-B号横穴墓遺物

55号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I:	茶褐色	粘質土	ハード	二次堆積土
II:	黄茶褐色	粘質土	ハード	
III:	暗茶褐色	クロボク質土	ソフト	風化が進んでいる。最終埋葬埋土 本層より5号は初回込んで築造されている。
IV:	黒褐色	クロボク質土	ゾラ	
V:	茶褐色	粘質土	ソフト	風化が著しい。
VI:	暗茶褐色	粘質土	ソフト	
VII:	黒褐色	粘質土	ソフト	第1次埋葬埋土
VIII:	暗茶褐色	粘質土	ソフト	
IX:	暗茶褐色	粘質土	ハード	初葬時埋土
X:	暗茶褐色	粘質土	ハード	
XI:	黄褐色	粘質土	ハード	最終埋葬閉塞埋土

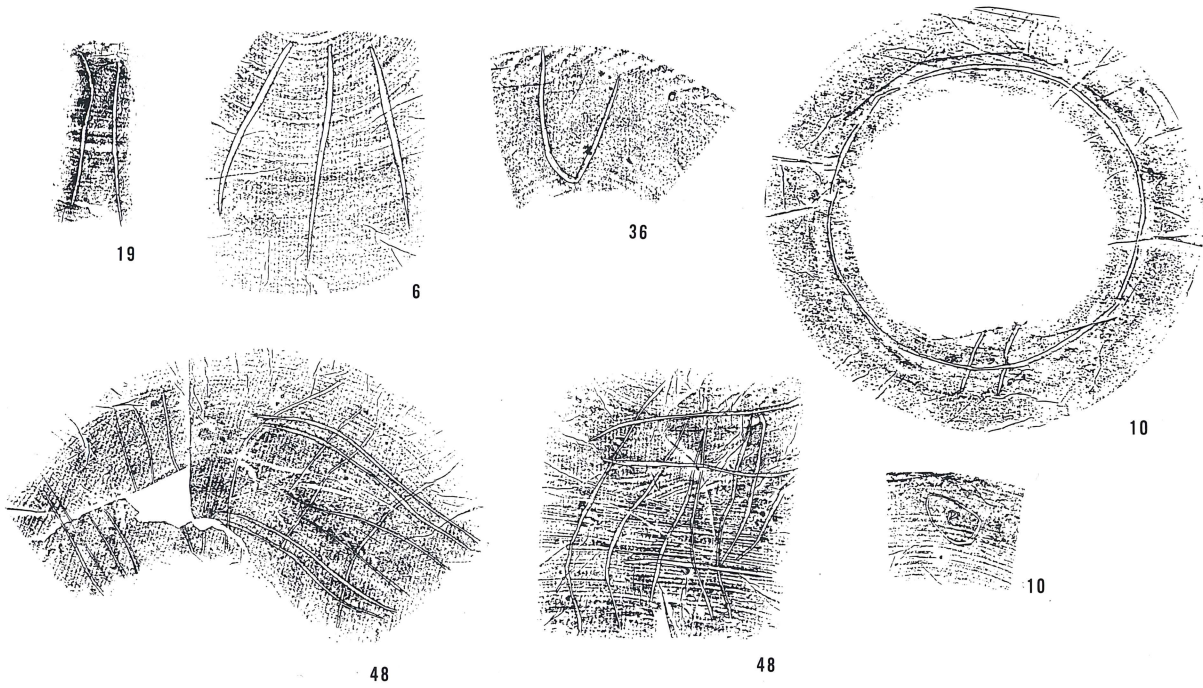


第320図 55号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

なお、墓道全体に甕・坏・高坏・横瓶等（第323図15～29・第325図46・第326図47）の破碎散布状態が認められたが、これは第1次追葬に伴う遺物である。この内、甕（46・47）は59、81号横穴墓出土のものと接合する。

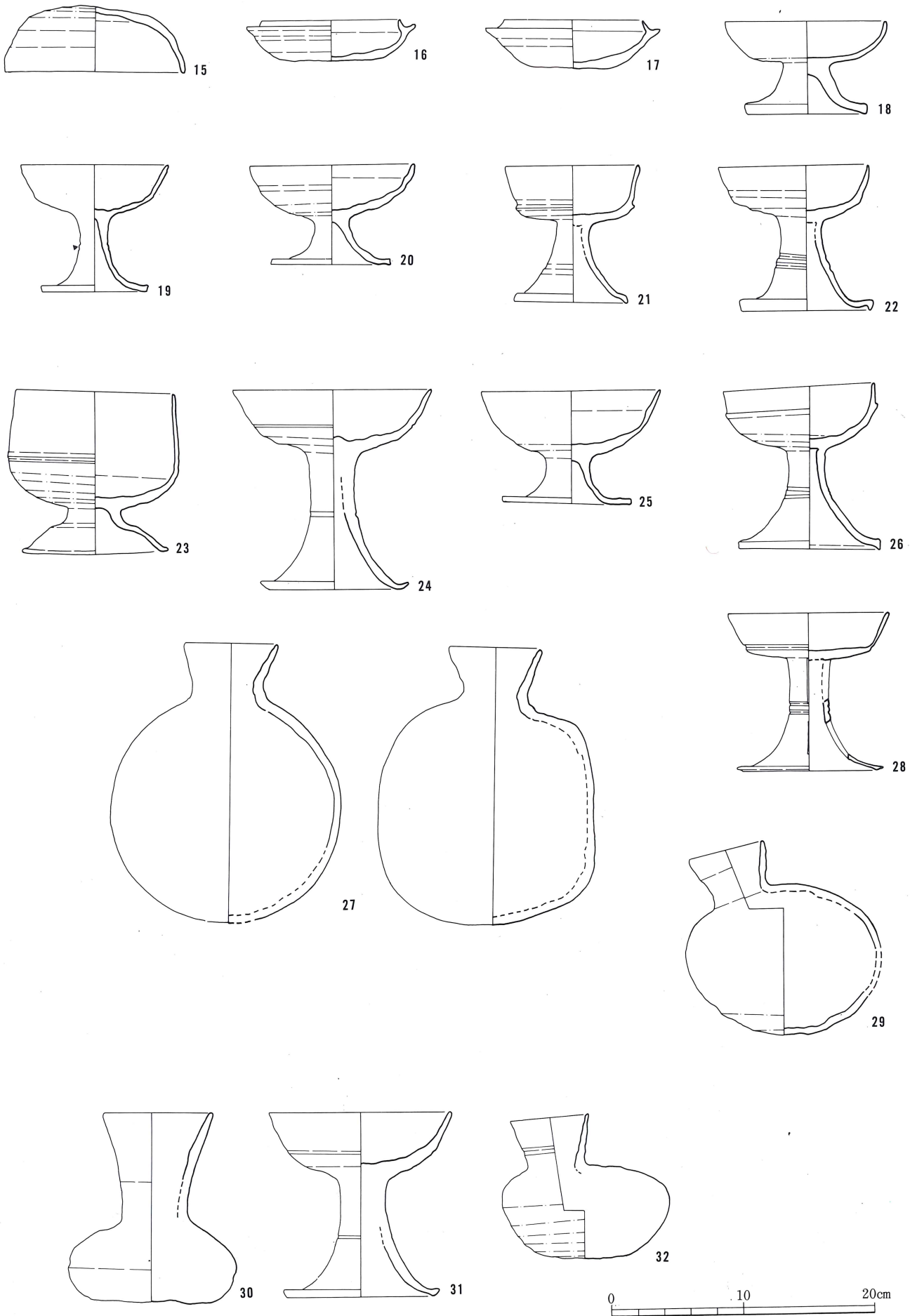
55-B号横穴墓

羨門右側前方において須恵器蓋付埴4個、埴1個、平瓶1（第328図1～6）が、羨道に平行した並びで配列埋置されていた。（村上久和）

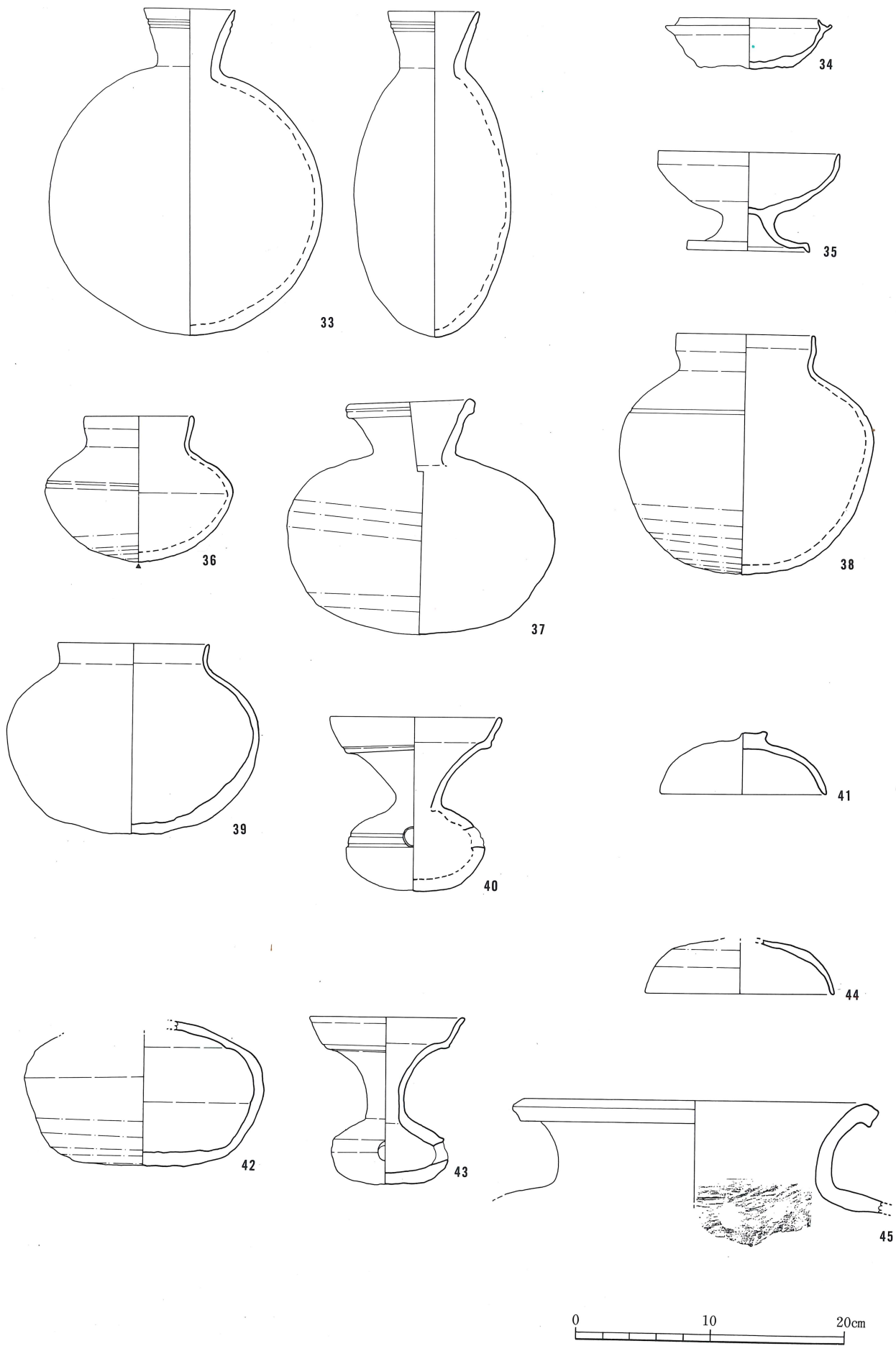


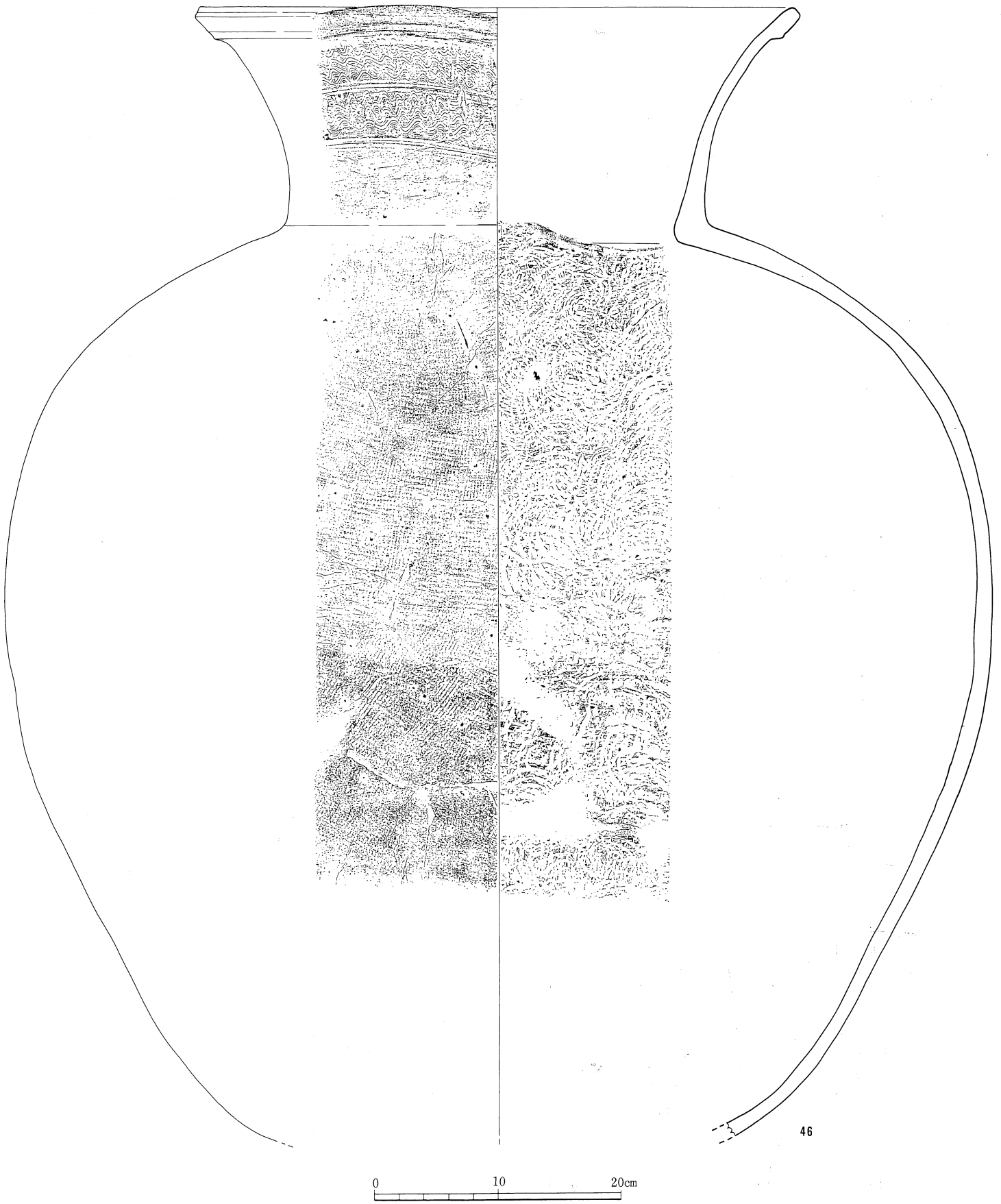
第321図 55号横穴墓出土土器へラ記号



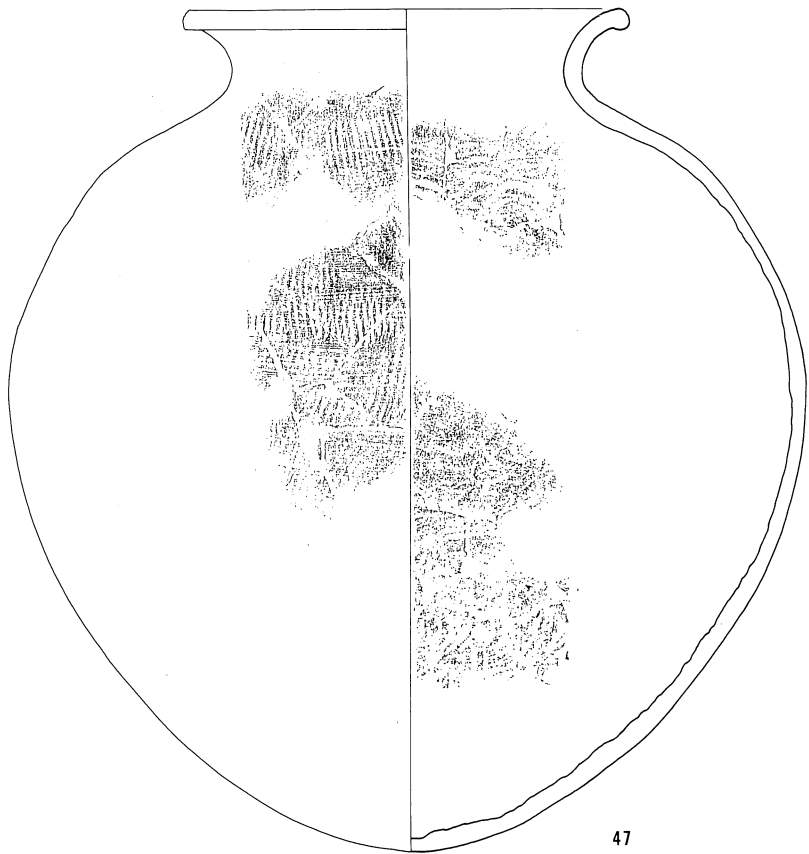


第323图 55-A号横穴墓出土遺物実測図(2)

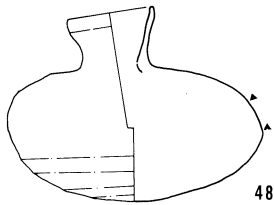




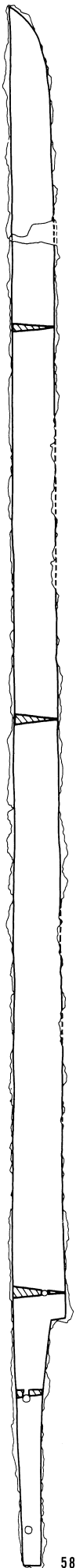
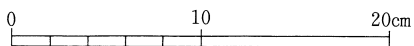
第325图 55-A号横穴墓出土遗物实测图(4)



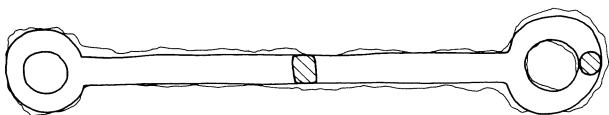
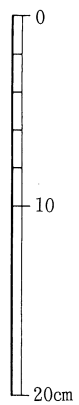
47



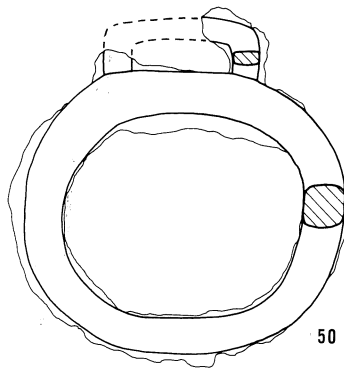
48



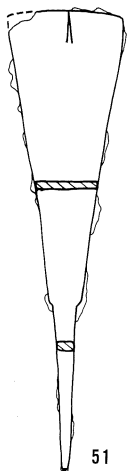
58



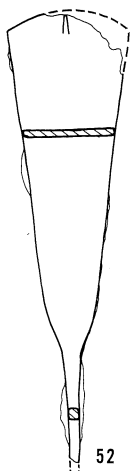
49



50



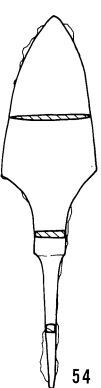
51



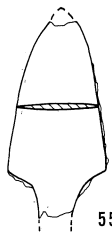
52



53



54



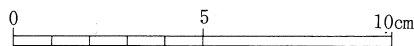
55



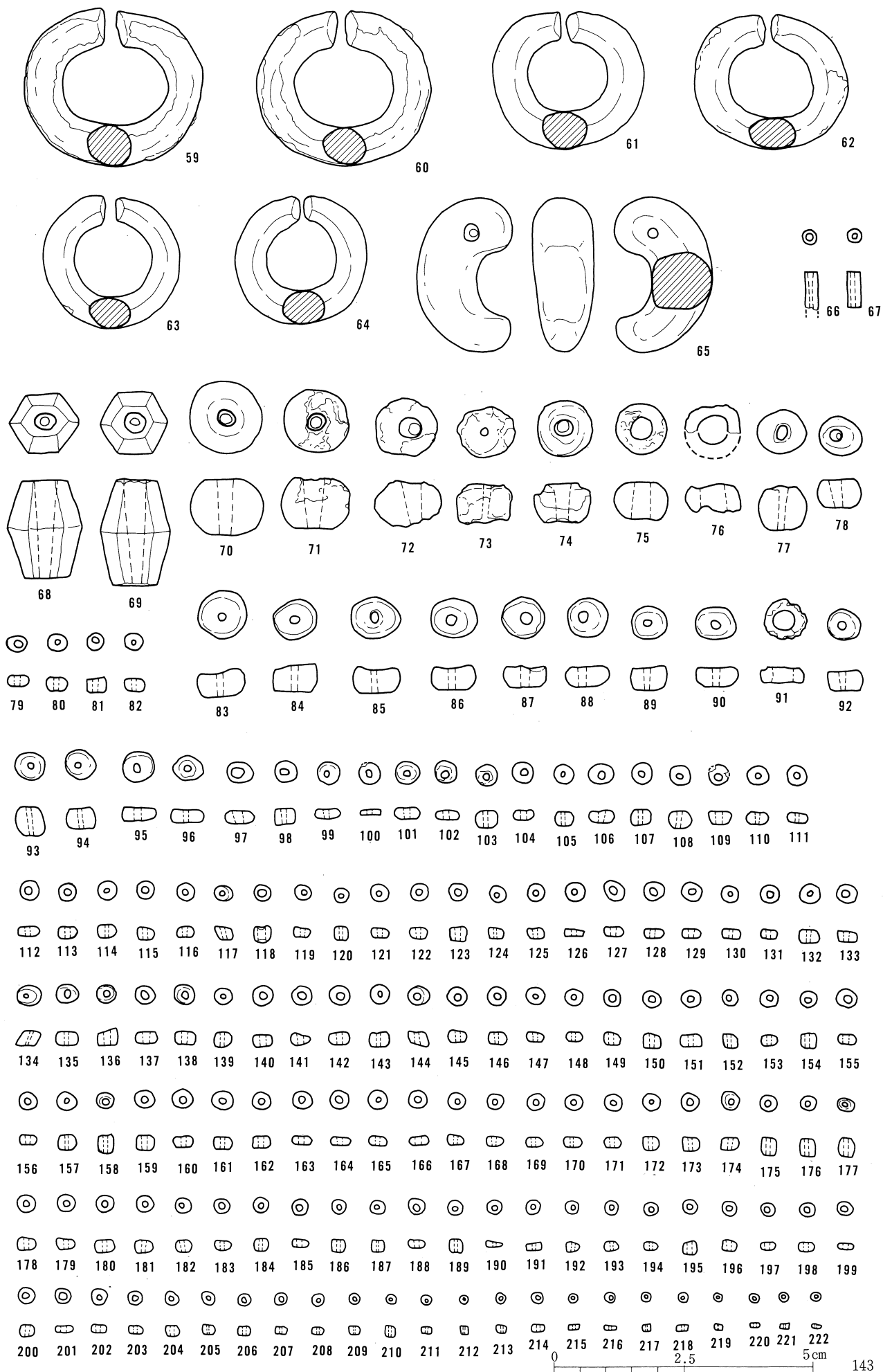
56



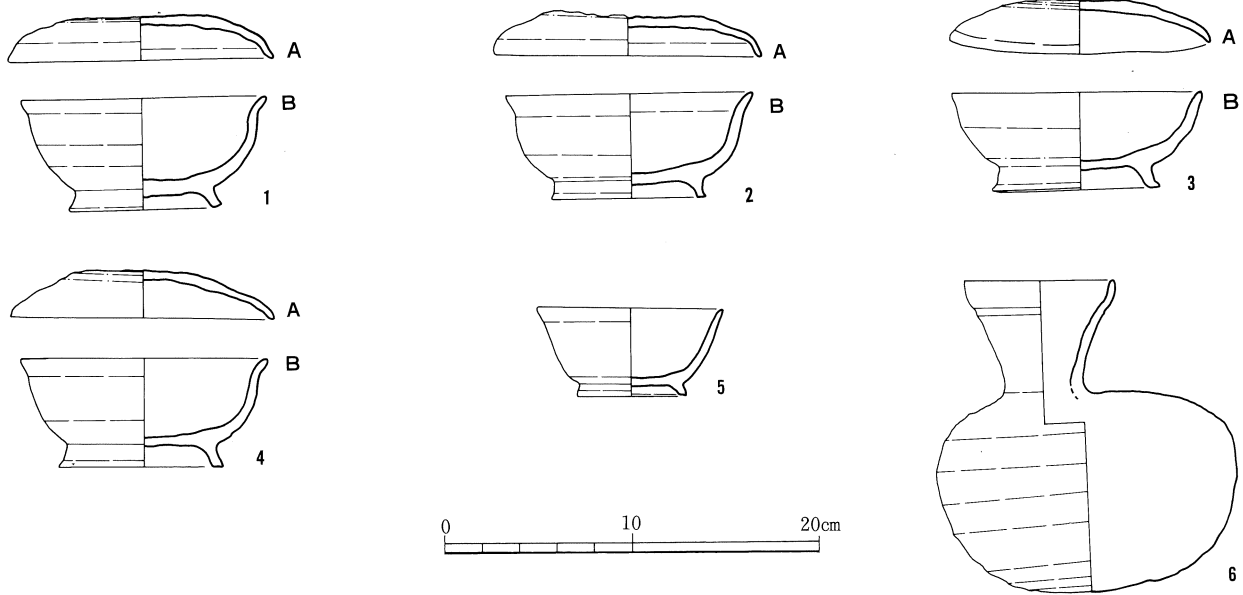
57



第326图 55-A号横穴墓出土遺物実測図(5)



第327图 55-A号横穴墓出土遗物实测图(6)



第328図 55-B号横穴墓出土遺物実測図

第124表 55号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏身	・10.4 ・3.5	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
2	坏蓋	・11.6 ・3.9	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	黄灰色 黒灰色	精緻	良好		
3	坏蓋	・13.0 ・2.9	口縁部は内湾しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好		
4	平瓶	・6.2 ・14.6 ・15.3	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は楕円形を呈し、最大径はほぼまん中にある。底部はやや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1~5mmの石英粒を多量に含む	良好		
5	高坏	・14.5+α ・12.8+α	坏部はやや深く上外方にのびる。脚部は下外方にのび、端部は垂直に面をなす。外面に2本の沈線をもつ。	調整不明	調整不明	淡黄褐色	角閃石粒を含む	不良		
6	坏蓋	・13.6 ・3.8	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 褐色	角閃石その他の白色砂粒を含む	良好		
7	高坏	・11.8 ・6.8	坏部の口縁部は上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色	細石英粒、角閃石粒を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
8	提瓶	・8.6 ・24.0 ・19.3	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は円形を呈す。	回転ナデ	回転カキ目	青灰色	精緻	良好		
9	壺	・12.1 ・14.6 ・9.9	口頸部は外反しながらのび、端部は丸みのある段をなす。胴部は楕円形を呈し、外面のやや上方に1本の沈線と穿孔がある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 波状文 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		外面胴部 上方 「∩」
10	高坏	・11.4 ・13.2	口縁部はほぼ直上にのび、端部は丸い。坏部外面に3ヶ所稜がみとめられる。底部は下外方にのび、端部付近で屈曲し、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	精緻	良好		外面坏部 「☉」 内面脚部 「☺」
11	高坏	・10.5 ・15.6	坏部の口縁部は上外方にのび、端部は丸い。外面に2本の突帯がつく。脚部は長く下外方にのび、端部は丸く凹面をなす。外面中央部に2本の沈線がある。長方形2段スカシがある。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	1～2.5mm の石英粒を 少量含む	良好		
12	平瓶	・7.4 ・17.0 ・18.4	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は楕円形を呈し、底部は平ら。外面肩部に浮文がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転カキ目	褐色	角閃石粒を 多量に含む	良好		
13	高坏	・10.0 ・9.0	坏部の口縁部はほぼ直上にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部付近で屈曲し、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	精緻	良好		
14	高坏	・11.6 ・12.6	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜がうすくみられる。脚部は下外方にのび、端部は面をなし丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を多 量に含むが 精緻	良好 堅緻		
15	坏蓋	・13.6 ・4.8	口縁部は外反しながらのび、端部はわずかに内傾する面をなし丸みをおびる。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1.5mm前後 の白色砂粒 を少量含む	良好		
16	坏身	・10.4 ・3.0	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り御 ナデ	青灰色	精緻	良好		
17	坏身	・10.4 ・3.0	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深くやや平らである。	調整不明	調整不明	淡黄灰色	細砂粒を含 む	不良		
18	高坏	・12.0 ・7.0	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。坏部はやや浅い。脚部は、下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3mm大 の石英粒を 含むが精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法 量	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	ヘラ記号の有無
		・口径 ・器高 ・胴部最大径		内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
19	高坏	・11.1	坏部はやや深く、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。外面にうすい稜がみとめられる。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。外面中央部に2本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	角閃石の細砂粒を含む	不良		外面頸部「II」
20	高坏	・12.4 ・7.5	坏部はやや深く、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。外面にはわずかに稜がみられる。脚部は下外方にのび、端部は凹面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	細砂粒を含む	不良		
21	高坏	・10.0 ・10.2	坏部の口縁部は外反しながらほぼ直立してのび、端部は丸い。外面には稜がみられる。脚部は下外方にのび、端部は面をなし丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青紫色 赤紫色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
22	高坏	・11.2 ・10.9	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は細くなり丸い。坏部はやや深い。脚部は下外方にのび端部は面をなす。外面中央部に2本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
23	高坏	・12.0 ・12.4	坏部は深く、口縁部はやや内湾しながら上方にのび、端部は丸い。脚部は短く下外方にのび、外側に屈曲し、さらに下外方にのびる。端部は丸く垂直に屈曲する。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5mm前後の白色砂粒を少量含む	良好		
24	高坏	・15.0 ・15.2	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜がみとめられる。脚部は下外方にのび、端部は外面に屈曲して丸い。外面中央部に1本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐色	細黒色、白色砂粒を含む	良好		
25	高坏	・13.7 ・8.5	坏部は深く、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～5mmの白石砂粒、角閃石、その他の砂粒を少量含む	不良		
26	高坏	・11.4 ・12.0	坏部の口縁部は外反しながらほぼ直立ぎみにのび、端部は丸い。外面にはうすい稜がみられる。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。外面中央部に2本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
27	提瓶	・7.0 ・3.6 ・17.6	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	暗灰色 黒灰色	石英粒、細砂粒を含む	良好		
28	高坏	・12.2 ・12.0	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には、はっきりした稜がみとめられる。脚部は下外方にのび、端部は内傾する面をなす。外面中央部に2本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 黒色	精緻	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
29	平瓶	・5.8 ・14.7 ・14.8	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は楕円形を呈し、底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色	白色、黒色砂粒を含む	良好		
30	長頸壺	・8.0 ・14.4 ・12.8	口頸部は長く外反しながらのび、端部は丸い。胴部は扁平で底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ	褐色 赤橙色	角閃石、その他の砂粒を少量含む	良好		
31	高坏	・13.8 ・14.0	坏部は上外方にのび、端部は丸い。外面にはややうすい稜がみとめられる。脚部は下外方にのび、端部は外面に屈曲し丸い。	器面が磨減しているため調整不明	器面が磨減しているため調整不明	褐色 赤橙色	角閃石その他の砂粒をやや多量に含む	良好		
32	平瓶	・6.0 ・11.0 ・12.7	口頸部は外反しながらのび、端部は丸く外面中央部に2本の沈線がある。胴部は楕円形を呈し、最大径はやや上方にある。底部はやや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
33	提瓶	・6.8 ・23.6 ・20.0	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。外面に2本の沈線がある。胴部は円形を呈す。	器面が磨減しているため調整不明	器面が磨減しているため調整不明	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	不良		
34	坏身	・10.2 ・6.7	たちあがりは内傾してのび、端部はややとがる。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り	灰色	1mm以下の白色砂粒を含む	良好		
35	高坏	・13.4 ・7.3	坏部はやや深く、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなし突帯がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色	細石英、角閃石粒を含む	不良		
36	短頸壺	・8.0 ・10.7 ・13.7	口頸部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。胴部ははり最大径は中央部にある。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転カキ目	青灰色 茶灰色	1~1.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		外面底部 「III」
37	平瓶	・9.0 ・17.2 ・19.7	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。胴部は楕円形を呈し、底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色 灰褐色	白色細砂粒を含む	良好		
38	短頸壺	・10.3 ・17.7 ・18.5	口頸部は外反しながらのび、さらに内側に屈曲し端部は丸い。胴部は全体的に丸みをおび、最大径は上方にある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転カキ目	青灰色	1~2.5mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
39	短頸壺	・11.2 ・14.0 ・18.5	口頸部は外反ぎみに短く直立し、端部は丸い。胴部は楕円形を呈し、底部はやや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	淡黄褐色	石英、角閃石粒を含む	不良		
40	罇	・12.5 ・12.6 ・10.1	口頸部は外反しながらのび、端部付近で屈曲し、その外面は凹面をなす。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒褐色 赤褐色	0.5mm前後の石英粒を含む	やや不良		
41	坏蓋	・12.4 ・4.5	口縁部は外反しながらのび、端部はわずかに内傾する面をなす。外面天井部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	精緻	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
42	平瓶	・17.6 ・10+ α	胴部は楕円形を呈し、底部は平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	青灰色	精緻	良好		
43	罇	・11.4 ・12.3 ・8.5	口頸部は外反しながらのび、端部付近で屈曲し端部は丸い。胴部は楕円形を呈し、底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	黄灰色 灰色 灰褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	やや不良		
44	坏蓋	・14.0 ・4.0	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 静止ヘラ切り	灰茶褐色	角閃石その他の砂粒を少量含む	良好		
45	甕	・25.4 ・7.4	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	灰色	精緻	良好		
46	甕	・49.0 ・89+ α ・80.0	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚しやや丸い。胴部はほぼ円形を呈し、底部はややとがりぎみである。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 波状文 タタキ	灰色 黒灰色	細砂粒を含む	良好 堅緻		
47	甕		口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。胴部はほぼ円形を呈す。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ後カキ目	淡褐色	精緻	やや不良		
48	平瓶	・4.5 ・10.2 ・13.5	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は楕円形を呈し、底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ 回転カキ目	青灰色	精緻	良好		外面胴部2ヶ所にヘラ記号あり
1 A	坏蓋	・14.0 ・2.3	口縁部は外反しながらのび、わずかに屈曲する。端部は丸い。天井部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	黄灰色 灰色	白色、黒色 細砂粒を含む	良好	55-B号	
1 B	脚付碗	・13.1 ・5.9	口縁部は湾曲ぎみに上外方にのび、端部付近で外反し丸い。脚部は短く下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	1~2mmの白色砂粒を少量含む	良好	〃	
2 A	坏蓋	・14.0 ・2.0	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平ら。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	黄灰色	白色、黒色 細砂粒を含む	良好	〃	
2 B	脚付碗	・13.1 ・5.6	口縁部は外反しながらのび、端部はさらに外反し丸い。脚部は短く下外方にのび面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好	〃	
3 A	坏蓋	・13.9 ・2.8	口縁部はわずかに外反しなから のび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	青灰色	精緻	良好	〃	
3 B	脚付碗	・13.2 ・5.2	口縁部は上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は平面をなし、わずかに外側に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	黄灰色 暗灰色	白色、黒色 細砂粒を含む	良好	〃	
4 A	坏蓋	・13.9 ・2.5	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	黄灰色 灰色 黒灰色	石英粒を多量に含む	良好	〃	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
4-B	脚付碗	・13.1 ・5.7	口縁部は外反しながらのび、端部はわずかに外側に屈曲し丸い。脚部は下外方にのび、端部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好	〃	
5	脚付碗	・9.9 ・4.7	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は短く下外方にのび、端部は面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好	〃	
6	平瓶	・7.9 ・16.5 ・15.8	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には沈線が1本めぐる。胴部は楕円形を呈し、底部はやや丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 平行タタキ	黄灰色 褐色	白色細砂粒を含む	良好	〃	

第125表 55-A号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
49	馬具							轡(引手)
50	〃							轡(鏡板)
51	鉄鏃	12.2	7.8	3.0	0.45	0.2	0.25	
52	同上	12.0以上	9.0	3.2	0.4	0.2	0.3	
53	同上	9.9	6.3	2.5	0.3	0.2	0.25	
54	同上	8.4以上	6.3	2.5	0.3	0.15	0.2	
55	同上	5.2以上	5.2以上	2.6	不明	0.15	不明	
56	同上	3.1以上	2.0	0.85	0.55	0.2	0.2	
57	同上	4.2以上	2.1	0.8	0.4	0.2	0.2	
58	直刀	105.0	89.2	3.0	1.6	0.7	0.6	目釘穴3個

第126表 55-A号横穴墓出土耳環計測表

(単位：mm, g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
59	銅地金張	33×29	8×8	19.9	緑青 剝離
60	同上	〃	8×7.5	19.2	〃 〃
61	同上	28×25	8×7	15.3	〃 〃
62	同上	28×26	8.5×7	14.3	〃 〃
63	同上	26×24.5	8×6	15.7	〃 遺存良好
64	同上	25×24	7.5×6	12.3	〃 〃

第127表 55-A号横穴墓出土玉類計測表

(単位: mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
65	勾玉	硬玉(ヒスイ)	淡緑	15	11	3~2	9.5	片面穿孔
66	管玉	碧玉	淡緑	8.5(残部)	3	1.5	0.1	〃
67	〃	〃	暗灰	7	3	〃	〃	〃
68	切子玉	水晶	透明	18.5	14	4~2	4.6	〃
69	〃	〃	〃	20	13	4~1.5	4.5	〃
70	丸玉	ガラス	緑茶	13.5	10.5	3~2	3	〃
71	〃	〃	緑	13	9	4~2	3.6	風化
72	〃	〃	〃	12.5(残部)	8.5(残部)	〃	1.9	〃 白濁化
73	〃	瑪瑙	橙	10	7	〃	1.2	形が未調整
74	〃	〃	緑	11	7.5	3~2	1.7	風化 白濁化
75	〃	〃	〃	10	7	3.5~3	〃	〃 〃
76	〃	〃	〃	10.5(残部)	5(残部)	4.5	0.6	〃 〃
77	〃	〃	藍	9.5	8	2.5	0.8	
78	〃	水晶	透明	8	6	2~1	0.6	
79	小玉	ガラス	藍	4	2	1.5		
80	〃	〃	〃	〃	2.5	1		
81	〃	〃	〃	〃	3	1.5		
82	〃	〃	〃	〃	2.5	1		
83	丸玉	〃	〃	10	5	1.5	0.7	
84	〃	〃	〃	9	4~6	2	0.5	
85	〃	〃	〃	8.5	5	〃	0.6	
86	〃	〃	〃	〃	〃	〃	0.45	
87	〃	〃	〃	9	4.5	〃	0.5	
88	〃	〃	〃	8.5	4	〃	0.3	
89	〃	〃	〃	8	5	1.5	0.35	
90	〃	〃	〃	7.5	4	〃	0.3	
91	〃	〃	緑	8(残部)	3(残部)	4	0.4	風化 白濁化
92	小玉	〃	藍	7	3.5	1.5	0.2	
93	〃	〃	〃	5	5	〃	〃	
94	〃	〃	〃	6.5	4.5	〃	0.15	
95	〃	〃	〃	7	4	〃	〃	
96	〃	〃	〃	6.5	3	1.5	0.15	
97	〃	〃	青	5.5	2.5	2~1.5		
98	〃	〃	〃	4	3	1		
99	〃	〃	〃	5.5	2	1		
100	〃	〃	〃	4	1	〃		
101	〃	〃	藍	4.5	2	1.5		
102	〃	〃	〃	4	1.5	〃		
103	〃	〃	〃	〃	3.5	1		
104	〃	〃	青	〃	2	1.5		
105	〃	〃	藍	3.5	3	1		
106	〃	〃	青緑	4.5	2.5	1.5		
107	〃	〃	〃	3.5	3	1		
108	〃	〃	藍	4	3.5	〃		
109	〃	〃	青緑	〃	2.5	1.5		

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
110	小玉	ガラス	藍	4	2.5	1		
111	〃	〃	青緑	〃	2	〃		
112	〃	〃	青	〃	〃	1.5		
113	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
114	〃	〃	〃	〃	2.5	1		
115	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
116	〃	〃	〃	〃	2	〃		
117	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
118	〃	〃	〃	〃	3	1.5		
119	〃	〃	〃	〃	1.5	1		
120	〃	〃	〃	3	2.5	〃		
121	〃	〃	藍	3.5	2	〃		
122	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
123	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
124	〃	〃	〃	3	2	0.5		
125	〃	〃	〃	3.5	〃	1		
126	〃	〃	〃	4	1.5	〃		
127	〃	〃	青緑	3.5	2	1.5		
128	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
129	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
130	〃	〃	〃	〃	〃	1		
131	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
132	〃	〃	藍	〃	2.5	〃		
133	〃	〃	〃	〃	2	1.5		
134	〃	〃	青	4.5	3	1		
135	〃	〃	藍	4	〃	〃		
136	〃	〃	〃	〃	〃	1.5		
137	〃	〃	〃	〃	2	〃		
138	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
139	〃	〃	〃	3.5	3	1		
140	〃	〃	〃	4	2.5	1.5		
141	〃	〃	〃	3.5	2	〃		
142	〃	〃	〃	4	〃	1		
143	〃	〃	〃	〃	3	〃		
144	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
145	〃	〃	黄	3.5	2	〃		
146	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
147	〃	〃	藍	〃	2	〃		
148	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
149	〃	〃	〃	〃	〃	1.5		
150	〃	〃	青	〃	3	1		
151	〃	〃	〃	4	2	〃		
152	〃	〃	〃	3	2.5	〃		
153	〃	〃	藍	3.5	2	〃		
154	〃	〃	〃	〃	3	〃		

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
155	小玉	ガラス	藍	3.5	2	1.5		
156	〃	〃	青緑	3	〃	1		
157	〃	〃	〃	3.5	3	〃		
158	〃	〃	青	〃	〃	1.5		
159	〃	〃	藍	〃	〃	〃		
160	〃	〃	〃	〃	2.5	1		
161	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
162	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
163	〃	〃	〃	〃	2	〃		
164	〃	〃	〃	〃	1.5	1.5		
165	〃	〃	〃	〃	2	1		
166	〃	〃	〃	〃	〃	1.5		
167	〃	〃	緑	3	〃	〃		
168	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
169	〃	〃	〃	〃	〃	1		
170	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
171	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
172	〃	〃	〃	3	2.5	〃		
173	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
174	〃	〃	藍	〃	〃	〃		
175	〃	〃	〃	〃	3	〃		
176	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
177	〃	〃	緑	4	〃	〃		
178	〃	〃	〃	3.5	2.5	〃		
179	〃	〃	〃	〃	2	〃		
180	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
181	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
182	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
183	〃	〃	淡緑	3	2	〃		
184	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
185	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
186	〃	〃	〃	2.5	2.5	0.5		
187	〃	〃	〃	2	2	〃		
188	〃	〃	藍	3.5	1.5	1		
189	〃	〃	青	2.5	2.5	0.5		
190	〃	〃	〃	〃	1	〃		
191	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
192	〃	〃	〃	〃	2	〃		
193	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
194	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
195	〃	〃	藍	〃	2.5	1		
196	〃	〃	〃	〃	2	〃		
197	〃	〃	〃	3	1.5	〃		
198	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
199	〃	〃	〃	〃	1	〃		

番 号	種 類	材 質	色 調	長 径	短 径	孔 径	重 量	備 考
200	小玉	ガラス	藍	2.5	2.5	1		
201	〃	〃	〃	3	1	〃		
202	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
203	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
204	〃	〃	〃	〃	2	〃		
205	〃	〃	〃	2	〃	0.5		
206	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
207	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
208	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
209	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
210	〃	〃	〃	〃	2	〃		
211	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
212	〃	〃	〃	1.5	〃	〃		
213	〃	〃	〃	2	〃	〃		
214	〃	〃	〃	〃	1	〃		
215	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
216	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
217	〃	〃	〃	1.5	1.5	〃		
218	〃	〃	〃	2	1	〃		
219	〃	〃	〃	1.5	〃	〃		
220	〃	〃	〃	2	〃	〃		
221	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
222	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

56号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

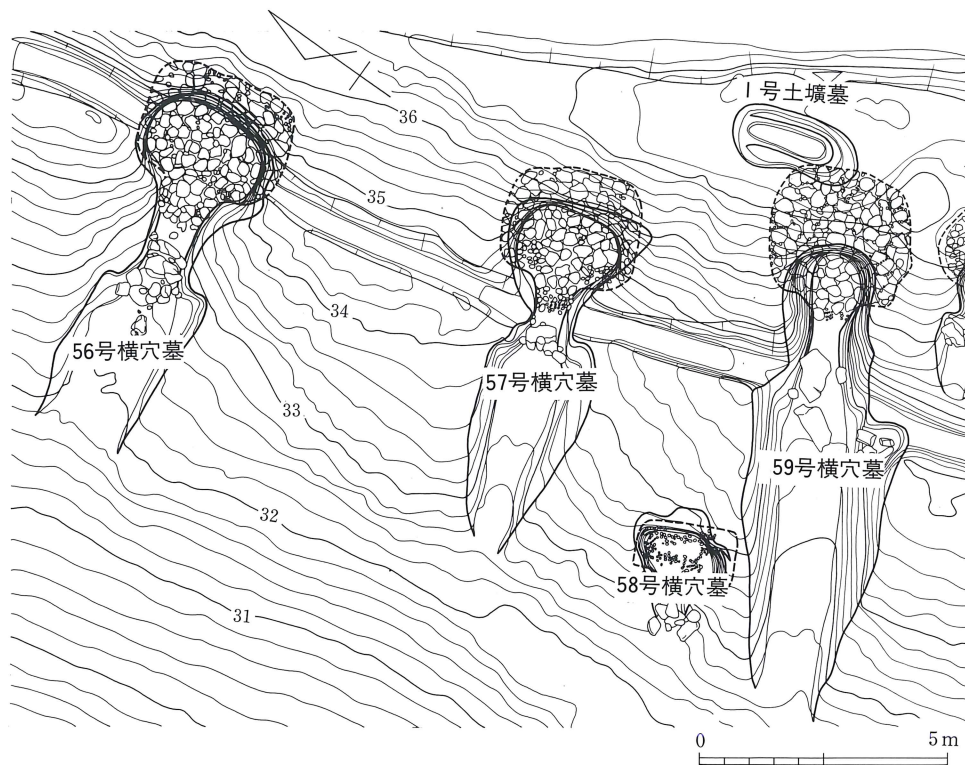
56号横穴墓は南支群の西端にあり、西方に開口する横穴墓である。主軸方向はN-69.5°-Eを測る。標高約33m付近に設けられており、全長は7.82mを測る。玄室の天井部は陥没しているもののその他の保存状態は良好である。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、撤去を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物、礫床施設の調査を実施した。

2. 規模、構造

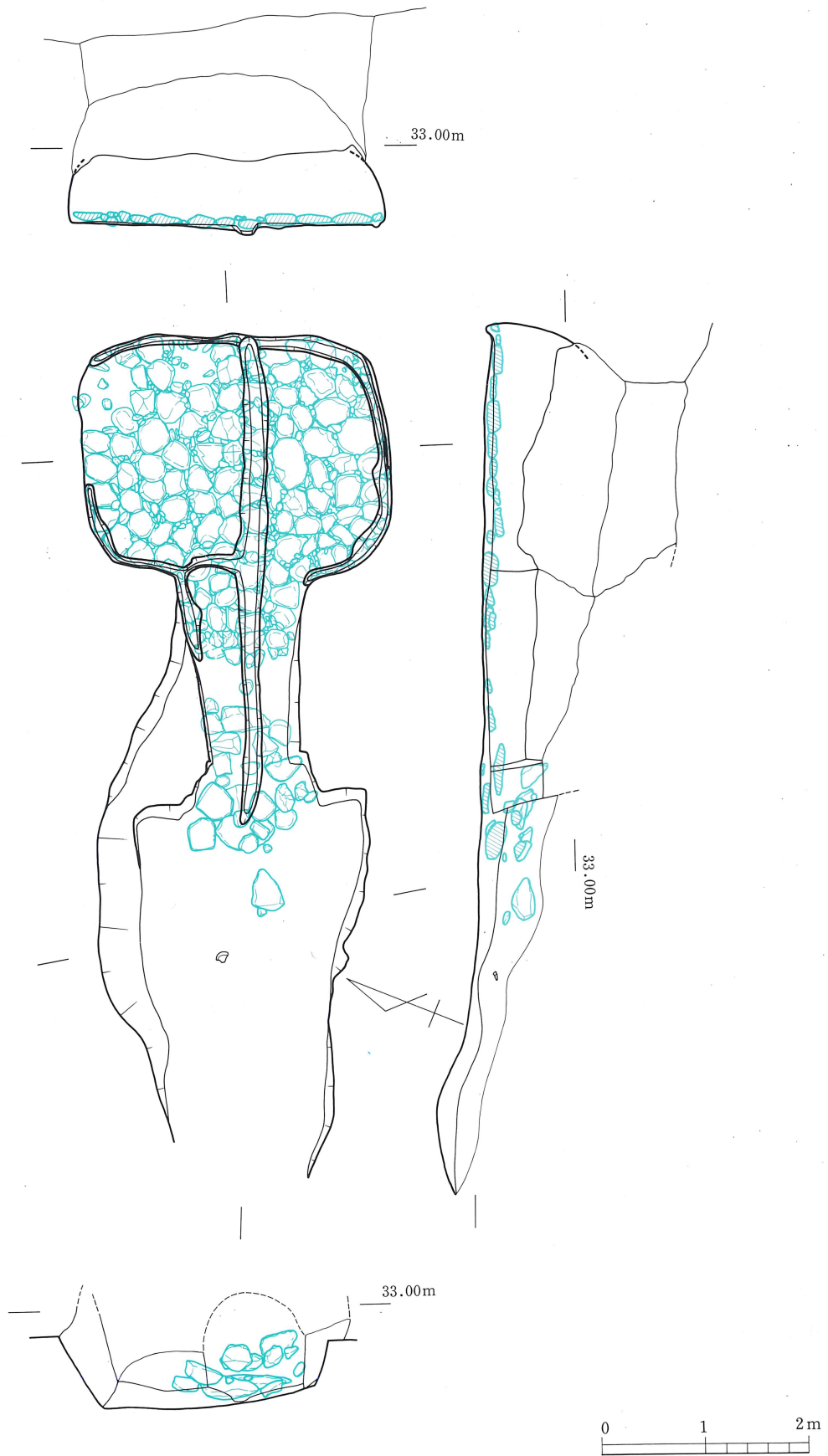
1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約3.75m、幅は墓道入口で1.6m、羨門付近で上部幅2.6m、底面幅2.2mを測る。墓道床面は緩やかな傾斜をもちつつ羨門に続く。羨門部との段差は見られないが玄室内から延びる排水溝によって中央部分を切られている。側壁東側はほぼ垂直に立ち上がり、西側は約70°の角度で立ち上がる。羨門部の壁は80°の角度をもっている。羨門部は崩落が著しく、墓道からの立ち上がりの部分が東側30cm、西側20cmを残すのみである。この羨門下部には玄室より伸びる排水溝があり、これを覆う形で板石が2枚ほど置かれていた。ただこの板石はおそらく初葬時の閉塞石で、閉塞施設を構築する際に根石として置いたものと思われる。閉塞施設自体は最終埋葬時の状態を示しており、根石の上に人頭大の河原石を10数個使用して構築しているが、その作りは比較的雑である。

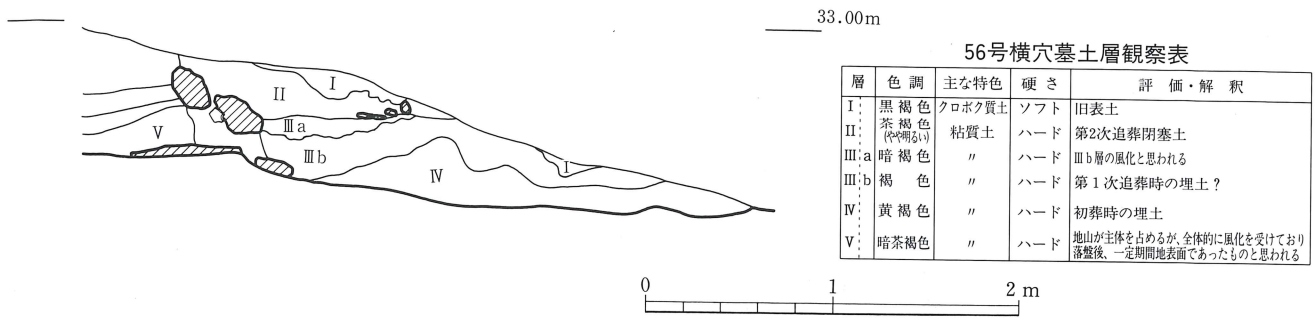
b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は、その性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で4層群9層に分層できた。以下堆積順に説明する。



第329図 56号横穴墓周辺平面図



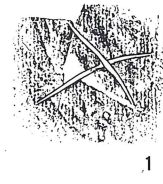
第330图 56号横穴墓平·断面图



第331図 56号横穴墓縦断土層図

第1層群（IV層）は墓道床面に厚さ15～20cmほど堆積しているもので、初葬時の埋土と考えられ、第2層群によって閉塞付近の上面をカットされている。

第2層群（III a・b層）は、羨門から約60cmほど離れた墓道床面より堆積している。追葬時の埋土と考えられ、III b層はIII a層と漸移的な関係にあり、上層が風化を受けている。この2つの層には地山礫が細片化して含まれている。本層中上面より、須恵器坏蓋が検出された。



第332図 同出土土器へラ記号

第3層群（I・II層）は、閉塞施設を覆う形で堆積しており、追葬時の基盤層埋土の2次的な堆積と考えられる。本層中には閉塞時の礫石が認められる。

第4層群（V層）は、羨門部が落盤した際に形成された堆積土で、V層は若干の風化が認められる。

以上の土層観察結果より本横穴墓では少なくとも3度の埋葬が行われたものと推定される。

2) 羨道、玄室

羨道は長さ1.7m、玄門幅1.2mを測る。天井は崩落が著しく高さを推定することは不可能であった。玄室内の礫床が玄門より約80cm羨門部に伸びている。玄室は、長さ約2.3m、裾部幅2.8m、奥壁幅約2.7mの平入り隅丸長方形を呈し、床面には幅10cm～15cmの排水溝が周壁および中央に設けられている。中央の排水溝は玄室から墓道まで伸びている。床面はほぼ平坦で人頭大の扁平な河原石をほぼ前面に敷き詰めているが、その起点となるのは中央の排水溝の上に一列置かれた礫である。そしてこの礫を構築した後、10～15cmの小礫をその隙間に補填している。なお、西奥壁側で一部敷石がなく小礫が数個あるのみという状況も確認されている。天井の落盤が著しく全体の姿をうかがい知る事が難しいが、残存する奥壁から推定してドーム形を呈すると考えられる。

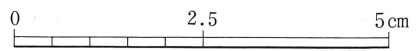
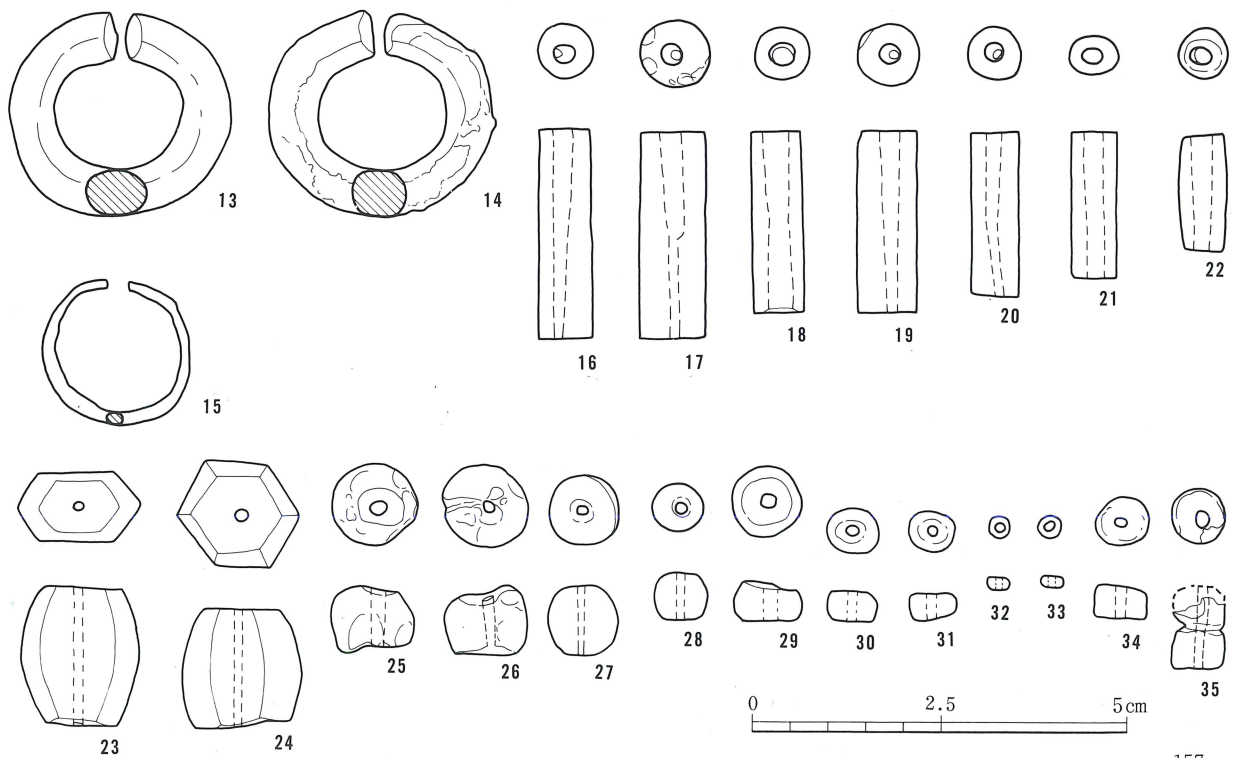
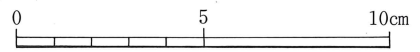
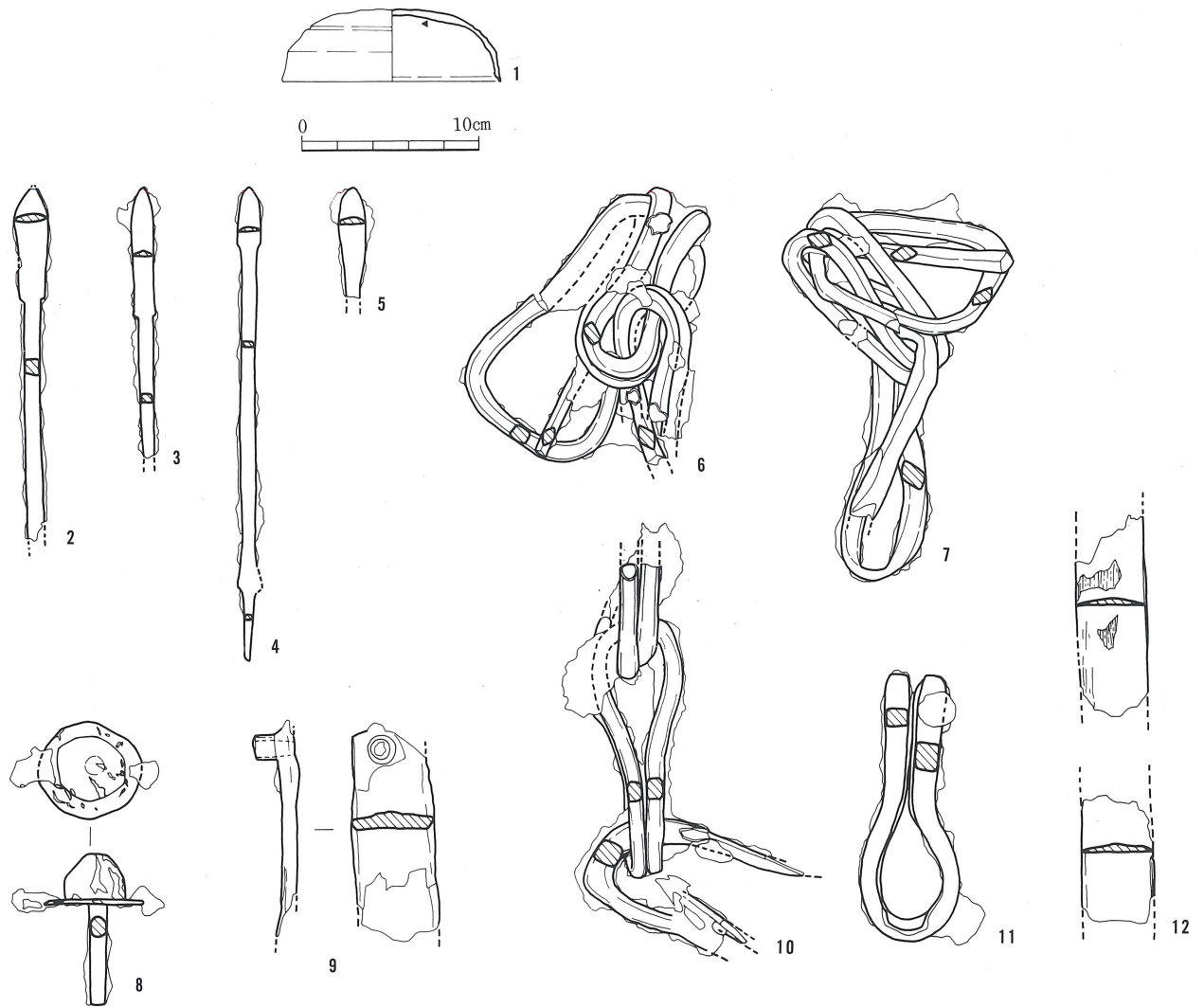
3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内には鉄鏃6（第333図2～5）、馬具1（第333図6～12）、耳環3（第333図13～15）、管玉7（第333図16～22）、切子玉2（第333図23～24）、ガラス小玉（第333図25～35）が検出された。鉄鏃は玄門付近で先端を奥壁に向けて検出され、馬具は羨道の礫床が終わる部分の左壁に近いところで検出された。耳環および管玉類は奥壁左側で検出された。

2) 墓道内

墓道前庭部中央から須恵器坏蓋（第333図1）が検出された。（江田 豊）



第128表 56号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・12.6 ・4.1	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面をなす。天井部はやや高く、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	白色砂粒を多量に含む	良好		内面天井部「X」

第129表 56号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
2	鉄鏃	9.8以上	3.2	0.9	0.45	0.2	0.3	
3	同上	7.5以上	3.6	0.6	0.4	0.2	0.3	
4	同上	13.2	1.7	0.8	0.4	0.15	0.2	
5	同上	3.1以上	2.5	0.8	0.4	0.2	不明	
6	馬具							鉸具と兵庫鎖
7	同上							同上
8	同上							雲珠留金具、鉄地金銅張
9	同上							
10	同上							兵庫鎖とU字形金具
11	同上							兵庫鎖
12	同上							

第130表 56号横穴墓出土耳環計測表

(単位：mm, g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
13	銅地銀張	29×26.5	7×8	19.6	銀箔の残りがよい
14	銅地銀張	30×26	7×7	14.9	
15	銅地	20×19(残部)	2×2(残部)	1.1	腐蝕著しい

第131表 56号横穴墓出土玉類計測表

(単位：mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
16	管玉	碧玉	濃緑	28	7	25~1	3.15	片面穿孔
17	〃	〃	〃	27.5	9	〃	4.9	〃
18	〃	ガラス	青	24	7	3.5~2.5	2.5	〃
19	〃	碧玉	濃緑	〃	7.5	2.5~1.5	3.8	片面穿孔
20	〃	〃	青緑	24	8.5	2~1	1.8	両面穿孔?
21	〃	〃	淡緑	22.5	〃	2.5~2	1.4	〃
22	〃	〃	青緑	20	7	3~2	0.85	〃
23	平玉	ガラス	〃	17.5	16	1	4.3	片面穿孔?
24	〃	〃	〃	16	〃	〃	5.1	
25	丸玉	瑪瑙	橙	11	7	2	1.4	
26	〃	〃	〃	〃	8	1	〃	
27	〃	〃	〃	9.5	9	〃	1.05	
28	〃	〃	〃	7	6	〃	0.4	
29	〃	ガラス	藍	9	9	2	0.6	
30	〃	〃	〃	6.5	4	1	0.2	
31	〃	〃	〃	6	3.5	〃	0.15	
32	小玉	〃	〃	3	1.5	〃		
33	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
34	丸玉	土	黒茶	6.5	4.5	〃	0.2	
35	連玉	〃	〃	9	7	〃	0.4	1個半欠

57号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

57号横穴墓は南支群北端の斜面に立地し、西方向に開口する。全長は約7.83m、標高は墓道前面の上場で33.9m前後を測る。玄室主軸方向はN-56.5°-Eを測る。保存状態は玄室が陥没しているものの比較的良好であった。本横穴墓は調査以前から玄室天井部の陥没が認められ、横穴墓の存在が確認されていた。

調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の有無の確認、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の落石・崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物、礫床施設の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約4.4m、幅は前面で約1.5mを測る。墓道の斜面下方は旧地表と推定される黒褐色の風化土層であり、墓道掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。羨門壁の左右には高さ約0.3m、幅約0.2×0.3mの基壇を持つ。両者とも約75°の傾斜で墓道に向かって下降する。墓道床面は緩い凹凸があり、羨門部から2m程までは約15°の傾斜で、さらに墓道入口までは約3°の傾斜で下降する。側壁の傾斜は両者に差異があり、右側壁は約75°、左側壁は約65°を測る。羨門部壁の傾斜は約77°を測る。

羨門部分は特に天井部分と側壁部において崩壊が著しく、旧状を大きく損なっている。このため高さは不明であるが、幅は0.69mを測る。

閉塞施設は追葬時において右側部分を取り壊されている。現状では羨門下面に5個の大形地山礫を根石として閉塞の基底部を整えている。この部分は初葬時の閉塞施設の残存だと思われる。この上面に扁平な河原石1個と安山岩板石1枚が倒れた状態で検出された。羨門左側には、扁平な河原石と地山礫を使用して割に入念な閉塞施設を設けているが、右半分が壊されている。これは追葬時には羨門部の右半分を利用した痕跡であろう。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で4層群9層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

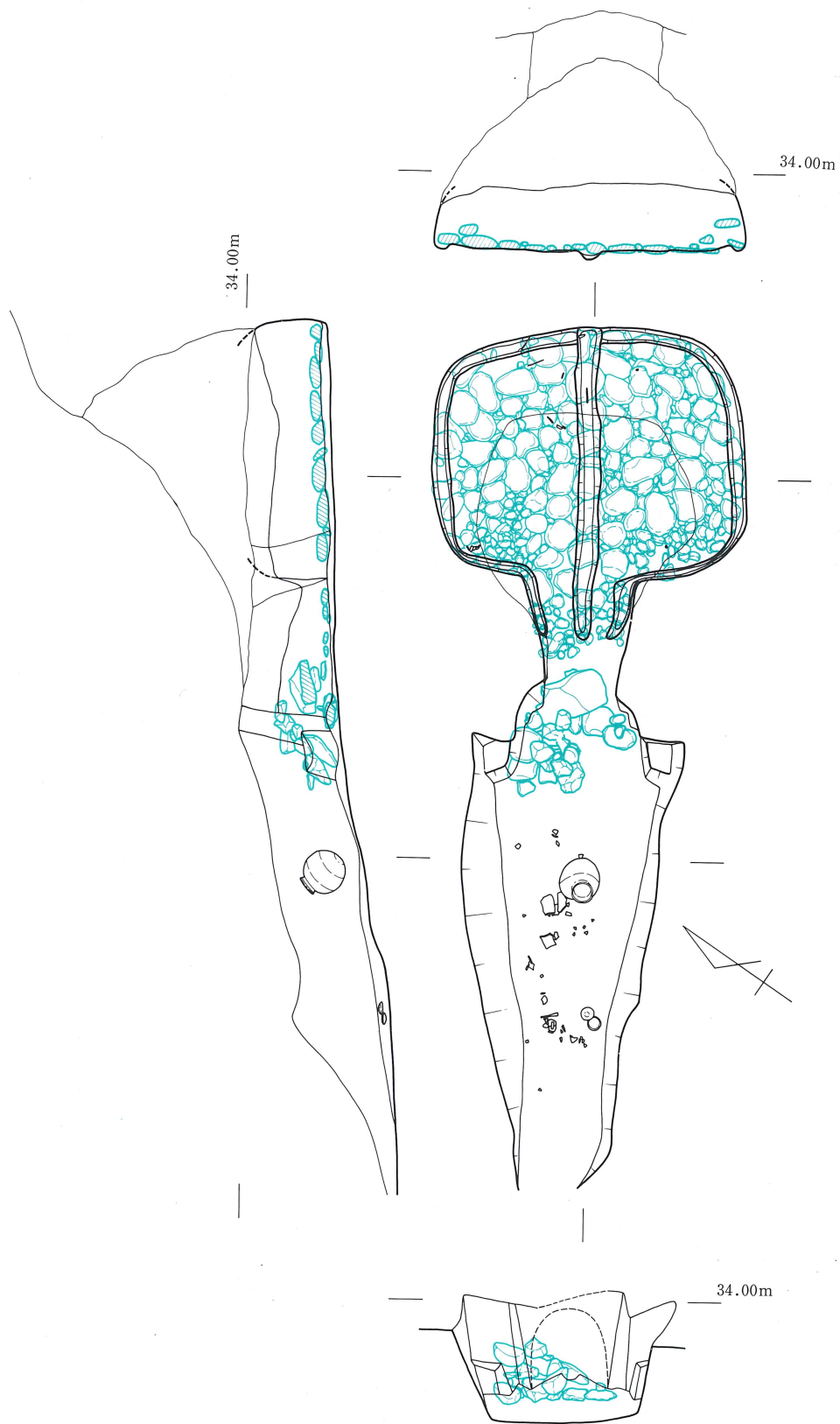
第1層群(Ⅷ・Ⅸ層)は床面全体に堆積する。羨門部付近は追葬時に上面をカットされている。層厚は25~40cm程度を測る。下層は基盤層を利用した埋土であり、層厚は15cm前後を測る。この層中から坏のセット(第336図6)が出土した。上層も墓道全体に堆積していて、若干風化傾向が認められる。最大厚で約20cmを測るが、羨門部付近はカットされている。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定している。

第2層群(Ⅵ・Ⅶ層)は、閉塞下面から墓道全体に堆積し、上部を第3層群によってカットされている。上層群との境からは安山岩板石1枚・地山礫5個が検出された。これらの石は追葬時に取り除かれたものと推定している。本層群より出土する土器は、第3層群のものと接合するが、これは第3層群形成時に破壊されたものである。本層群は、第1次追葬時の埋土と考える。本層中より坏蓋、坏身、高坏、鉄鏝(第336図3、4、7、10)が検出された。

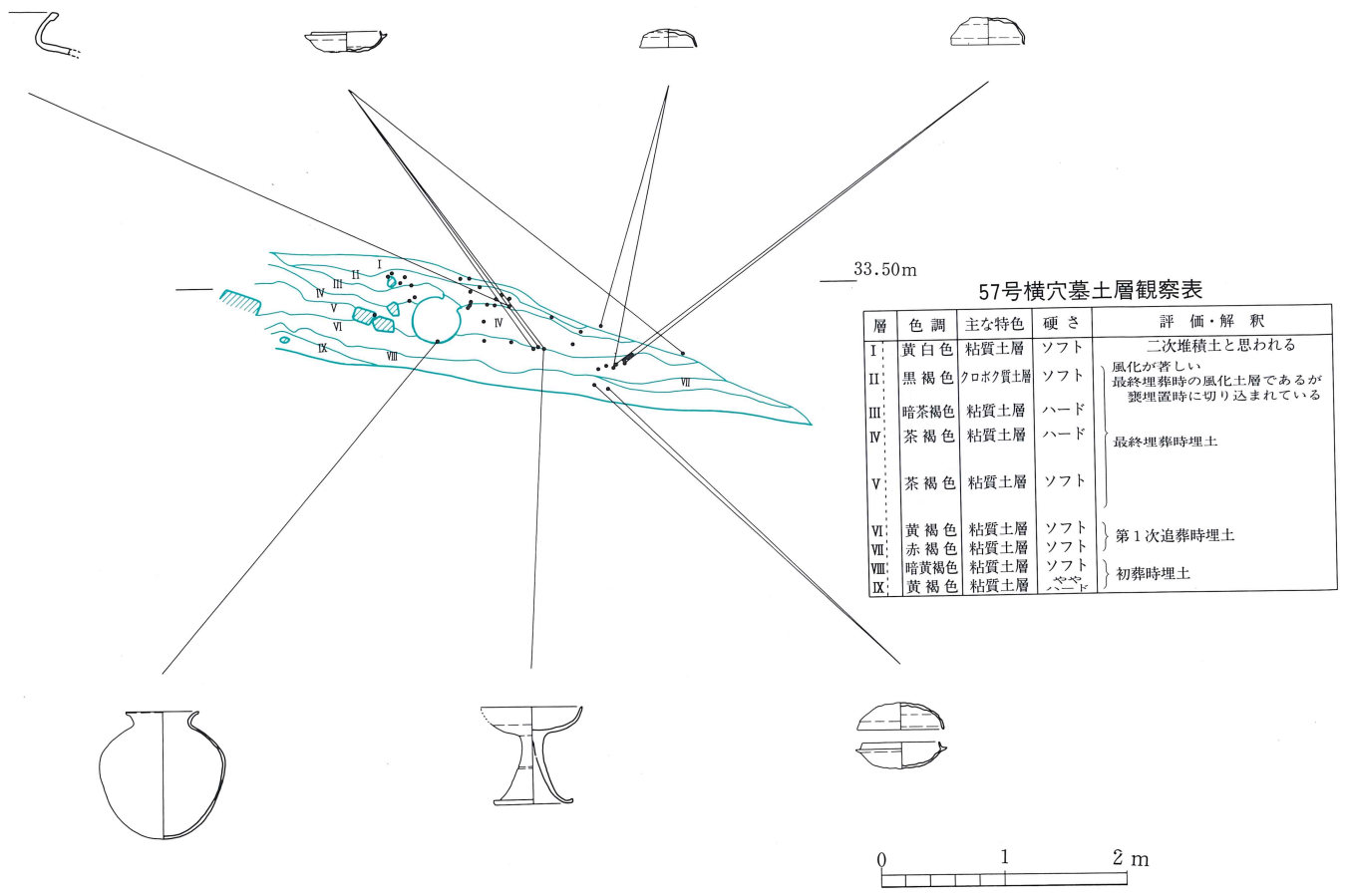
第3層群(Ⅱ~Ⅴ層)は閉塞石を覆い墓道全体に堆積する。本層群はさらにⅢ~Ⅴ層の地盤層を利用した埋土と、Ⅱ層の風化土に分離される。本層は最終埋葬時の埋土とその風化層と考えられる。なお、本層中より出土した完形の甕は、Ⅱ層面より掘り込んで埋置しているところから、最終埋葬後に墓道中央に正置されたものと考えられる。

第4層群(Ⅰ層)は後世の2次堆積土であり、本横穴墓の墓道内埋土ではないものと推定している。

本横穴墓は土層観察の結果、1~3層群が墓道内埋土と推定している。人骨の検出もなく、これ以上の土層の切り合いを確かめることは不可能であった。この結果、最低3度の埋葬行為と1度の埋葬に関わらない祭祀儀礼が行われたと推定している。



第334图 57号横穴墓平·断面图



第335図 57号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

2) 羨道・玄室

羨道は床面で幅0.69m、長さ1.13mを測る。床面は多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦に玄室へと続いている。羨道部の玄室寄りの部分では拳大の河原円礫を敷き詰めており、床面には玄室より続く排水溝が検出された。天井部は崩落のため明確ではない。

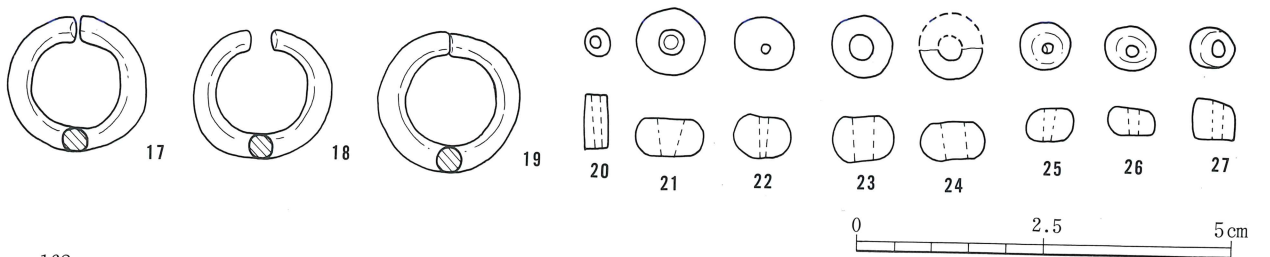
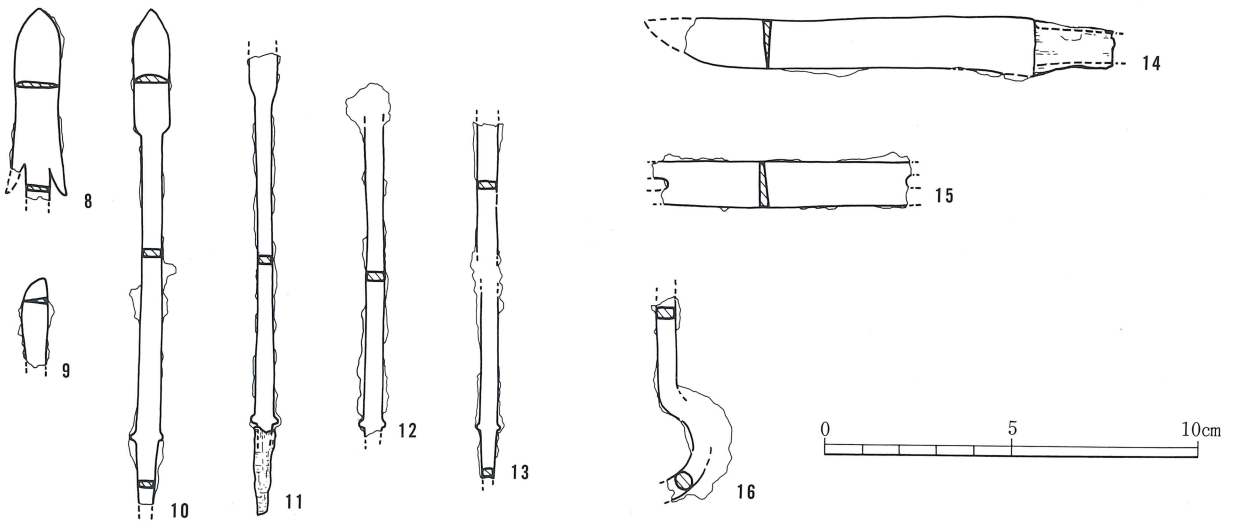
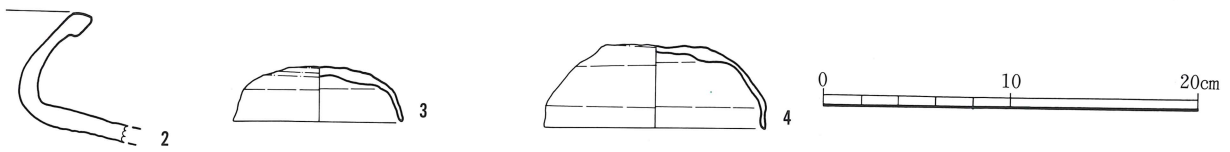
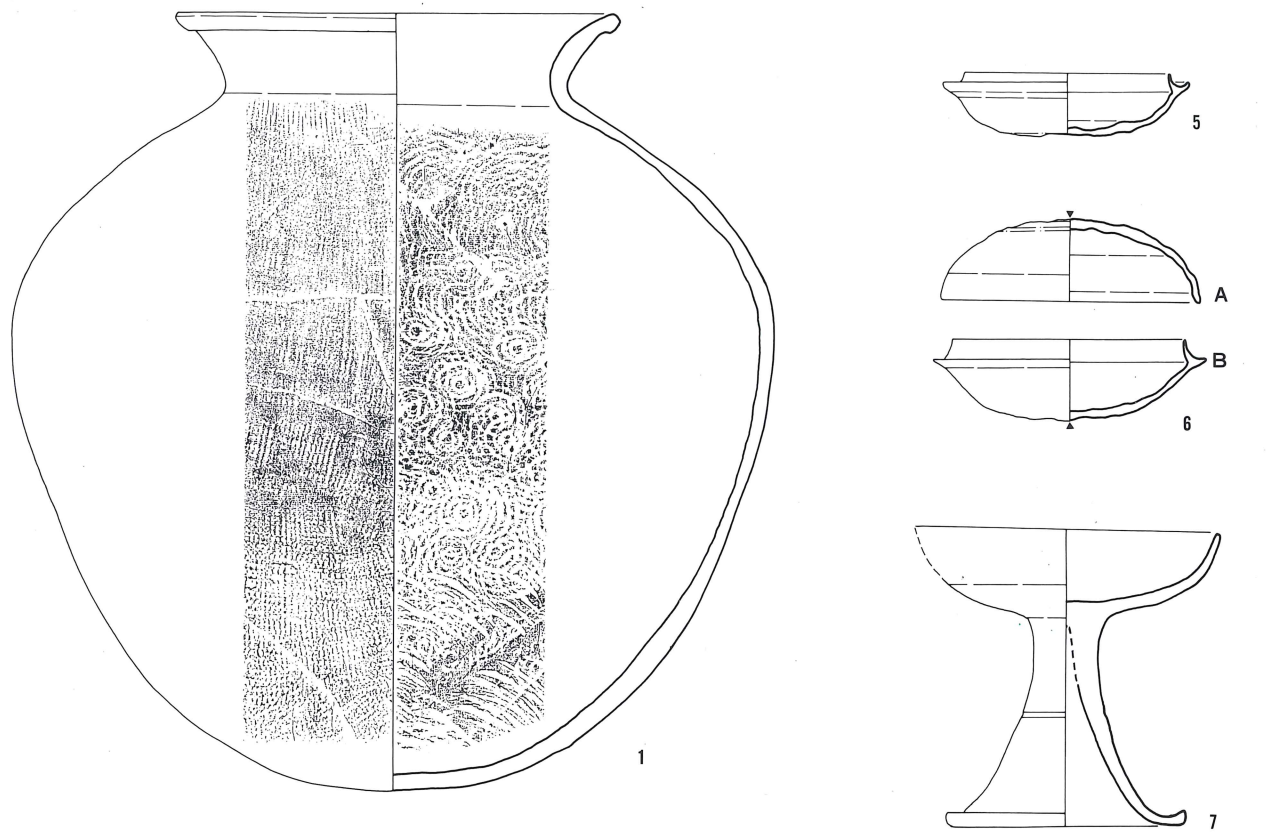
玄室は天井部が削平されていて明確ではないが、ドーム形を呈すと思われる。高さは不明である。長さは2.3m、幅2.85mで隅丸長方形を呈している。玄門幅は1.05mを測る。長さ2.35m、幅2.42mを測り、ほぼ円形の様相を示す。床面には30cm前後の扁平な河原円礫を敷きつめている。その後河原円礫の隙間に直径10cm前後の小円礫を補填している。敷石除去後の床面は標高33.15m～33.2mを測り、ほぼ平坦であった。この床面は羨道部からほぼ同レベルで玄室へと続く。玄室内には幅10～20cm、深さ5～10cm前後の排水溝が壁に沿って巡っている。さらに中央部にも1条の排水溝が検出され、これらが羨門～羨道部へと続く。この排水溝は羨道部中央で消滅している。

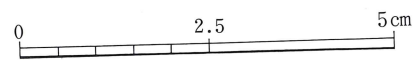
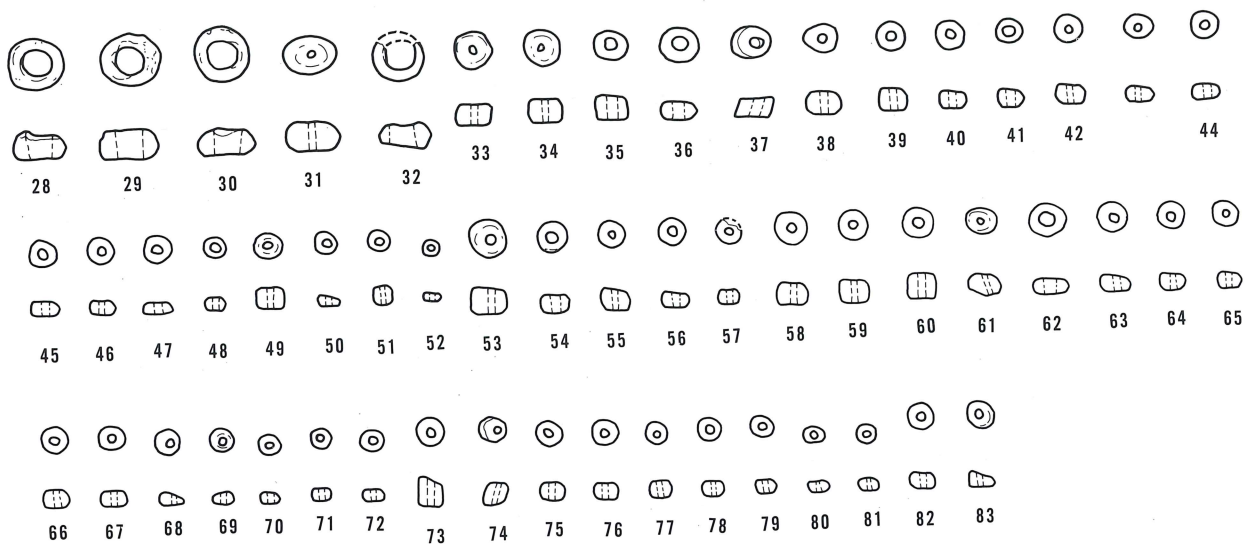
つぎに敷石と排水溝の関係であるが、敷石の重なり具合・配列から見て排水溝構築後、玄室奥壁中央部から玄門に向かって排水溝を覆い隠すように敷石が敷かれ、さらに壁沿いの排水溝を覆い隠すように敷かれている。その後玄室内の空間に敷石を敷いたと推定している。この行為は敷石の配列状況を知る上で貴重な事例である。

3. 遺物の出土状態

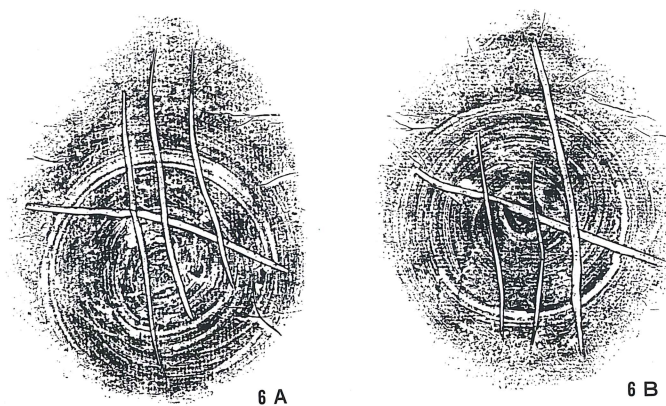
1) 玄室内

玄室内からは鉄製品、装身具が検出された。鉄製品は鉄鏃5、刀子2、馬具の破片(第336図8、9、11～16)である。鉄鏃は奥壁排水溝付近からであり、埋葬時は群をなしていたとおもわれるが、現状では先端部の方向はまちまちである。追葬時或いは落磐等により現位置に移動したと推定している。刀子は玄室中央やや奥壁寄り





第337図 57号横穴墓出土遺物実測図(2)



第338図 57号横穴墓出土土器ヘラ記号

検出された。敷石上面からであるが、先端部の方向はまちまちである。馬具は左袖部分の敷石上面からであるが、破片のため部位は不明である。装身具は耳環3、玉類60（第336図17～27、第337図28～83）である。耳環は、1個は奥壁近辺の敷石上面、1個は右袖部分の床面から出土した。残り1個は土壌洗浄中の発見である。玉類は管玉1、小玉47、丸玉12であるが、小玉4個が右側壁付近の敷石上面から検出された他は土壌洗浄中の発見である。

2) 墓道内

墓道内埋土からは層位で触れたように墓道入口から約1.5mの右側で坏のセット（第336図6）が出土した。さらに中央付近で坏蓋2、坏身1、高坏1、鉄鏃1（第336図3、4、7、10）が破碎されて出土した。両者とも初葬時の埋土である。最終埋葬上面の埋土からは完形の甕1個と甕の口縁胴部の破片（第336図1、2）が出土した。なお、閉塞施設の礫上中からはほぼ完形の土師器高坏が出土したが、遺物整理中に紛失した。（友岡信彦）

第132表 57号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	甕	・23.2 ・41.2 ・40.0	口頸部は外反しなからのび、端部は外面に段をもち面をなす。胴部はほぼ円形を呈す。	回転ナデ 同心円タタキ	平行タタキ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
2	甕	・— ・— ・—	口頸部は外反しなからのび、端部は外面に段をもち面をなす。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ後カキ目	青灰色 灰黒褐色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
3	罎蓋	・9.0 ・3.0	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	白色砂粒を含む	良好		
4	坏蓋	・11.8 ・4.4	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り	灰白色	1mm前後の石英粒を含む	不良		
5	坏身	・11.0 ・3.2 ・13.1	たちあがりは内傾してのび、端部はとがりぎみ。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	灰白色	細砂粒を含む	不良		
6 A	坏蓋	・13.8 ・4.3	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 茶灰色	白色細砂粒を含む	良好		外面天井部「卍」
6 B	坏身	・12.3 ・4.3 ・14.5	たちあがりは内傾してのび、端部はとがりぎみ。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 茶灰色	1mm前後の白色砂粒を含む	良好		外面底部「卍」
7	高坏	・16+α ・15.5+α	口縁部は外反しなからのびる。脚部は下外方にのび、端部は面をなし、外面中央部に1本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐色	1～3mmの白色砂粒、角閃石、長石粒を含む	良好	土師器	

第133表 57号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刀部)	刃幅	頸幅	刀部厚	頸厚	備考
8	鉄鎌	5.0以上	4.9	1.2	0.6	0.1	0.15	
9	同上	2.3以上	2.3以上	0.65	不明	0.1	不明	
10	同上	13.1以上	3.3	1.0	0.55	0.2	0.2	
11	同上	12.2以上	1.2以上	0.8	0.4	不明	0.25	
12	同上	8.2以上	不明	不明	0.45	不明	0.25	
13	同上	9.4以上	不明	不明	0.5	不明	0.2	
14	刀子	11.4以上	8.3以上	1.3	0.9	0.2	不明	鹿角製柄残存
15	不明鉄器							
16	馬具							鞍金具の一部

第134表 57号横穴墓出土耳環計測表

(単位：mm, g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
17	銅地銀張	19×17.5	3.5×3.5	2.2	緑青 保存良好
18	〃	18.5×17	〃	2.1	〃
19	銅地金張	18×18	〃	2.2	〃 保存良好

第135表 57号横穴墓出土玉類計測表

(単位: mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
20	管玉	碧玉	灰緑	7.5	4	1	0.15	両面穿孔
21	丸玉	ガラス	緑	9	5	3~1.5	0.6	腐蝕
22	〃	土	黒	6	〃	1	0.3	
23	〃	ガラス	緑	8.5	6	3	0.95	
24	〃	〃	緑	9	5.5	〃	0.55	半欠 白く腐蝕
25	〃	〃	藍	7	4.5	1.5	0.3	
26	〃	〃	〃	5	4	1.5	0.1	
27	〃	〃	〃	6.5	4.5	1	0.35	
28	〃	〃	緑	7	3	3.5		白く腐蝕
29	〃	〃	〃	8	4	〃		〃
30	〃	〃	〃	7.5	3	〃		〃
31	〃	〃	藍	7	4	1.5	0.3	〃
32	〃	〃	緑	7.5	3.5	4	0.2	半欠 白く腐蝕
33	小玉	〃	藍	5	3	1		
34	〃	〃	〃	4.5	〃	〃		
35	〃	〃	〃	4	〃	1.5		
36	〃	〃	〃	5	2.5	2		
37	〃	〃	〃	4	2	1.5		
38	〃	〃	〃	4.5	3	1		
39	〃	〃	〃	4	〃	〃		
40	〃	〃	〃	〃	2	〃		
41	〃	〃	〃	〃	2.5	1.5		
42	〃	〃	〃	〃	〃	1		
43	〃	〃	〃	〃	2	〃		
44	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
45	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
46	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
47	〃	〃	〃	4	2	〃		
48	〃	〃	〃	3	〃	〃		
49	〃	〃	〃	4	3	〃		
50	〃	〃	〃	3	1.5	〃		
51	〃	〃	藍	2.5	2.5	1		
52	〃	〃	〃	〃	1	〃		
53	〃	〃	〃	5	3.5	〃		
54	〃	〃	〃	4	2.5	1.5		
55	〃	〃	〃	〃	〃	1		
56	〃	〃	〃	〃	2	1.5		
57	〃	〃	〃	3	〃	1		
58	〃	〃	青	4	3	〃		
59	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
60	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
61	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
62	〃	〃	〃	4.5	2	2		
63	〃	〃	〃	4	〃	1		
64	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
65	小玉	ガラス	青	3	2	1		
66	〃	〃	〃	4	2.5	〃		
67	〃	〃	〃	3.5	2	〃		
68	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
69	〃	〃	〃	3	〃	〃		
70	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
71	〃	〃	〃	3	〃	〃		
72	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
73	〃	〃	青緑	3.5	3.5	〃		
74	〃	〃	〃	3	3	〃		
75	〃	〃	〃	3.5	2.5	〃		
76	〃	〃	〃	〃	2	〃		
77	〃	〃	〃	3	〃	〃		
78	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
79	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
80	〃	〃	〃	2.5	1.5	0.5		
81	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
82	〃	〃	緑	3.5	2	1		
83	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

58号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

58号横穴墓は南支群北寄りの斜面に立地し、西方向に開口する。全長は約2.2m、標高は前庭部前面の上場で33.1m前後を測る。玄室主軸方向はN-56.5°-Eを測る。保存状態は玄室天井部の陥没などがみられ必ずしも良好とは言い難い。本横穴墓は斜面の遺構検出作業中に玄室天井部の陥没が認められ、横穴墓の存在が確認された。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の有無の確認、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の落石・崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物・礫床施設の調査を実施したが、前庭部埋土はほとんど流失していた。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ約 $0.6 + \alpha$ m、幅は前面で約0.5mを測り、ほぼ長方形の様相を呈している。前庭部入口は斜面下位に立地する関係上、旧表土は流失しており明瞭ではない。前庭部床面は緩い凹凸があり、羨門部に向かって約7°の傾斜で下降し羨門部に達する。側壁の傾斜は左右で若干違うが60~70°を測る。羨門部分は特に天井部分と羨門壁部において崩壊が著しく、旧状を大きく損なっている。このため高さは推定不能であるが、幅は0.45mを測る。

閉塞施設は大形の扁平河原円礫と地山礫を使用している。羨門床面には河原円礫3個が倒れ込んでいる。これは追葬時に引き倒されたものと思われる。確認された閉塞施設は河原円礫1個と地山礫4個で羨門部を覆っている。閉塞施設の状況は以上であり、最終埋葬時にはごく簡単な施設だったことがうかがえる。この配石の後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で2層群3層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群(Ⅱ層)は、ほぼ床面から斜面に堆積する。層厚は5cm前後を測る。羨門部付近は追葬時にカットされており、羨門部より30cm付近から切り込まれている。本層群中に追葬時に引き倒されたものと思われる閉塞石を検出した。本層群を初葬時の前庭部内埋土と推定している。

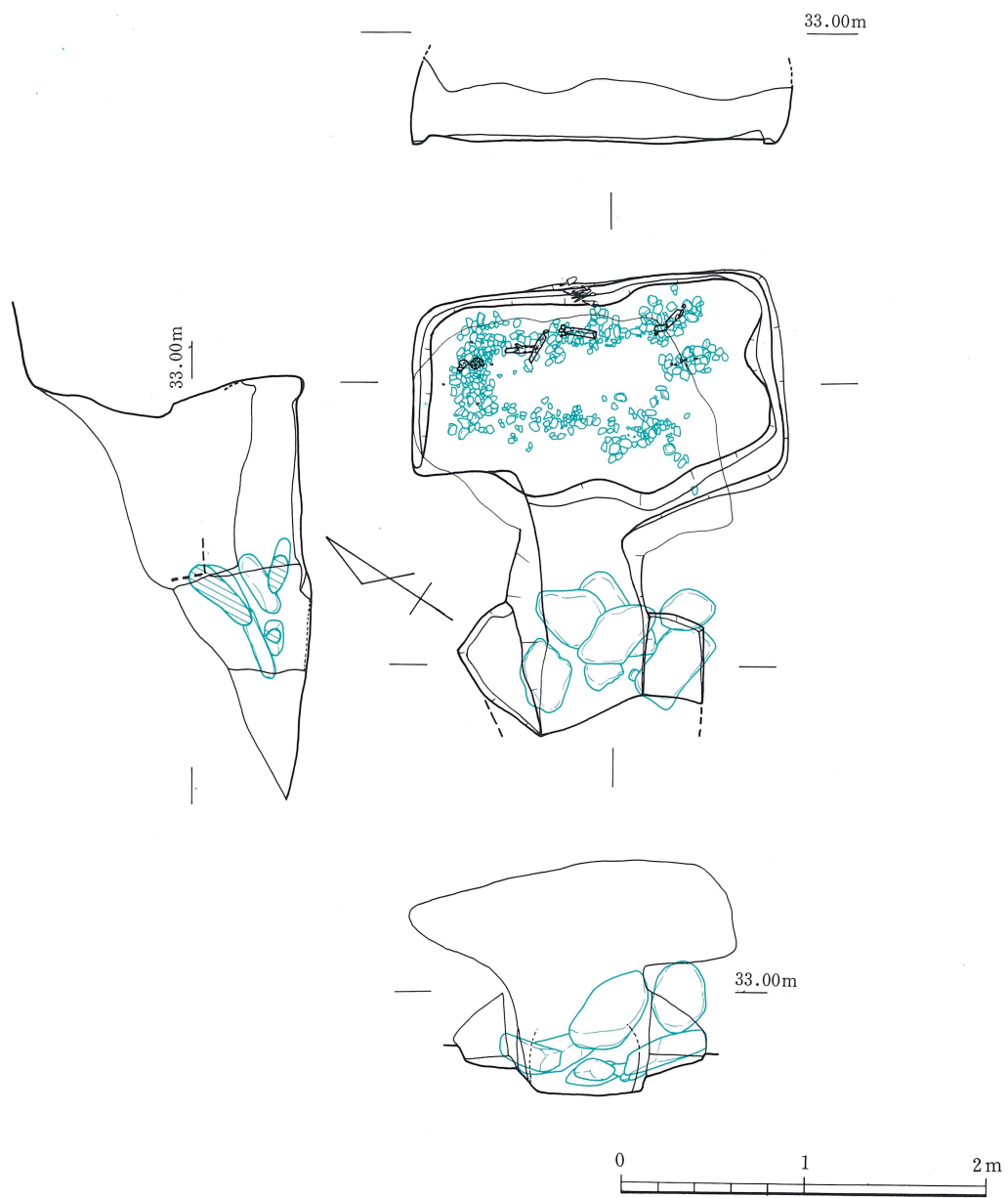
第2層群(Ⅰa・b層)は、前庭部前面の閉塞石を覆うように堆積している。土層観察の結果、さらに2層に分層できる。下層は上層と比較するとやや粘質土層である。本層群は若干の腐植土が混入しており、風化現象がみられる。本層群を2度目の埋葬行為時の前庭部内埋土と推定した。

以上の観察結果から、本横穴墓では少なくとも2回以上の埋葬が行われたと推定される。

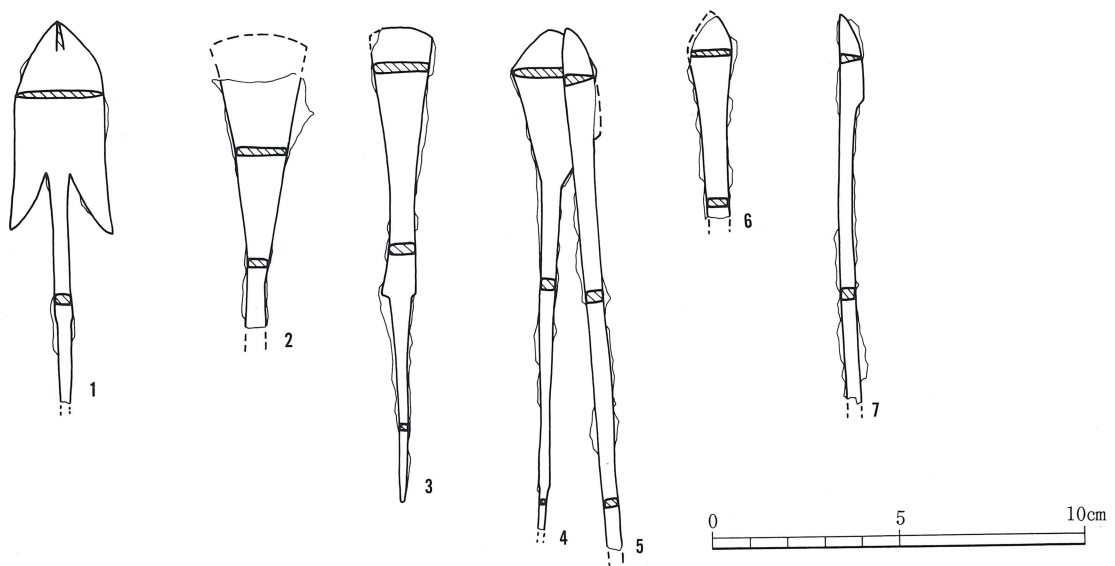
2) 羨道・玄室

羨門部は床面で幅0.45m、長さ0.47mを測る。床面は約10°前後の緩い傾斜で玄室に向って下降し、玄門部分で最深となる。天井部は崩落のため高さ等は不明である。

玄室は天井部が陥没していて明確ではないが、ドーム形を呈すとおもわれる。高さは計測不能である。長さ1.32m、幅2.0mを測り、ほぼ長方形の様相を示す。床面には南北に長さ1.5m、幅0.7mの範囲で直径5cm前後の小円礫を敷きつめて礫床としているが、中央部分には小円礫は存在しない。また両側壁から奥壁にかけての床面には幅約10cm、深さ約5cmの排水溝を巡らす。敷石除去後の床面は標高32.4mを測り、ほぼ平坦であった。



第339图 58号横穴墓平・断面图



第340図 58号横穴墓出土遺物実測図

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 玄室内からは骨片、鉄製品が検出された。骨片は玄室礫床の東端で検出された。敷石上面からの検出であり、頭や上肢骨、下肢骨、歯などであった。破片となっているため詳しいことは判らないが、人骨の出土状態からみて、少なくとも2体は埋葬されていたであろう。(田中良之)

b) 副葬品 鉄製品は鉄鍬の一群(第340図1~7)が検出された。鉄鍬は奥壁沿い中央に、先端を南東に向けて10本検出した。少なくともこの付近は攪乱された様子はなく原位置を保っていると推定される。(友岡信彦)

第136表 58号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
1	鉄鍬	10.2以上	5.8	2.4	0.4	0.2	0.3	
2	〃	6.6以上	5.4以上	2.0以上	0.5	0.2	0.2	
3	〃	12.6以上	7.2	1.6	0.55	0.25	0.15	
4	〃	13.4以上	4.2	2.2	0.5	0.25	0.3	
5	〃	14.0以上		0.8		0.25	0.3	
6	〃	5.6以上			0.6	0.2	0.2	
7	〃	10.3以上	2.5	0.6	0.4	0.25	0.3	

59号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

59号横穴墓は南支群北よりの斜面上位に立地し、南西方向に開口する。全長は10.64mで、標高は墓道入口で約32.5mを測る。玄室主軸方向は、 $N-56.5^{\circ}-E$ を測る。保存状態は、墓道上部を中世の溝が横断するもののおおむね良好である。調査以前には横穴墓の存在を示すような落ち込み等は認められなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設の除去後、玄室内の崩落土等の除去作業を行い、遺物・礫床等の検出を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道部は長さ約6.06m、幅は墓道入口で約1.2m、羨門付近で推定上部幅3.1m、底面幅1.85mを測る。墓道床面は、凹凸を持ちながらも約 6° の緩やかな傾斜で羨門に向かって上がる。羨門付近右側にのみ幅20cm前後、高さ50cmの方形基壇を造り出している。排水溝等の施設は認められない。羨門部付近の側壁は1号溝によって削平されているが、推定高2mで 70° 前後の傾斜で立ち上がる。この右側壁の羨門ぎわに長さ0.85m、幅0.9m、高さ0.65mの不定円形のポケット状横穴が墓道床面から0.65mほど上のところに付設されている。この横穴には土器の配列埋置が認められた。羨門壁は1号溝によってほとんど削平されている。

羨門は天井が崩れており、幅は0.8mを測る。閉塞施設は最終埋葬時の状況であり、羨門を覆っていない。最終埋葬時に、2枚の板石を墓道入口方向に倒して使用した状況がうかがわれる。またこの板石の根石として9個の河原円礫が板石の下面に認められた。これらは床面から40cm浮いた状態で検出された。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり全体で4層群14層に区分できた。以下堆積順に説明する。

第1層群(Ⅷa・b・c・Ⅸ層)は閉塞石下面より墓道入口付近までもっとも厚い所で30cm前後水平に堆積し、上面は第2層群によってカットされている。本層はさらに2層に区分される。(1)下層(Ⅸ層)は基盤層の2次堆積土である。上層とは漸移的变化をする。(2)上層(Ⅷa・b・c層)も基盤層の2次堆積土であるが上層になるほど風化しており軟質である。Ⅷc下層より須恵器坏身、坏蓋、甕片(第344図21、23、36)が破碎された状態で検出された。本層群は初葬時の埋土と考えられる。

第2層群(Ⅶ層)は閉塞石下面より墓道入口方向に約4m程レンズ状に堆積し、層高は20cmを測る。上面を3層群によってカットされている。性状は基盤層の二次堆積土で固く締まっている。風化は認められない。層中上位に須恵器壺(第345図30)を包含する。本層群は第1次追葬時の埋土と考えられる。

第3層群(Ⅳa・b・c・Ⅴa・b・Ⅵ層)は羨門から墓道入口付近まで、40~70cmの厚さで斜めに堆積している。本層はさらに3層に区分される。(1)下層(Ⅵ層)は羨門から墓道入口まで堆積する。やや風化した基盤層の2次堆積土で固く締まっている。(2)中層(Ⅴa・b層)は羨門壁下面から墓道入口付近まで堆積する。風化した基盤層の2次堆積土であり羨門に近いほど風化が進んでいる。(3)上層(Ⅳa・b・c層)は(2)層の風化土層であり、上位層ほど風化が激しい。遺物は、Ⅵ層下位で須恵器甕、平瓶、壺(第344図26、28、第345図31)が、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ層中位に須恵器甕、提瓶、高坏(第344図24、25、第346図33~36)などの破碎散布状態と砥石(第345図32)が認められた。本層群は最終埋葬時の埋土及びその風化土と考えられる。

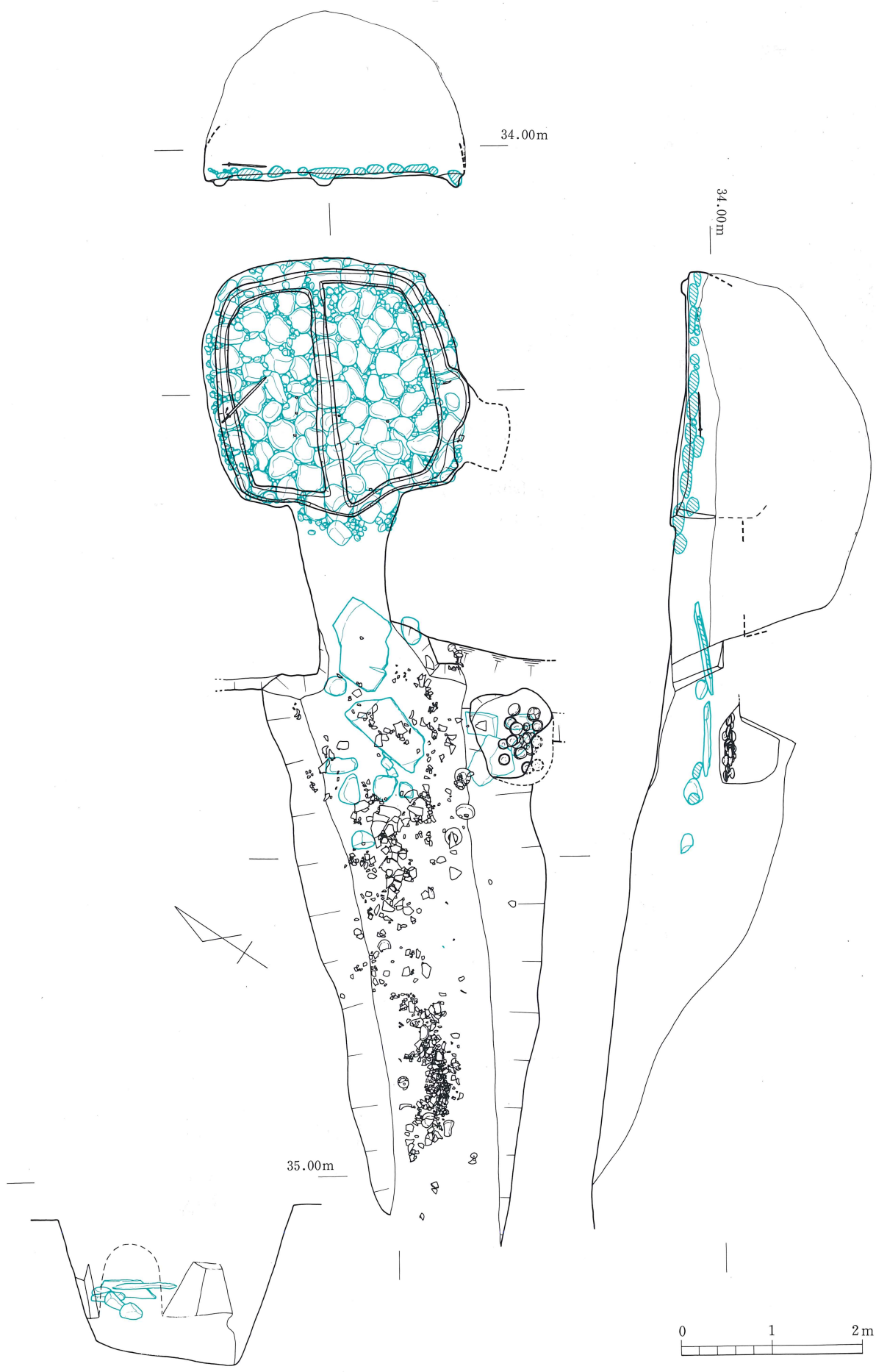
また、ポケット状横穴は本層から切り込まれており、最終埋葬時に関わるものと考えられる。

第4層群(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層)は羨門から4mほど堆積した近年の造成土である。

以上の土層観察結果から本横穴墓では少なくとも3回の埋葬が行われたと考えられる。

2) 羨道、玄室

羨道は長さ1.98m、玄門幅1.28mを測る。天井は全て崩落しており高さは不明である。玄室は長さ2.6m、裾



第341图 59号横穴墓平·断面图

部幅2.35m、奥壁幅2.2m、中央最大幅2.9mの胴張り隅丸方形を呈し、床面には幅20cm前後の排水溝が周壁および中央に設けられている。床面はほぼ平坦であり、玄室のみ人頭大の川原円礫を全面に敷き詰めている。玄室内の敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に広げるように行い最後に5～10cmの小礫を円礫の隙間に補填している。天井は崩落が激しく、形態はドーム形を呈すと推定されるが床面からの高さは不明である。羨道とはくびれで境界を設けている。また、右側壁面に幅0.7m、長さ0.5m、高さ0.3mの龕状の横穴を穿っている。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

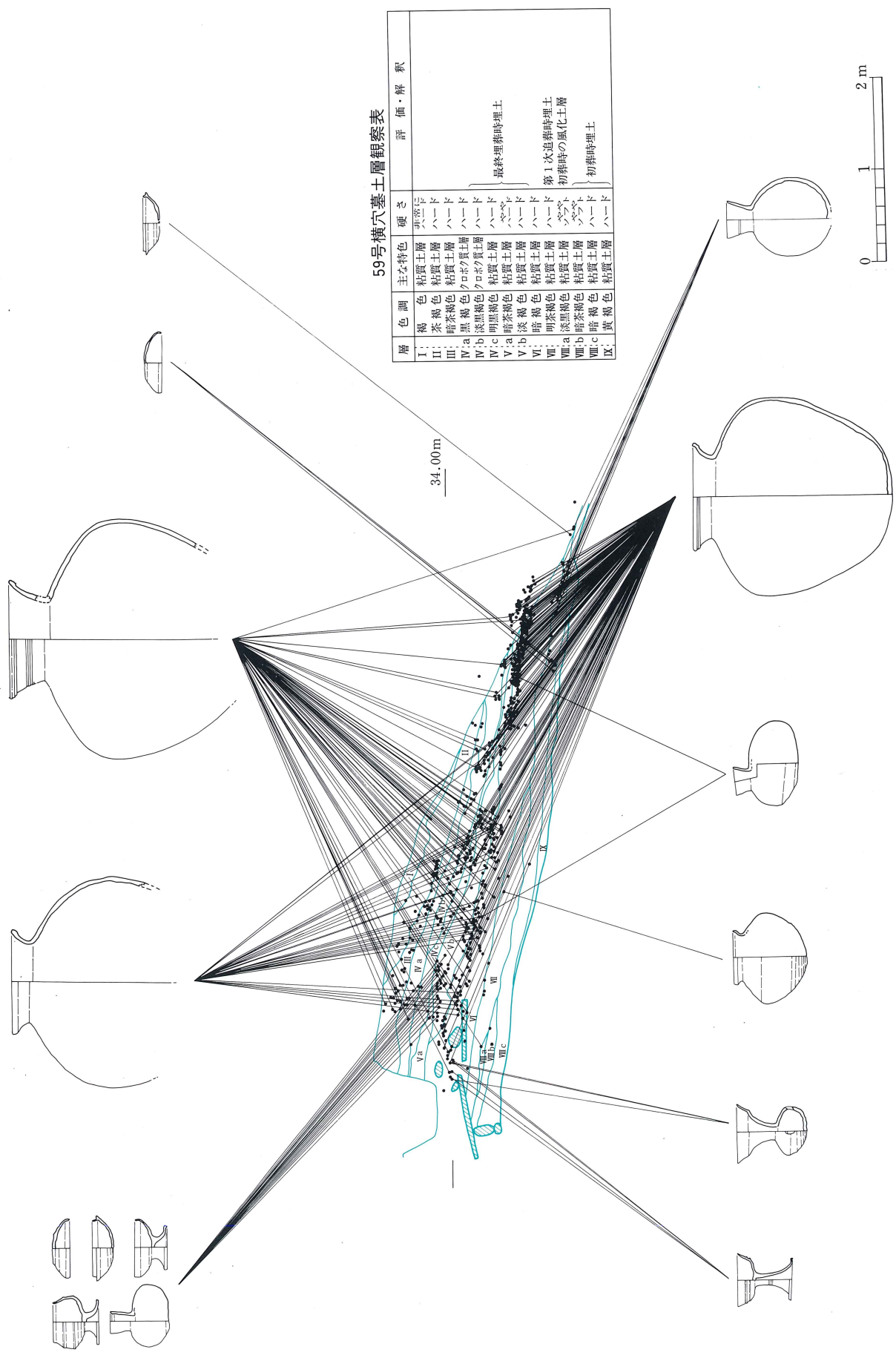
玄室内には天井部の崩落土がかなり認められたが、清掃後に象嵌直刀、鉄鏃、刀子、銅釧、耳環、玉類、須恵器甕片が検出された。直刀（第347図119）、鉄鏃は中央左側壁ぎわに刃先を奥壁に向けて、刀子（第347図118）は中央右側壁ぎわに刃先を向けて、耳環（第347図37～43）は中央付近から羨道寄りに散在的に石間に落ちこんでいるが、ほぼ原位置にあるものと考えられる。銅釧は玄門付近右側で発見されたが、保存状態が悪く取り上げ不能であった。須恵器甕片は右側壁ぎわ裾部寄りで発見された。これは墓道出土甕（第346図36）に接合する。

2) 墓道内

墓道内の遺物の出土層位については、墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状況について述べる。本墓道より多量の土器が検出された。まず、初葬時には墓道入口付近に須恵器坏蓋、坏身、甕（第344図21、23、第346図36）を破片で検出した。第1次追葬時には墓道中央右側で口縁部を打ち欠いた須恵器壺（第345図30）を正置していた。最終埋葬時には羨門右コーナー付近で須恵器高坏、甕（第図26、27）の一括埋置が、中央右側壁ぎわで須恵器坏蓋、平瓶、壺（第344図22、28、第345図31）を倒置した状態の一括埋置が、墓道入口付近中央で、砂岩製の大型砥石（第345図32）がそれぞれ検出された。また、墓道全面で須恵器甕、提瓶（第345図33、34、第346図35、36）の破碎散布状態が検出され、甕は55、61号横穴墓墓道出土のものと接合する。なお、ポケット状横穴内では基底部に安山岩製板石を1枚敷き、その上に須恵器坏蓋・身2、坏蓋3、坏身9、高坏4、平瓶1、脚付壺1（第344図1～20）が配列埋置状態で検出された。（吉田 寛）



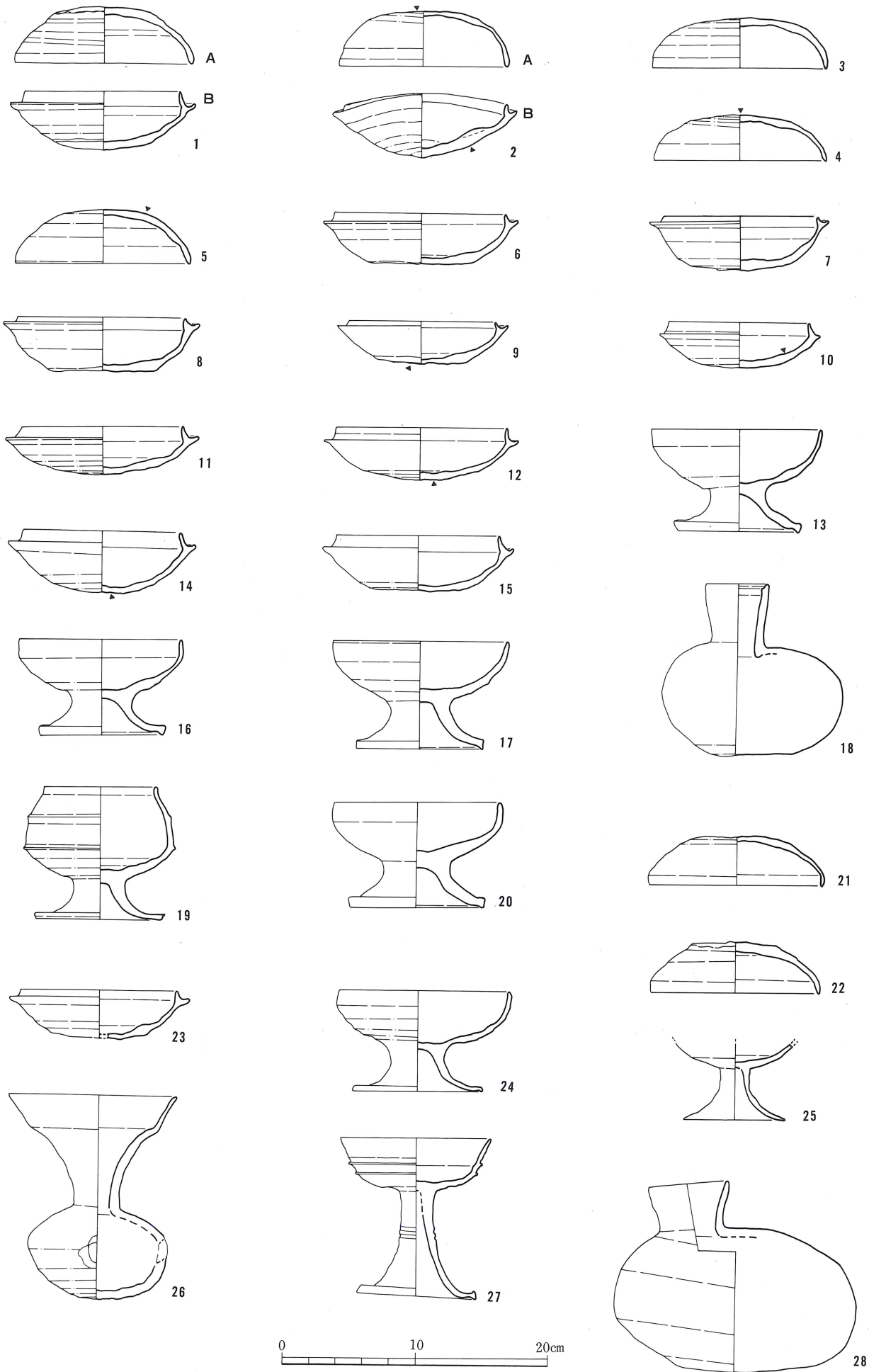
第342図 59号横穴墓ポケット状横穴遺物出土状態



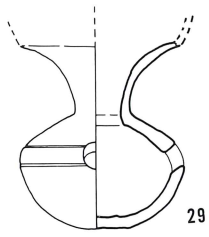
59号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I	褐色	粘質土層	中等	最終埋葬時埋土
II	赤褐色	粘質土層	ハード	
III	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
IV	黒褐色	粘質土層	ハード	
IV.a	淡黒褐色	粘質土層	ハード	
IV.b	明茶褐色	粘質土層	ハード	
IV.c	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
V	淡緑褐色	粘質土層	ハード	
V.a	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
V.b	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
VI	暗茶褐色	粘質土層	ハード	第1次埋葬時埋土
VII	明茶褐色	粘質土層	ソフト	
VIII	淡黒褐色	粘質土層	ハード	初葬時の風化土層
VIII.a	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
VIII.b	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
VIII.c	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
IX	黄褐色	粘質土層	ハード	初葬時埋土

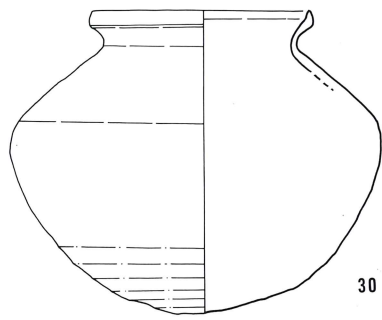
第343図 59号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



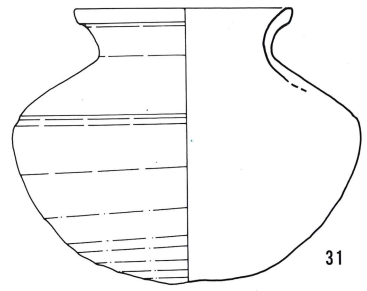
第344图 59号横穴墓出土遺物実測図(1)



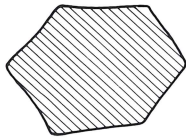
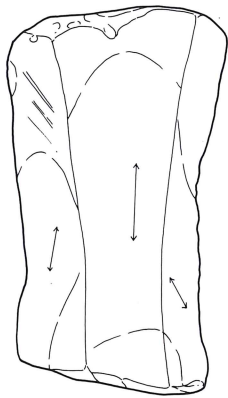
29



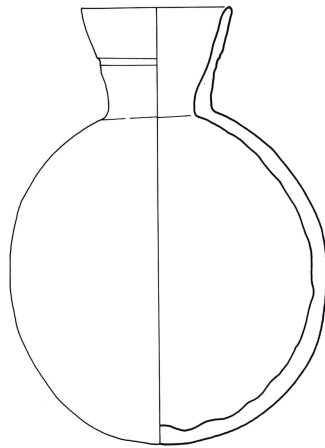
30



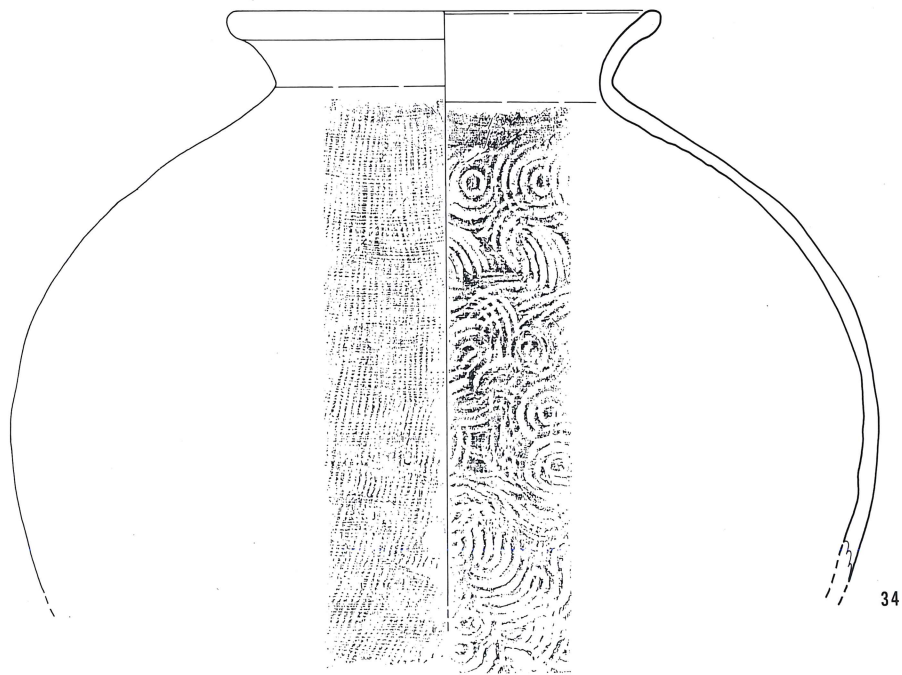
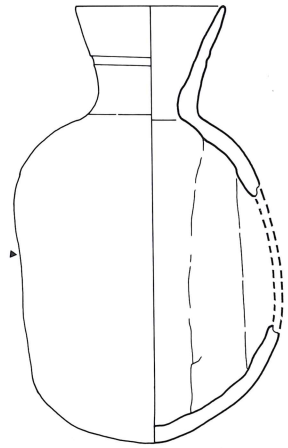
31



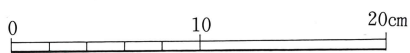
32



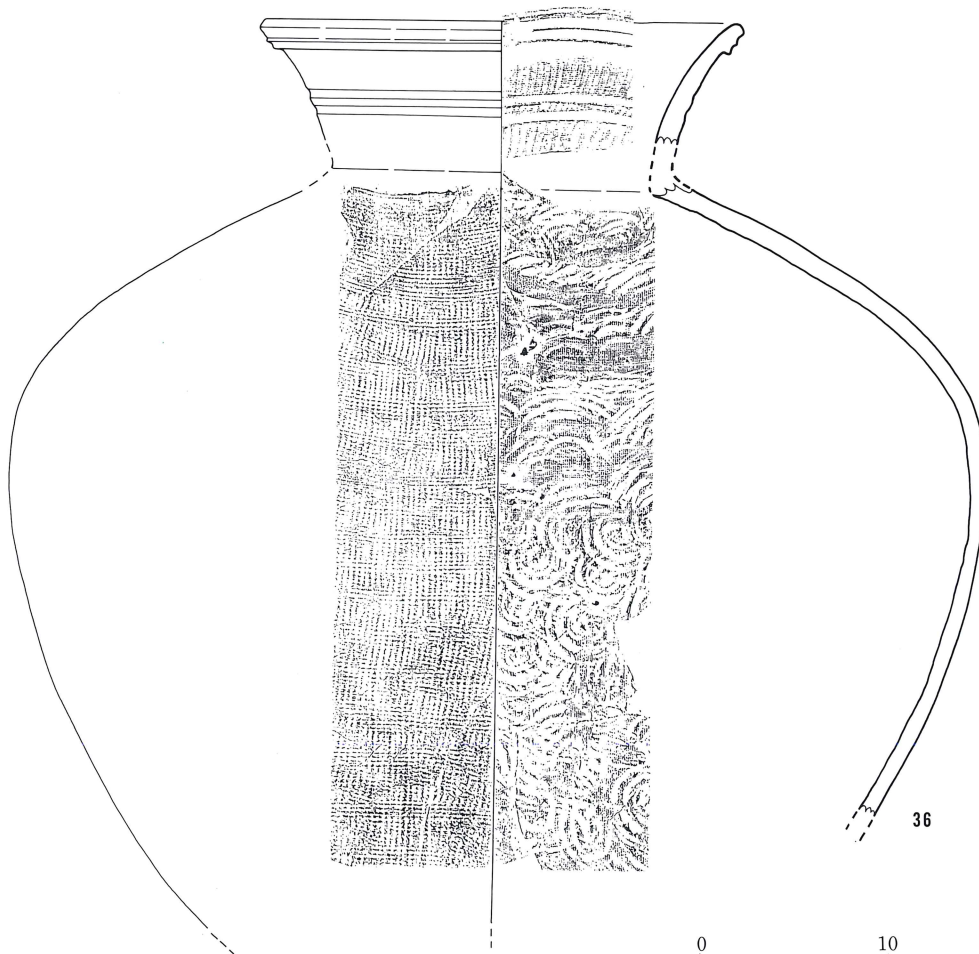
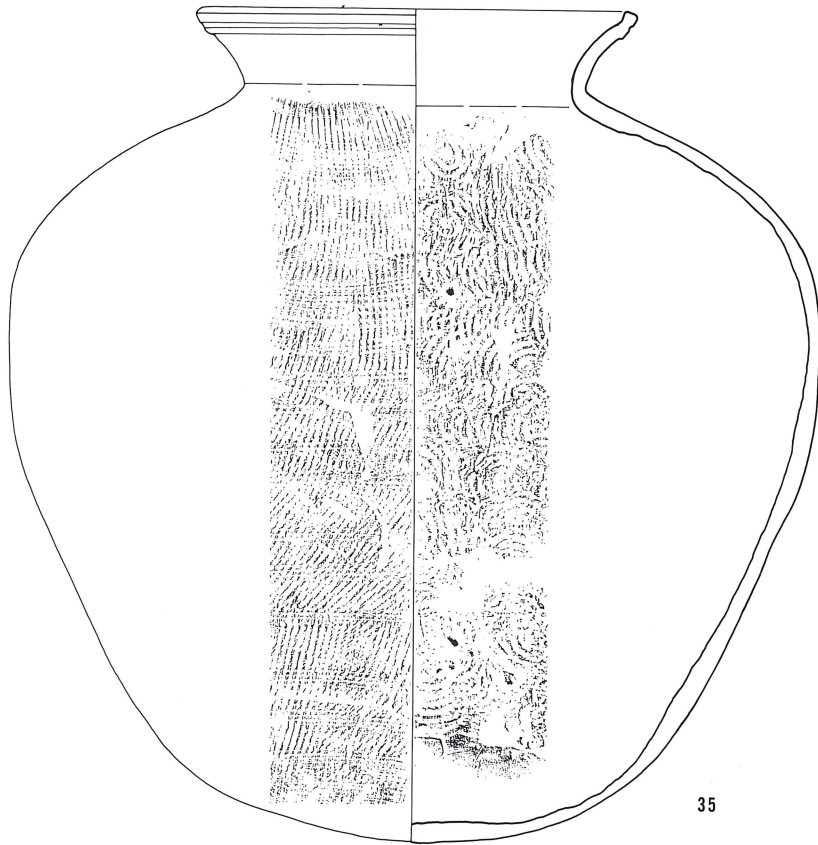
33

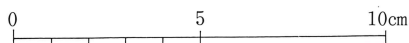
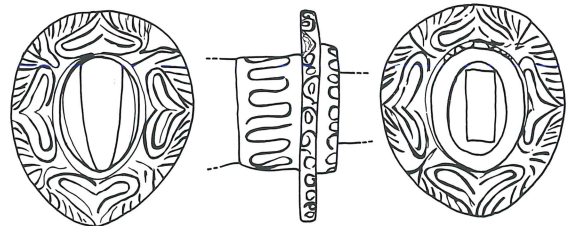
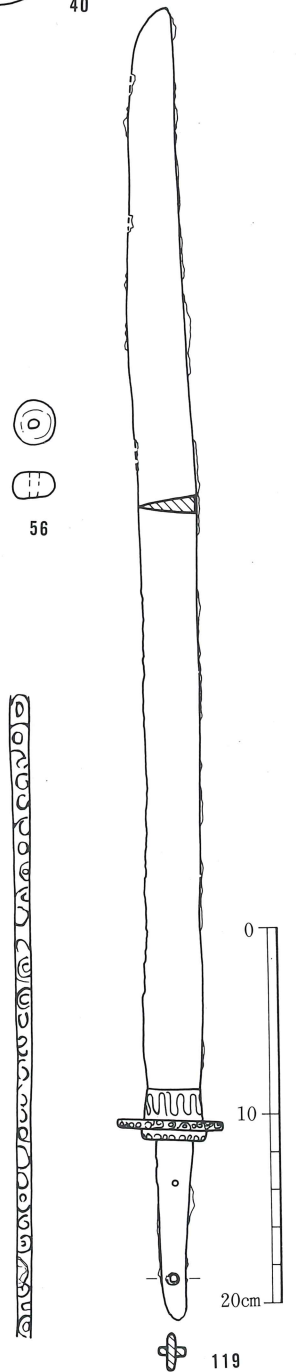
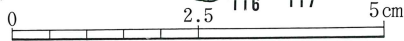
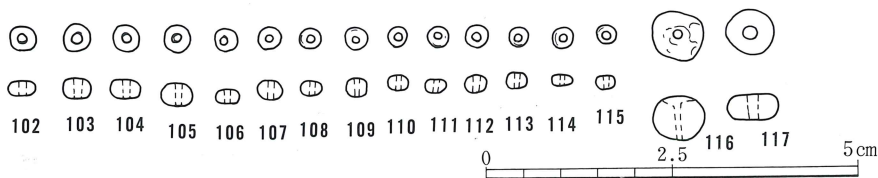
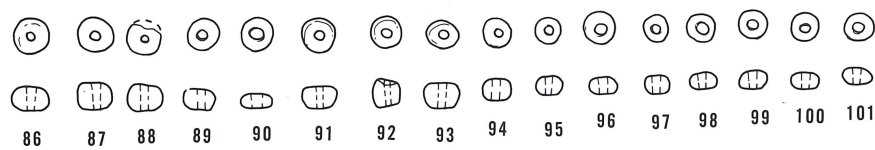
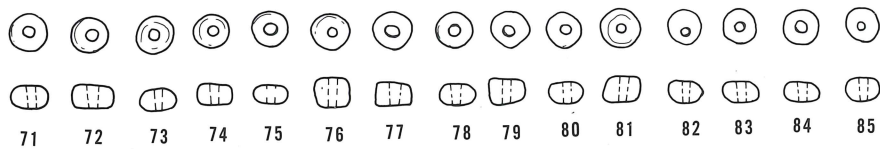
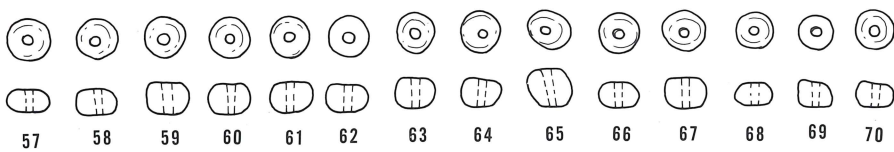
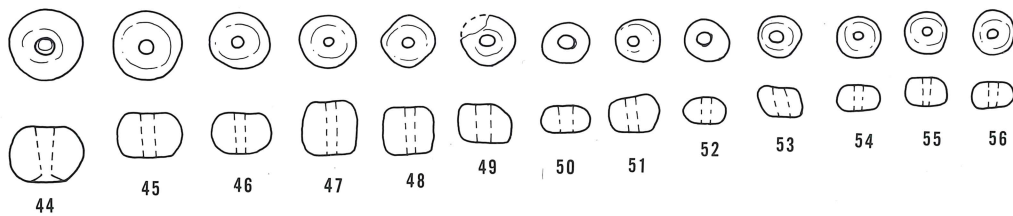
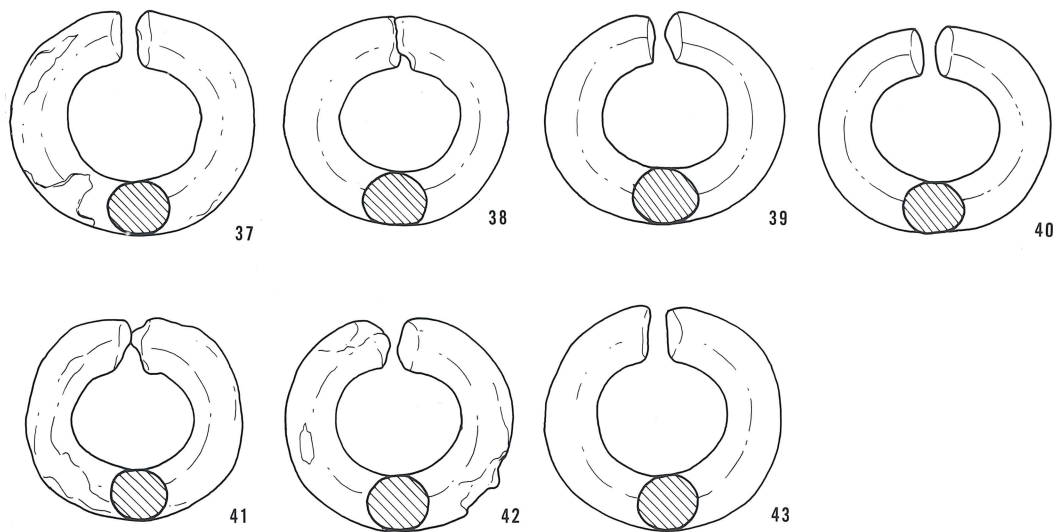


34

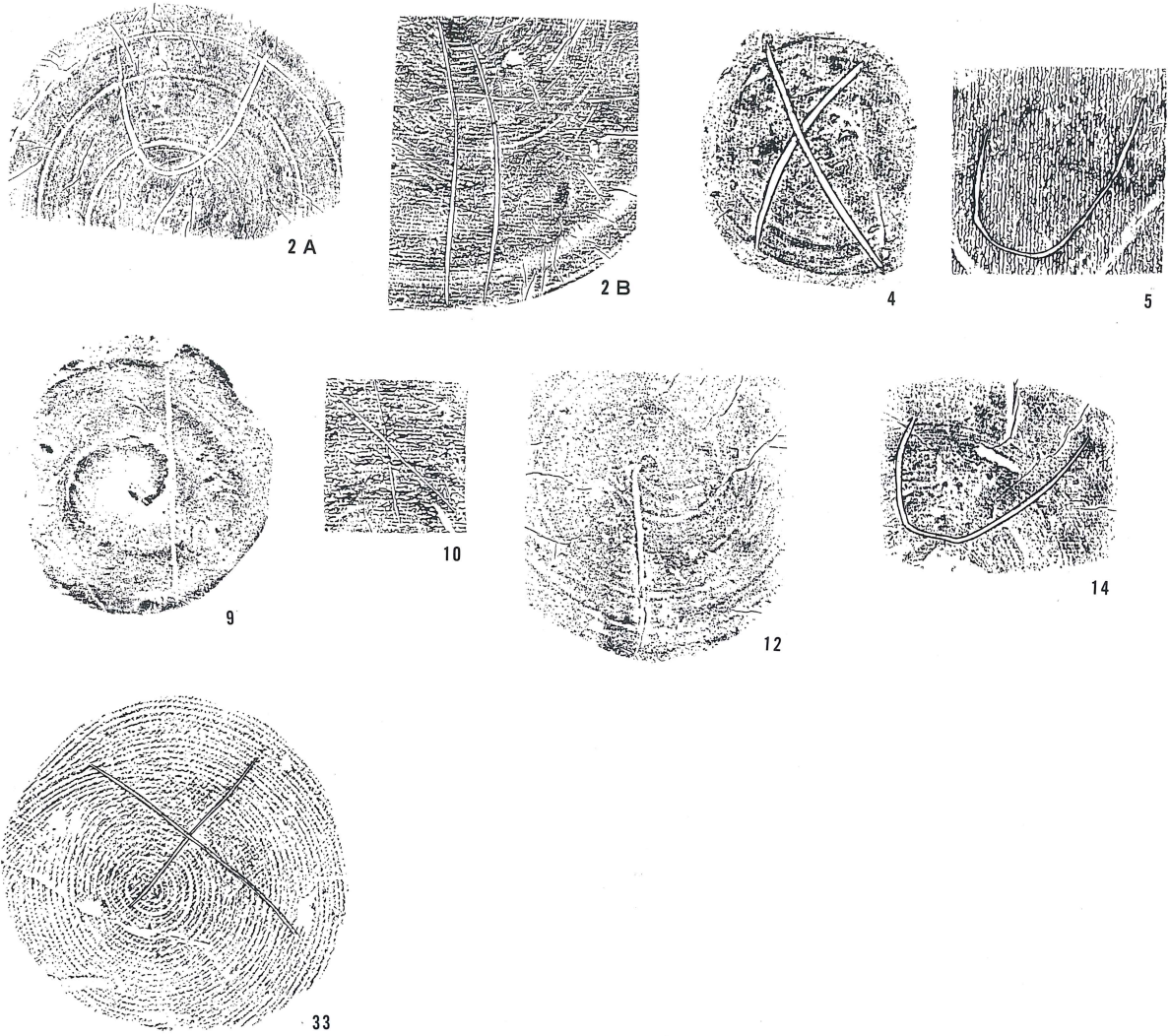


第345图 59号横穴墓出土遗物实测图(2)





第347图 59号横穴墓出土遗物实测图(4)



第348図 59号横穴墓出土土器へラ記号

第137表 59号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1 A	坏蓋	・13.3 ・4.2	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ へら切り未調整	灰白色	石英、長石粒を少量含む	良好	1～20はポケット状横穴出土。	
1 B	坏身	・11.6 ・3.8 ・13.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ へら切り後指オサエ	灰色	精緻	良好		
2 A	坏蓋	・12.6 ・4.0	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転へらケズリ	青灰色 黒灰色	石英、長石粒その他の微細粒を含む	良好		外面天井部「U」

番号	器種	法量	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
		・口径 ・器高 ・胴部最大径		内面	外面	色調	胎土	焼成		
2 B	坏身	・12.2 ・4.8 ・13.9	たちあがりはほぼ直立してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はとがりぎみで深い	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 黒灰色	石英、長石粒その他の微細粒を含む	良好		外面底部「卅」
3	坏蓋	・13.0 ・3.8	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
4	坏蓋	・12.9 ・3.4	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1mm前後の白色砂粒を少量含む	良好		外面天井部「X」
5	坏蓋	・13.0 ・4.0	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄褐色	石英、長石粒を含む	不良		外面天井部「∪」
6	坏身	・12.8 ・3.8 ・14.5	たちあがりは短くほぼ直立してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り	灰白色	石英、長石粒を含む	やや不良		
7	坏身	・11.6 ・4.1 ・13.5	たちあがりは短く直立してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り未調整	灰白色 青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
8	坏身	・12.5 ・3.9 ・14.6	たちあがりは短く直立してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り未調整	灰白色	石英、長石粒を含む	良好		
9	坏身	・10.8 ・3.6 ・12.8	たちあがりは短く内傾してのび、端部はとがる。受部は短く上外方にのび、端部はとがる。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り	灰緑色	石英粒を多量に含む	不良		外面底部「 」
10	坏身	・10.6 ・3.4 ・12.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		内面底部「X」
11	坏身	・12.0 ・3.6 ・14.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
12	坏身	・12.7 ・3.8 ・14.4	たちあがりはほぼ直立してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		外面底部「 」
13	高坏	・12.8 ・7.6	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。坏部はやや深い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色	1mm以下の白色砂粒を多量に含む	不良		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
14	坏身	・11.8 ・4.6 ・14.0	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	褐色 赤灰褐色	角閃石、白色砂粒を少量含む	不良		外面天井部「U」
15	坏身	・12.2 ・4.0 ・14.3	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明灰色	精緻	良好		
16	高坏	・12.2 ・7.2	口縁部はほぼ直立しながらのび、端部は丸い。坏部はやや深い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色	2～3mmの白色砂粒を含む	良好		
17	高坏	・13.4 ・8.0	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。坏部は浅い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
18	平瓶	・4.6 ・12.7 ・13.5	口頸部はほぼ直立してのび、端部は内傾する段をなす。胴部は楕円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	石英粒を多量に含む	良好		
19	脚付碗	・8.6 ・9.8	坏部は内湾しながらのび、端部付近で直立し丸い。外面に2ヶ所後がみられる。脚部は下外方にのび、端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	不良		
20	高坏	・12.4 ・7.8	口縁部はほぼ直立してのび、端部は丸い。坏部は深い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	部分的にヨコナデ	器面が磨滅しているため調整不明	灰白色	石英粒を多量に含む	不良		
21	坏蓋	・13.0 ・3.7	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～2.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
22	坏蓋	・12.6 ・3.8	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り未調整	灰白色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
23	坏身	・11.7 ・3.5 ・13.5	たちあがり短くほぼ直立してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り後未調整	青灰色	0.5～1.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
24	高坏	・12.8 ・7.5	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。坏部はやや深い。脚部は下外方にのび、端部は細く丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色 灰色	1mm以下の石英粒を含む	不良		
25	高坏	・— ・5.8+α	口縁部は外反しながらのびる。脚部は下外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄灰色	白色砂粒、黑色砂粒を含む	不良	口縁端部欠損	
26	甕	・12.8 ・15.2 ・10.6	口頸部は外反しながらのび、端部付近でさらに外反し、端部は丸い。胴部は楕円形を呈し、中央部に穿孔がある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細石英粒を多量に含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
27	高坏	・11.3 ・11.8	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には2本の稜がみとめられる。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	灰色	細石英粒を多量に含む	良好		
28	横瓶	・6.0 ・14.2 ・18.5	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は円形を呈し、底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰色 黒色	1mm以下の白色砂粒を含む	良好 堅緻		
29	甗	・— ・10+ α ・8.7	口頸部は外反しながらのびる。胴部は円形を呈し、底部は丸みをおびる。外面最大径の部分に2本の沈線がある。	調整不明	調整不明	赤褐色	精緻	不良	赤焼きの須恵器	
30	壺	・11.4 ・16.0 ・19.7	口縁部は外反しながらのび、端部は面をなし丸い。胴部の最大径はほぼ中心部にある。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	1～2.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
31	壺	・11.6 ・14.5 ・18.4	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部の最大径はやや上方にあり、底部は丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～1mmの白色砂粒を少量含む	良好		
33	提瓶	・8.0 ・22.8 ・17.0	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。外面中央部に1本の沈線がある。胴部は円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰色	細石英粒を多量に含む	良好 堅緻		外面胴部「X」
34	甗	・23.0 ・30.5 ・46.4	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。胴部は丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色 明青灰色	精緻	良好		
35	甗	・23.0 ・44.1 ・43.0	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし丸く、内外面に1本ずつ沈線がある。胴部最大径は上方にある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色	精緻	良好		
36	甗	・25.6 ・48+ α ・52.0	口縁部は外反しながらのび、端部は肥厚し段をなし丸い。胴部の最大径は上方にある。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ後カキ目	淡青灰色	精緻	良好		

第138表 59号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
118	刀子	10.8	7.0	1.1	0.9	0.15	0.15	木質残存
119	直刀	69.2	59.2	3.0	1.8	0.9	0.5	鐔と鞘口金具が付き鐔には銀象嵌で唐草文などを描く

第139表 59号横穴墓出土耳環計測表

(単位：mm, g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
37	銅地金張	30×28	8×8	21.0	緑青 剝離
38	同上	30×27	8.5×7.5	22.3	緑青 保存良好
39	同上	31×27	8×7.5	19.6	緑青 保存良好
40	同上	31×27	8×7	19	緑青 保存良好

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
41	銅地金張	29×26	7×7	15.7	緑青 保存良好
42	同上	30×27	7.5×7.5	16.5	緑青 剝離
43	同上	31×28	8×8	18.4	緑青 保存良好

第140表 59号横穴墓出土石器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	幅	厚さ	材質	備考
32	砥石	10.2	5.8	3.4	頁岩質砂岩	六面とも使用痕が認められる

第141表 59号横穴墓出土玉類計測表

(単位：mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
44	丸玉	水晶	透明	10	7	3~2	1.15	片面穿孔
45	〃	ガラス	藍	9	6	2	0.75	
46	〃	〃	〃	8	5.5	1.5	0.6	
47	〃	〃	〃	〃	7.5	〃	0.7	
48	〃	〃	〃	7	6	〃	0.4	
49	〃	〃	〃	7.5	5	2.5×1.5	0.3	孔形楕円 少し欠損
50	〃	〃	〃	6.5	3.5	1.5	0.25	
51	〃	〃	〃	7	5	〃	0.25	
52	小玉	〃	〃	6	4	1	0.2	
53	〃	〃	〃	〃	〃	2	〃	
54	〃	〃	〃	〃	3	1	〃	
55	〃	〃	淡藍	〃	4	〃	〃	
56	〃	〃	藍	〃	3.5	1.5	〃	
57	〃	〃	〃	〃	3	1	〃	
58	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
59	〃	〃	〃	〃	4	1.5	〃	
60	〃	〃	淡藍	〃	〃	1	〃	
61	〃	〃	藍	〃	〃	〃	〃	
62	〃	〃	〃	〃	3.5	1.5	〃	
63	〃	〃	〃	5.5	4	〃	〃	
64	〃	〃	〃	〃	3.5	1	0.1	
65	〃	〃	〃	6	5	〃	0.2	
66	〃	〃	〃	〃	3	〃	〃	
67	〃	〃	青緑	〃	4	〃	〃	
68	〃	〃	淡藍	5	3	1.5	0.15	
69	〃	〃	藍	4.5	〃	1		
70	〃	〃	淡藍	5	〃	1.5	0.15	
71	〃	〃	藍	〃	〃	〃	〃	
72	〃	〃	淡藍	5.5	〃	〃	〃	
73	〃	〃	〃	5	〃	1		
74	〃	〃	緑	4.5	〃	〃		
75	〃	〃	藍	4	〃	1.5		
76	〃	〃	〃	〃	4	1		
77	〃	〃	〃	4.5	3	1.5		
78	〃	〃	淡藍	5	3	1.5	0.15	

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
79	小玉	ガラス	藍	4.5	3.5	1		
80	〃	〃	〃	4	3	1		
81	〃	〃	〃	5	3.5	〃	0.15	
82	〃	〃	淡藍	〃	3	〃	0.1	
83	〃	〃	〃	〃	2.5	1.5		
84	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
85	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
86	〃	〃	〃	〃	3	1		
87	〃	〃	藍	4	3.5	〃		
88	〃	〃	〃	5	〃	〃	0.1	
89	〃	〃	青	4	2.5	〃		
90	〃	〃	藍	〃	2	1.5		
91	〃	〃	青緑	〃	3	1		
92	〃	〃	青	〃	〃	〃		
93	〃	〃	藍	〃	3.5	〃		
94	〃	〃	〃	〃	3	〃		
95	〃	〃	青	3.5	〃	〃		
96	〃	〃	淡藍	4	2	〃		
97	〃	〃	藍	3.5	3	〃		
98	〃	〃	青	4	2	〃		
99	〃	〃	藍	3.5	〃	1.5		
100	〃	〃	淡藍	〃	1.5	1		
101	〃	〃	青	4	2	〃		
102	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
103	〃	〃	藍	〃	〃	〃		
104	〃	〃	青	4	〃	〃		
105	〃	〃	淡藍	〃	3	〃		
106	〃	〃	藍	3	1.5	〃		
107	〃	〃	青	〃	2	〃		
108	〃	〃	淡藍	〃	1.5	〃		
109	〃	〃	藍	2.5	2	〃		
110	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
111	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
112	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
113	〃	〃	青	〃	〃	〃		
114	〃	〃	〃	2	1	〃		
115	〃	〃	淡藍	〃	1.5	〃		
116	〃	瑪瑙?	赤茶	6.5	6	〃		
117	〃	土	黒	6	3	1.5		

60号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

60号横穴墓は南支群北寄りの斜面に立地し、南西方向に開口する。全長は $3.9 + \alpha$ m、標高は前庭部前面の上場で36.1m前後を測る。玄室主軸方向はN-56.5°-Eを測る。保存状態は前庭部入口が中世の溝で一部削平されている以外は比較的良好であった。本横穴墓は調査以前から玄室天井部の陥没が認められ、横穴墓の存在が確認されていた。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の有無の確認、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の落石・崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物・礫床施設等の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

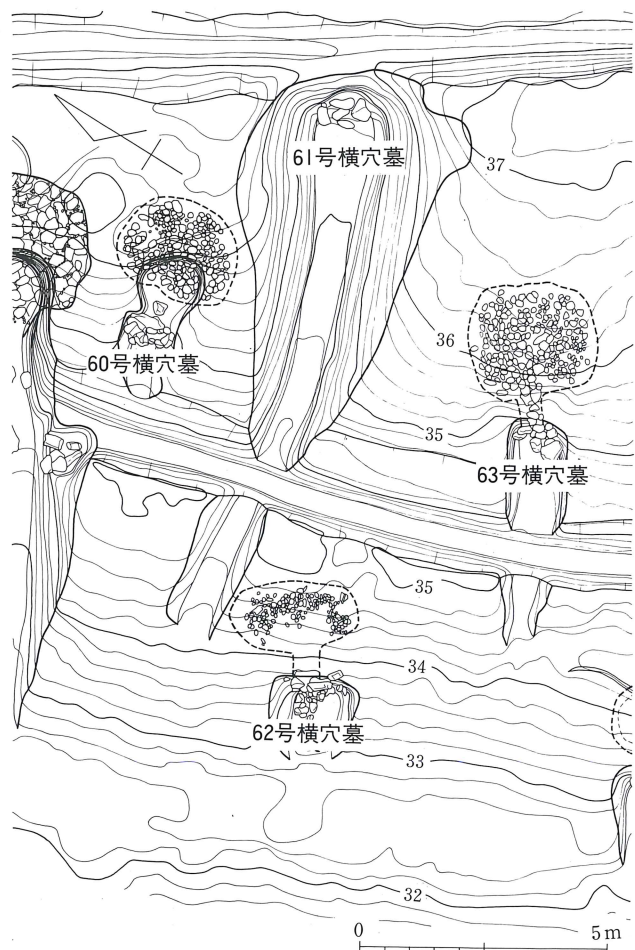
a) 規模、構造 前庭部は長さ約1.5m、幅は前面で約0.8mを測り、ほぼ長方形の様相を呈している。前庭部床面は緩い凹凸があり、羨門部から0.5m付近まではほぼ平坦に整形されている。その後前庭部入口に向かって約15°の傾斜で下降する。側壁の傾斜は両者ともほぼ同様であり78~80°を測る。羨門部壁はほぼ垂直に立ち上がる。羨門部分は天井部分が崩壊しており、旧状を留めていない。このため高さは推定不能であるが、幅は0.61mを測る。

閉塞施設は河原礫と地山礫を使用し、入念に構築されているが、これは最終埋葬時の状態を示している。まず前庭部下部に初葬時の埋土が約20cm程堆積し、その上に基底部をつくる。この埋土中には初葬時に使用した閉塞石1個が残存する。閉塞の配石は使用部位によって3工程に分けられる。第1工程は、大形の扁平河原石1個で羨門部を覆っている。第2工程は、拳大の円礫と地山礫7個前後からなり、埋土を基底部として第1工程の河原石の下面を支え隙間を覆う。第3工程は、やや大形の河原石6個前後からなり、第2工程の石を根石として第1工程の河原石の中程までを覆う。この配石後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

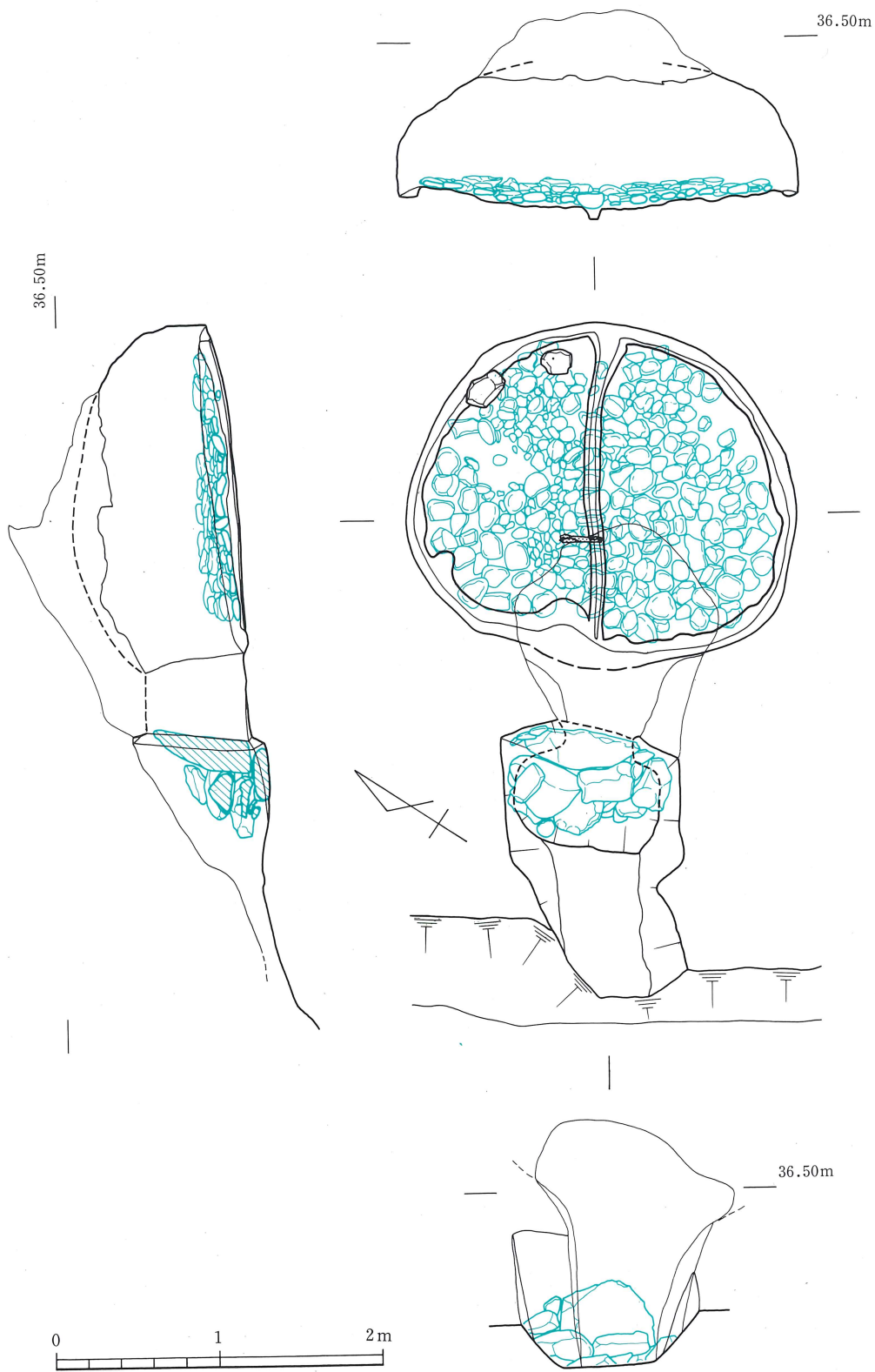
b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土はその性状から比較的明瞭な区分が可能であり、全体で2層群4層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群(Ⅲ・Ⅳ層)はほぼ床面全体に堆積する。羨門部付近は追葬時に整地されており、約10~20cm程度の層厚を測る。前庭部入口付近は急斜面の為か上部は流失しているものと思われ、層厚は10cm前後を測る。本層群はさらに2層に分層できる。下面は基盤層を利用した埋土であり、層厚は5~20cmを測る。上層は前庭部入口付近に堆積していて、若干風化傾向が認められる。最大厚で約5cmを測るが、羨門部付近は追葬時に整地されていて残存していない。本層群を初葬時の前庭部内埋土と推定している。

第2層群(Ⅰ・Ⅱ層)は第1層群の一部分をカットして羨門部付近に堆積している。土層観察の結果、本層群はさらに2層に分層できる。下層は地山礫小片を多量に



第349図 60号横穴墓周辺平面図



第350图 60号横穴墓平·断面图

含み、成分構成は基盤層とほぼ同じである。追葬時の覆土と考えている。上層は下層を覆って堆積しているが、成分構成は下層とほぼ同じであり、風化が進んでいる。本層群を追葬時の前庭部内埋土と推定している。

本横穴墓は土層観察の結果、最低2度の埋葬行為が行われたと推定している。

2) 羨道・玄室

羨道部は床面で幅0.6m、長さ0.45mを測る。羨門部で約10cm程度の段差を持ち、玄門へと延びる。床面は凹凸はあるもののほぼ平坦である。天井部は崩落のため明確ではないが、側壁の特徴から玄門部でくびれの段があることが想定される。

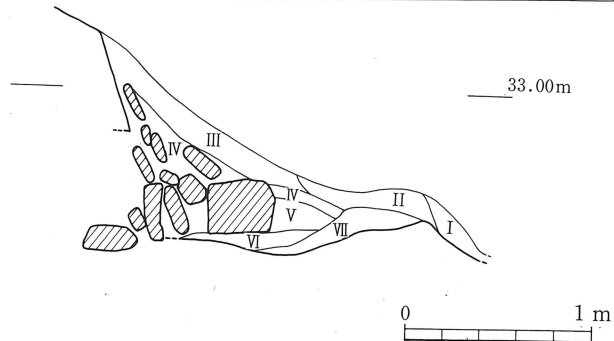
玄室は天井部が一部崩落して明確ではないが、ドーム形を呈すとおもわれる。高さは推定であるが、0.8m前後であろう。長さ2.5m、幅2.15mを測り、楕円形の様相を示す。床面には側壁周辺を除くほぼ全面に人頭大から拳大の扁平な河原円礫を敷きつめている。この敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に拡げるように行っている。なお、奥壁・左側壁部コーナー部分に人頭大の河原石を1個積み重ねて石枕としている。敷石除去後の床面は凹凸が甚だしく構築後の地山整形は行っていない。標高は35.4m～35.6mを測り、玄門から奥壁に向かって約5°の傾斜で上昇する。また床面には幅10～20cm、深さ10cm前後の排水溝が周壁及び中央に設けられている。

3. 遺物の出土状態

60号横穴墓は玄室・前庭部とも遺物の出土は無かった。(友岡信彦)

60号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I	茶褐色	粘質土	ベテ ソフト	追葬時の風化土層、風化が進んでいる
II	黄褐色	"	ソフト (目よりソフト)	追葬時埋土
III	暗茶褐色	"	ベテ ハード	初葬時の風化土層
IV	黄灰色	"	ベテ ソフト	初葬時埋土



第351図 60号横穴墓縦断土層図

61号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

61号横穴墓は南支群北寄りの斜面に立地し、西方向に開口する。全長は約14.56m、標高は前庭部前面の上場で33.3m前後を測る。玄室主軸方向はN-56.5°-Eを測る。標高は墓道前面の上場で36.7m前後を測る。保存状態は前庭部が中世の溝で切られていたり、削平を受けていたりして、必ずしも良好とは言い難い。本横穴墓は調査以前から県道西端の玄室天井部が削平されており、横穴墓の存在が確認されていた。昭和59年度は墓道・閉塞施設の調査を行い、改めて昭和60年度に県道迂回路を設け旧県道下の羨道・玄室の調査を行った。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の落石・崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物・礫床施設等の調査を実施した。

2. 規模・構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約11.05m、幅は羨門手前の上場で約3.5m、床面で約1.5mを測る、墓道入口は約0.7mである。墓道の斜面下方は旧地表と推定される黒褐色の風化土層であり、墓道掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。墓道床面は緩い凹凸がみられる。床面傾斜は羨門から4.2m付近までは約10°の傾斜で下降しその後ほぼ平坦な面で墓道入口に至る。側壁の傾斜は両者ともほぼ同様であり68°~73°を測る。羨門部壁の傾斜は72°を測る。

羨門部分は天井部分が崩壊しているため、全体の残りはあまり良くない。残存部分からみて、幅は0.65mを測る。高さは不明である。

閉塞施設は現状でみると羨門部の下半分を閉塞石で覆っており、上面は追葬時に取り除かれたと考えている。閉塞石は大形地山礫9個と安山岩板石2枚が認められた。安山岩板石は本来は羨門部を覆う役目をしていただと思われるが、現状では地山礫上に倒れ込んでいる。地山礫は安山岩板石を支える役目をしていただが、追葬時に上部は取り除かれたと推定している。墓道右隅コーナーから大形の安山岩板石2枚が、墓道前面からは河原円礫・地山礫が多量に検出された。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で4層群18層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群 (XV~XVII層) は床面全体に堆積する。羨門部付近は第2層群にカットされており10cm前後、墓道中位では30cm前後の層厚を測る。本層群はさらに3層に分層できる。下層は基盤層を利用した層であり、層厚は10cm前後を測る。中層は墓道中央付近は整地されており、墓道入口部分と羨門部付近に堆積している。上層は墓道中央から入口にかけて堆積しており、風化が進んでいる。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定している。

第2層群 (VIII~XIV層) は第1層群を覆って墓道全体に堆積しているが、前庭部付近は第3層群にカットされていて残りはよくない。IX層は風化が進んでいる。本層群を第1次追葬時の墓道内埋土と推定している。

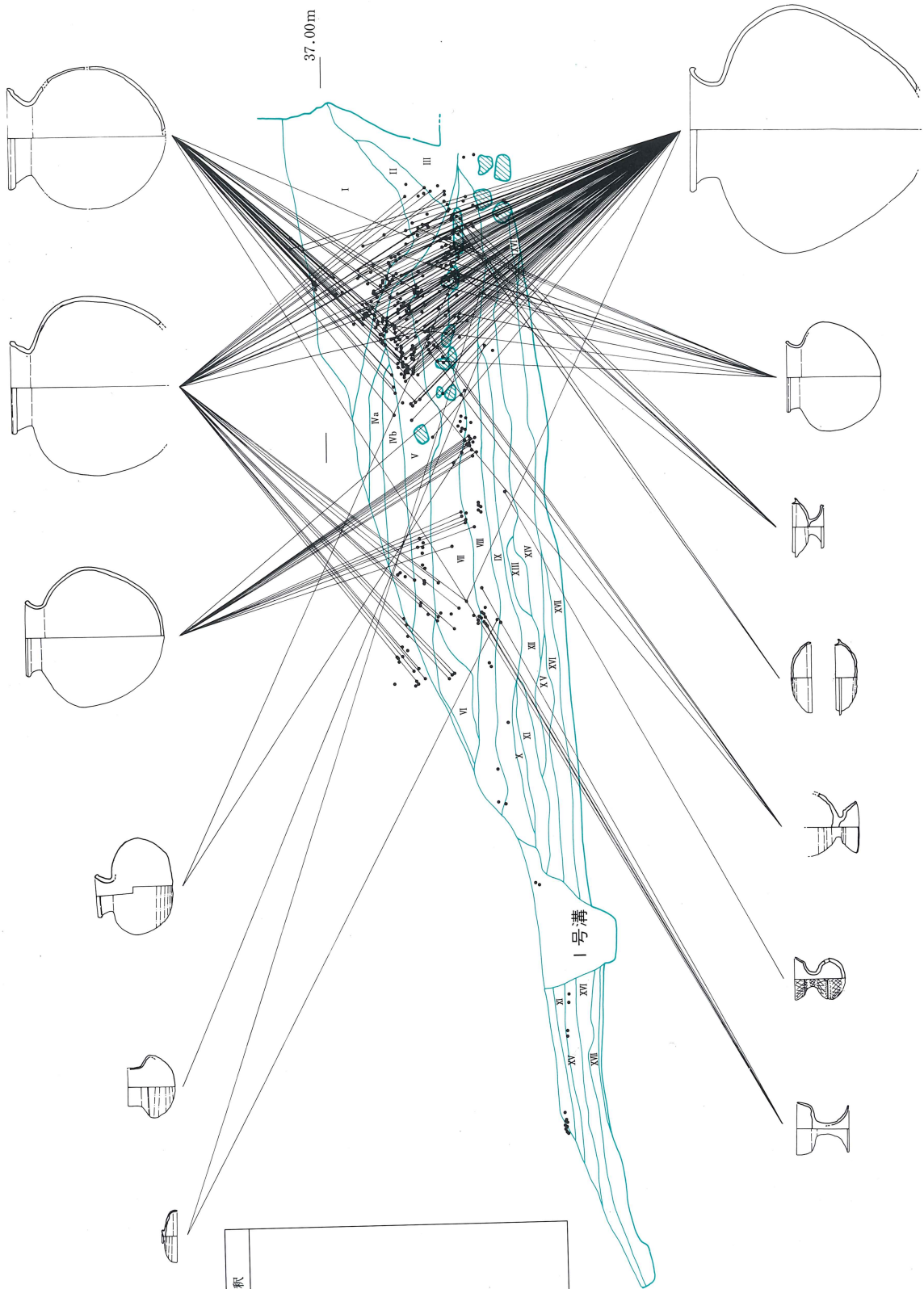
第3層群 (IVa~VII層) は下層群を覆って墓道前面に堆積している。土層観察の結果、羨門部及び上面は次の埋葬時に切り込まれている。下層群との境界からは安山岩板石及び地山礫が多量に検出された。上層 (V層) は風化が進んでいる。本層群からは多量の遺物が破碎された状況で出土した。本層群を第2次追葬時の墓道内埋土と推定している。

第4層群 (I~III層) は墓道前面から羨門部に向かって下層群を切り込みながら堆積している。II・III層は閉塞埋土である。I層は風化が進んでいる。本層群を最終埋葬時の墓道内埋土と推定している。

本横穴墓は土層観察の結果、最低4度の埋葬行為が行われたと推定される。



第352图 61号横穴墓平·断面图



61号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I:	淡黒褐色	クワシ質土層	ベネツ	風化が進んでいる
II:	暗茶褐色	粘質土層	ハード	
III:	茶褐色	粘質土層	ソフト	第2次埋葬土
IV:	淡黒色	クワシ質土層	ソフト	
V:	黒褐色	粘質土層	ハード	初葬埋土
VI:	暗茶褐色	粘質土層	ベネツ	
VII:	赤褐色	粘質土層	ソフト	初葬埋土
VIII:	暗茶褐色	粘質土層	ソフト	
IX:	黄褐色	粘質土層	ソフト	初葬埋土
X:	赤黄色	粘質土層	ソフト	
XI:	茶褐色	粘質土層	ソフト	初葬埋土
XII:	暗茶褐色	粘質土層	ソフト	
XIII:	暗茶褐色	粘質土層	ソフト	初葬埋土
XIV:	暗茶褐色	粘質土層	ソフト	
XV:	暗茶褐色	粘質土層	ソフト	初葬埋土
XVI:	茶褐色	粘質土層	ソフト	
XVII:	黄灰色	粘質土層	ソフト	初葬埋土

第353図 61号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



2) 羨道・玄室

羨道部は床面で幅約0.75m、長さ1.2mを測る。床面には扁平な安山岩板石と河原円礫を一行に組み合わせ床面を整えている。隙間には小礫を補填している。敷石除去後の床面は中央に玄室より続く排水溝が検出された。天井部は残存しているものの、崩落が激しく原形を留めていないため高さ、傾斜の角度等は不明である。

玄室は天井部が陥没しており、残りは悪いがドーム形を呈していると推定している。高さは崩落のため推定で約0.9m前後であろう。長さは2.31m、幅2.17mで隅丸方形を呈している。玄門幅は0.95mを測る。床面は全体にまばらに扁平河原円礫を敷いているが、空間が非常に多い。玄室奥半分には扁平河原円礫間の隙間に小礫を補填している。敷石除去後の床面には幅10~20cm、深さ10cm前後の排水溝が周壁および中央に設けられている。周壁溝は部分的に床地山礫の影響などで狭まったり広がったりする部分がみられる。中央の溝は玄室中央部分で極端に広がる傾向を示している。

敷石と排水溝の関係であるが、先に述べたように前庭部→羨道部→玄室と縦一列に敷かれた敷石と玄室壁沿いに巡らされた敷石は、まず最初に排水溝を覆い隠す役目を持っている。その後残りの空間を補填している。この行為は敷石の配列状況を知る上で貴重な事例である。

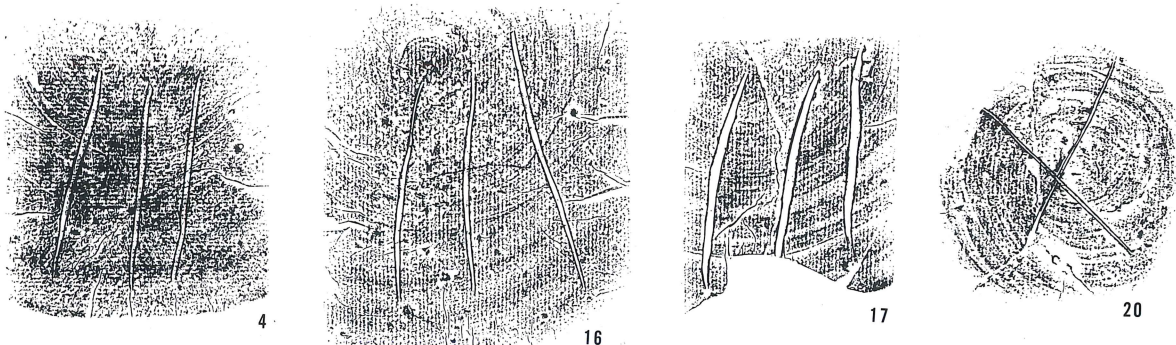
3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

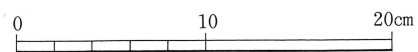
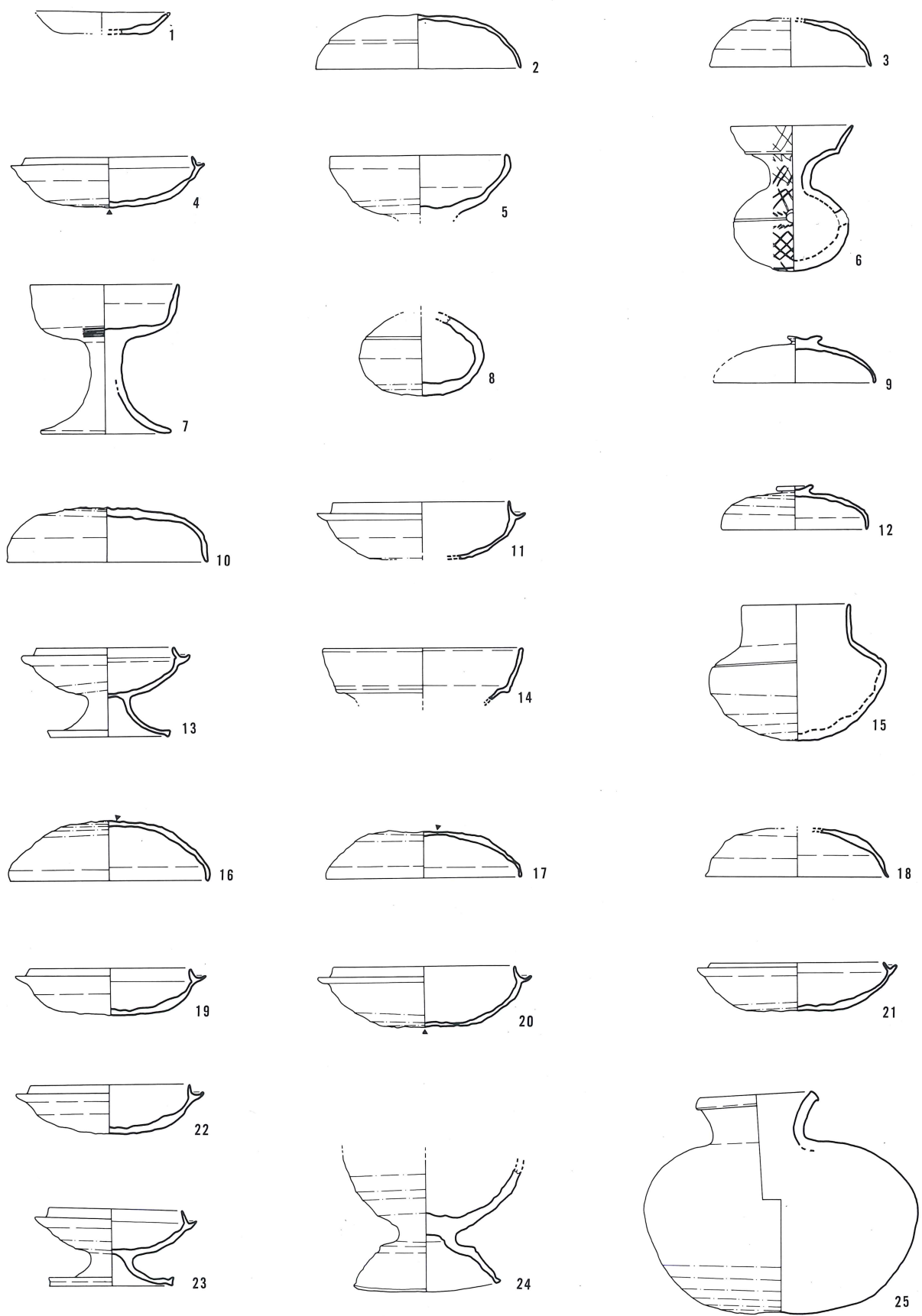
玄室内からは人骨、鉄製品、装身具が検出された。人骨は大腿骨と思われる部分で、右側壁中央付近から検出した。鉄製品は鉄鏃1本（第357図31）で玄室土壌洗浄中に検出された。装身具は耳環、玉類である。耳環は2個（第357図32、33）で、左袖コーナーから0.5m程いった左側壁ぎわで検出した。玉類は勾玉1、管玉5、丸玉21、小玉21+ α 、切子玉4（第357図34~99）が出土した。丸玉8個は群をなして玄室中央からやや奥壁左寄り出土した。さらに奥壁中央付近で丸玉3個が出土した。これ以外の玉類は土壌洗浄中の検出である。

2) 墓道内

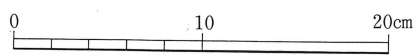
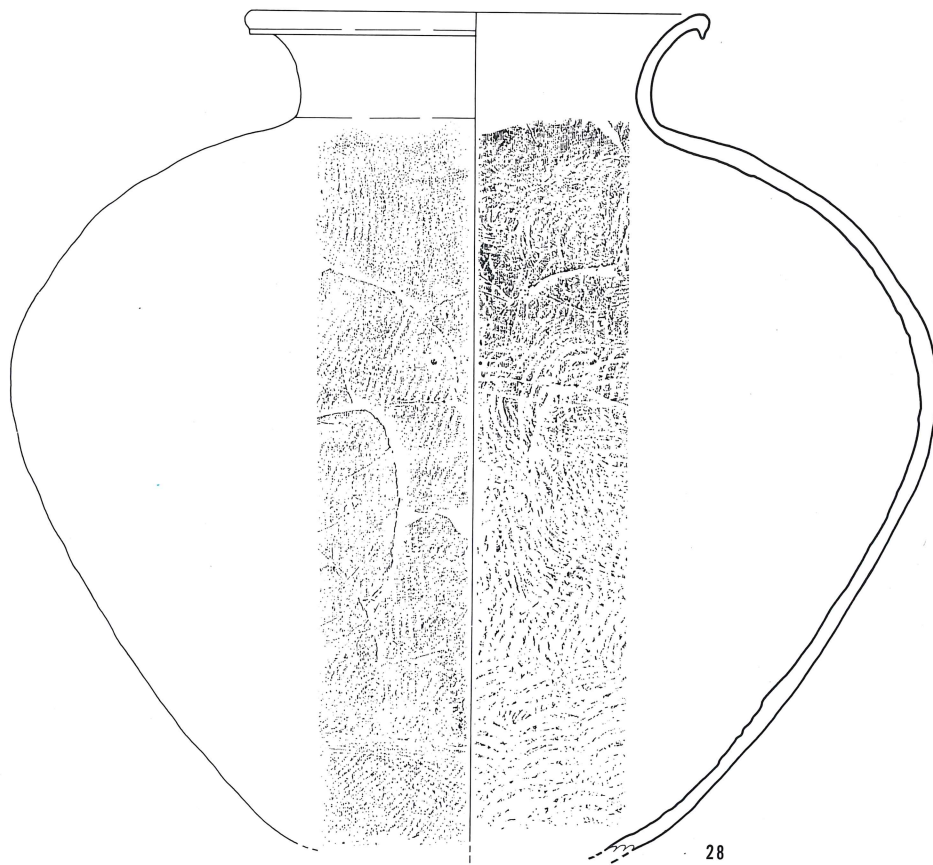
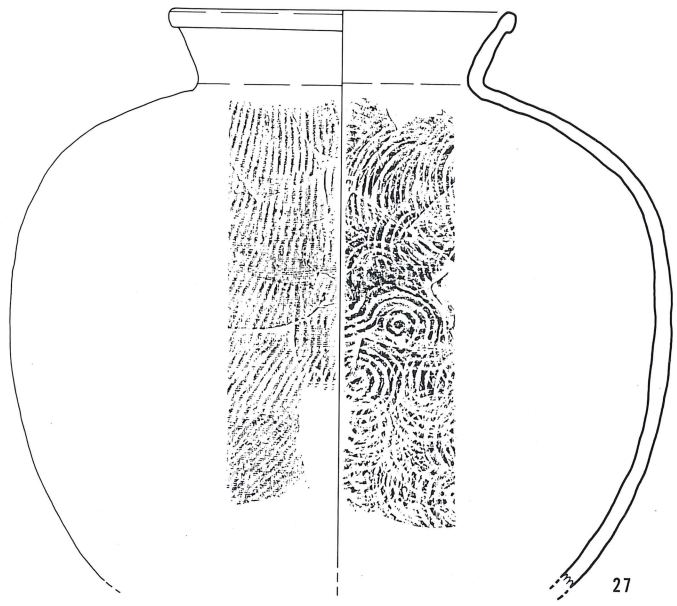
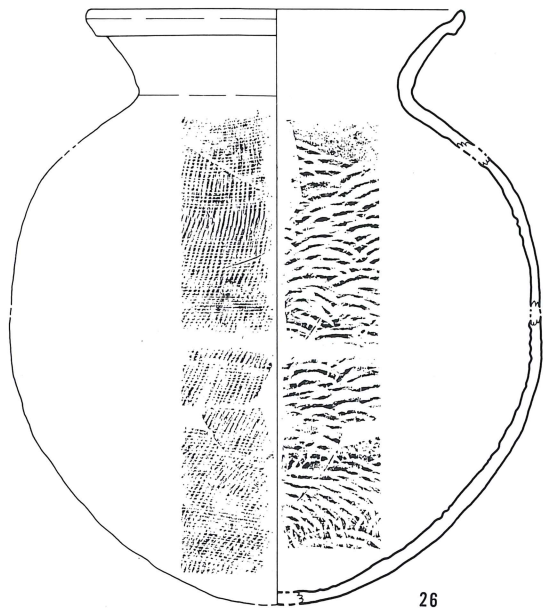
墓道内からは第4層群を中心に多量の遺物が出土したが、そのほとんどが破碎された後に散布されていた。羨門部から約3mの範囲内であり、完形品には、坏蓋3・身4、高坏・甕・平瓶・埴（第355図2~15、25）がそれぞれ1個体ずつ出土した。破碎散布された遺物からは中型甕1、小型甕4、有蓋高坏1（第355図12、13、第356図26~29、第357図29、30）等が出土した。また、前庭部羨門付近の右コーナーからは、追葬時に破棄されたと考える安山岩板石2枚の傍から坏蓋3、坏身2（第355図16~20）の一括埋置の状態が確認された。坏蓋3個は重ねられており、さらに傍に坏身2個を重ねて配置している。これは第4層群の遺物である。（友岡信彦）



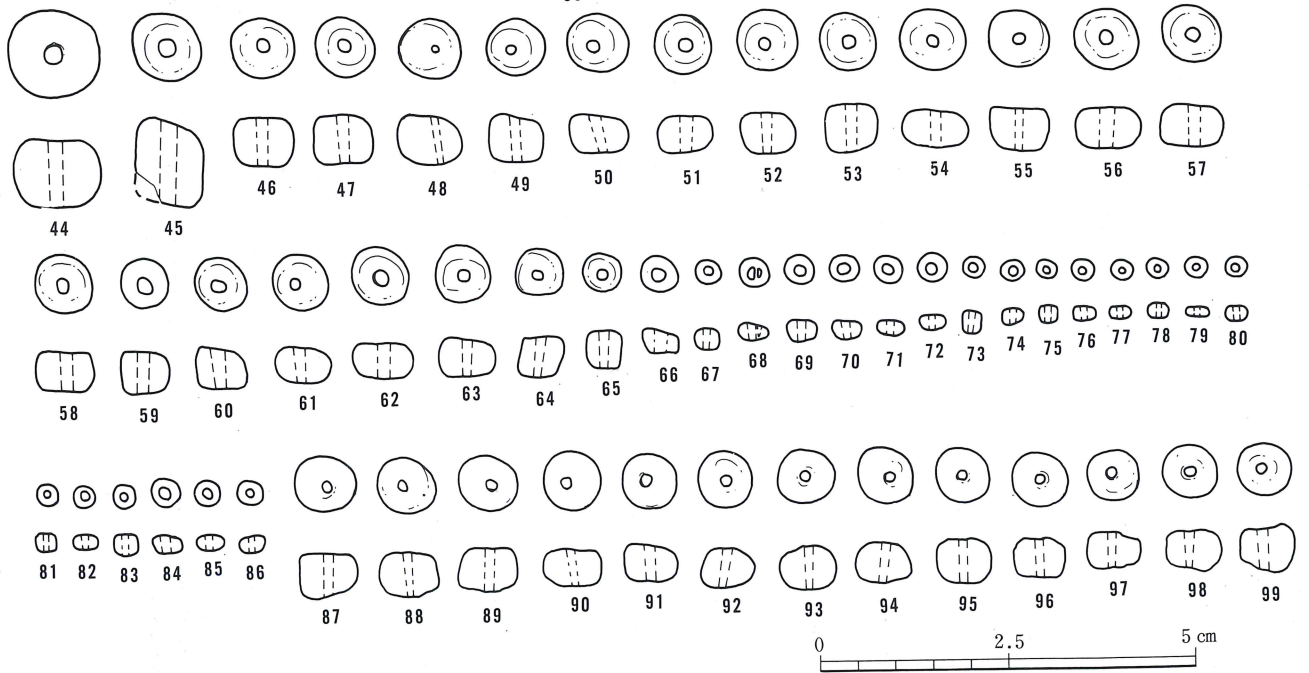
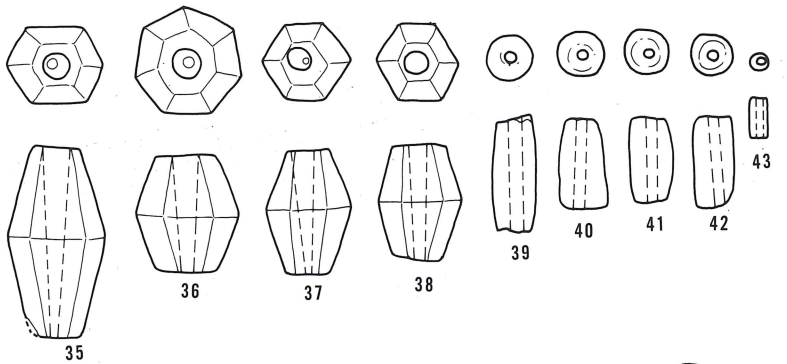
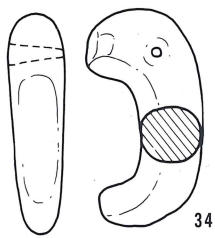
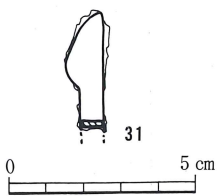
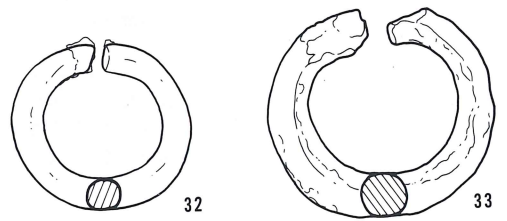
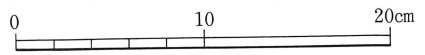
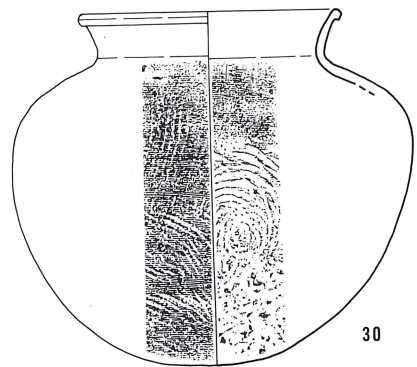
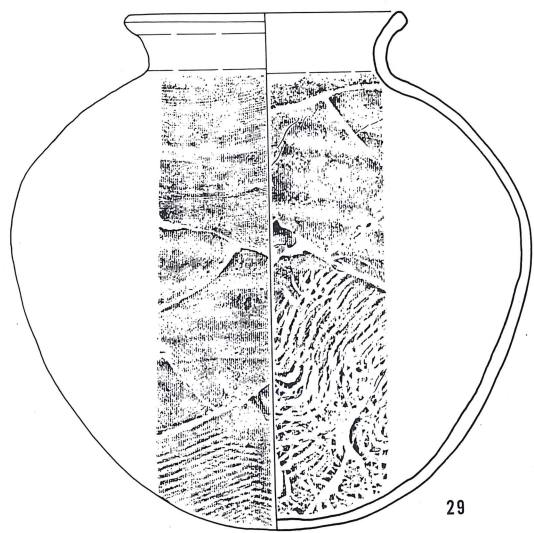
第354図 61号横穴墓出土土器ヘラ記号



第355图 61号横穴墓出土遗物实测图(1)



第356图 61号横穴墓出土遗物实测图(2)



第357图 61号横穴墓出土遺物実測図(3)

第142表 61号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	皿	・9.2 ・1.3	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 糸切り底	黄褐色 黄灰色	細黒色砂粒、 白色砂粒を 含む	良好	土師器	
2	坏蓋	・14.4 ・3.8	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	調整不明	調整不明	淡黄灰色	1mm以下の 黒色砂粒、 白色砂粒を 多量に含む	不良		
3	坏蓋	・11.4 ・3.3+ α	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	調整不明	調整不明	黄白色	石英、角閃 石粒を含む	不良		
4	坏身	・11.7 ・3.5 ・13.5	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は浅くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰色	細白色砂粒 を含む	良好 堅緻		外面底部 「III」
5	高坏	・12.4 ・4.2+ α	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。坏部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰色	白色細砂粒 を含む	良好		
6	甗	・8.6 ・10.2 ・8.2	口頸部は外反しながらのび、端部付近で屈曲し外面に稜をなす。端部は丸い。胴部は楕円形を呈し外面に1本の沈線がある。中央部に穿孔がある。	回転ナデ	回転ナデ カキ目後 沈線文	淡黄灰色 灰白色	1~2mmの 白色砂粒、 黒色砂粒を 含む	良好		外面底部 「III」
7	高坏	・10.4 ・10.3	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は下外方へのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰色	0.5~1.5mm の白色砂粒 を多量に含 む	良好		
8	甗	・— ・5.5+ α ・8.6	胴部は楕円形を呈す。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰色	白色砂粒を 含む	良好		
9	坏蓋	・11.4+ α ・3.2	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く丸みをおび、外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰色	精緻	良好		
10	坏蓋	・14.0 ・3.7	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰褐色	0.5mm前後 の石英粒を 含む	良好 堅緻		
11	坏身	・12.4 ・3.9+ α ・14.6	たちあがりほぼ直立してのび、端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	淡黄灰色	1mm以下の 石英粒を含 む	不良		
12	坏蓋	・10.2 ・3.0	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	黒褐色 黒灰色	1~2mmの 石英粒を含 む	良好 堅緻		
13	高坏	・9.5 ・6.2 ・11.8	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。脚部は下外方へのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰色	精緻	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
14	甌	・13.8 ・3.5+ α	口縁部は外反しながらのび、屈曲する。外面には沈線をなし端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	精緻	良好		
15	短頸壺	・7.5 ・9.4 ・12.5	口頸部は直立してのび、端部は丸い。胴部の最大径は上方にある。底部は深く丸みをおびる。外面肩部に1本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mm前後の白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
16	坏蓋	・13.8 ・4.1	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1~2mmの石英粒を含む	良好 堅緻		外面天井部「Ⅲ」
17	坏蓋	・13.6 ・3.2	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1~2mmの白色砂粒を含む	良好		外面天井部「Ⅲ」
18	坏蓋	・12.8 ・3.3	口縁部は外反しながらのび、端部付近にいくにつれて細くなり端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	調整不明	調整不明	淡黄灰色	細砂粒を含む	不良		
19	坏身	・11.2 ・3.2 ・13.3	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	調整ナデ	調整ナデ	黄白色	細黒色砂粒 石英を含む	不良		
20	坏身	・12.7 ・4.2 ・15.0	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色	1mm以上の砂粒を含む	良好		外面底部「Ⅹ」
21	坏身	・12.1 ・3.3 ・14.0	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
22	坏身	・11.0 ・3.4 ・13.0	たちあがりはほぼ直立してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り後 不定方向ナデ	灰白色	0.5~2mmの黒色砂粒を含む	良好 堅緻		
23	高坏	・9.3 ・5.3 ・11.2	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部はうすい凹面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色 黒灰色 灰色	1mm以下の石英粒を含む	良好 堅緻		
24	高坏	・ ・8.9+ α ・10.2	坏部の口縁部は外反しながらのびる。脚部は下外方にのびながら屈曲する。端部は面をなし、外面に稜をもつ。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色 暗灰色	細石英粒を含む	良好 堅緻		
25	平瓶	・7.8 ・15.5 ・19.0	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部は楕円形を呈し、底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1~2mmの白色砂粒を少量含む	良好		
26	甕	・20.0 ・31.3 ・28.0	口頸部は外反しながらのび、端部は外面に段をなし丸い。胴部はほぼ円形を呈し、底部は丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ後タタキ目	青灰色	0.5~1.5mmの白色砂粒、 角閃石粒を少量含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
27	甕	・18.4 ・30.3+ α ・36.0	口頸部は外反しながらのび、端部は外面に段をなし丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ後回 転カキ目	灰黒色 青灰色	白色細砂粒 を含む	良好		
28	甕	・24.6 ・44.0 ・49.2	口頸部は外反しながらのび、端部は丸みをおびた面をなし、その外面に1本の沈線をもつ。胴部最大径はやや上方にある。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
29	甕	・15.1 ・27.3 ・28.8	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部の最大径はやや上方にある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 回転カキ目 平行タタキ	灰白色	石英粒を含む	やや不良		
30	壺	・13.6 ・18.9 ・21.3	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。胴部の最大径は上方にあり、底部は丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ後ハ ケ目	青灰色	1~1.5mm の白色砂粒 を少量含む	良好		

第143表 61号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
31	鉄鎌	3.1以上	2.0	1.1	0.65	不明	0.15	

第144表 61号横穴墓出土耳環計測表

(単位: mm, g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
32	銅地金張	23.5×22.5	4.5×4.5	5.9	金箱がほぼ残存
33	銅地	30 ×27.5	6.5×6.5	10.4	腐蝕緑青

第145表 61号横穴墓出土玉類計測表

(単位: mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
34	勾玉	水晶	透明	18.5	8	3~1	4	片面穿孔
35	切子玉	〃	〃	25.5	13	4~1	4.7	〃
36	〃	〃	〃	15	14	4~2	4.5	〃 7角形断面
37	〃	〃	〃	16	10.5	3~1	2.5	〃
38	〃	〃	〃	15	11	2.5~1	2.6	〃
39	管玉	土	黒	14.5	6	2	0.7	〃
40	〃	〃	〃	12	5	1.5	0.6	片面穿孔
41	〃	〃	〃	11	6	〃	〃	〃
42	〃	〃	〃	12	5	〃	〃	〃
43	〃	碧玉	淡緑	5.5	2	1	〃	〃
44	丸玉	ガラス	藍	12	9	2.5	1	
45	〃	〃	〃	〃	〃	2	1.6	
46	〃	〃	〃	8	6.5	1.5	0.6	
47	〃	〃	〃	8.5	〃	〃	〃	
48	〃	〃	〃	9	〃	1	0.7	
49	〃	〃	〃	8	6	1.5	〃	
50	〃	〃	〃	8.5	5	〃	0.55	
51	〃	〃	〃	8	〃	〃	0.5	
52	〃	〃	〃	〃	5.5	〃	〃	

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
53	丸玉	ガラス	藍	7.5	6.5	〃	〃	
54	〃	〃	〃	9	5	〃	〃	
55	〃	〃	〃	8	6	1	0.55	
56	〃	〃	〃	8.5	5.5	1.5	0.5	
57	〃	〃	〃	〃	5	2	0.45	
58	〃	〃	〃	6	5.5	〃	0.4	
59	〃	〃	〃	8	5	〃	0.45	
60	〃	〃	〃	7	〃	〃	0.4	
61	〃	〃	〃	8	〃	1.5	〃	
62	〃	〃	〃	〃	4.8	〃	〃	
63	〃	〃	〃	〃	5.5	〃	0.45	
64	〃	〃	〃	6	5	2	0.35	
65	小玉	〃	淡青	5	〃	〃	0.15	
66	〃	〃	〃	〃	3	〃	0.1	
67	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
68	〃	〃	〃	4	2	1.5		
69	〃	〃	〃	〃	3	〃		
70	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
71	〃	〃	〃	〃	2	〃		
72	〃	〃	淡青	4	2	1.5		
73	〃	〃	〃	3	2.5	〃		
74	〃	〃	〃	3.5	2	1		
75	〃	〃	〃	3	3	0.5		
76	〃	〃	〃	4	2.5	1.5		
77	〃	〃	〃	〃	2	1		
78	〃	〃	〃	3.5	〃	1.5		
79	〃	〃	〃	〃	1	〃		
80	〃	〃	〃	3	〃	1		
81	〃	〃	藍	〃	3	〃		
82	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
83	〃	〃	淡青	2.5	2	0.5		
84	〃	〃	淡緑	3	〃	1		
85	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
86	〃	〃	〃	〃	2	〃		
87	丸玉	土	黒	8	6	〃	0.25	
88	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
89	〃	〃	〃	〃	5.5	〃	0.3	
90	〃	〃	〃	〃	5	〃	〃	
91	〃	〃	〃	7.5	〃	〃	〃	
92	〃	〃	〃	〃	〃	〃	0.25	
93	〃	〃	〃	7	6	〃	0.3	
94	〃	〃	〃	8	〃	〃	0.35	
95	〃	〃	〃	7.5	〃	〃	〃	
96	〃	〃	〃	7	5	〃	0.25	
97	〃	〃	〃	〃	3.5	〃	〃	
98	〃	〃	〃	〃	4	〃	〃	
99	〃	〃	〃	〃	5	〃	〃	

62号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

62号横穴墓は南支群北寄りの斜面にあり、南西方向に開口する。全長は2.7mを測り、主軸方向をN-56.5°-Eに取る。保存状態は良好であった。斜面の遺構検出中に前庭部埋土の土色の変化を認め、横穴墓発見の契機となった。調査前には横穴墓の存在を示すような前庭部の落ち込みなどは認められなかった。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞部、玄室内の調査等を行った。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ1.86m、幅1.45mであり、ほぼ方形の様相を呈している。前庭部の斜面下方は旧地表と推定される黒褐色の風化土層であり、前庭部掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。前庭部床面はゆるい凹凸があるがほぼ平坦であり、羨道部は一段低くなる。側壁の傾斜は約70°を測り、羨門部壁の傾斜は約80°を測る。

羨門は天井部に若干の崩壊が認められるものの、保存状態は良好である。規模は高さ0.62m、幅0.61mを測る。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用しているが、その構造は比較的簡単である。閉塞施設と土層の関係から、配石は最終埋葬時になされたものと思われる。閉塞の配石は形状と使用部位によって2群に分けられる。第1群は安山岩板石を5枚使用し、前庭部に敷かれた1枚の板石上に置かれるようにして、羨門部を覆う。第2群は20cm前後の偏平な河原円礫とやや小形の地山礫を使用し、第1群を支え隙間を覆う。

b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土層はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で4層群7層に分層した。

第1層群（Ⅵ・Ⅶ層）は初葬時の埋土と推定され、さらに2層に細分される。内部には地山礫を含む。このうち下層は基盤の二次堆積層で、上層はカーボン粒子を含み、上面はやや風化する。

第2層群（Ⅳ・Ⅴ層）は追葬時の前庭部内と推定され、第1層群を切り込んで形成されている。上下2層に細分され、上層の上面はやや風化する。下層の上位には一括遺物の須恵器を含む。

第3層群（Ⅱ・Ⅲ層）は第2層群を切り込んで形成されている。さらに2層に細分され、下層は土師器高坏を埋置するために掘り込まれた遺構埋土である。上層はこの遺構と墓道の一部を覆うもので、上面はやや風化している。

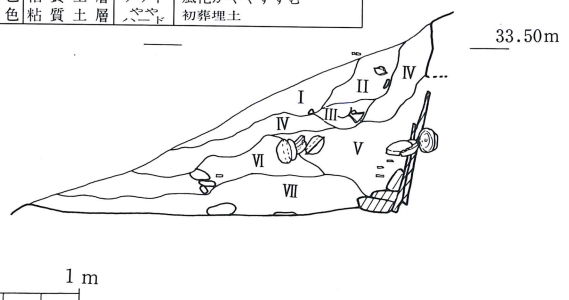
第4層群（Ⅰ層）は第1～3層群の堆積が終了した後に形成された流入土である。前庭部内埋土の状況および風化土層のあり方から、都合2回の埋葬が行われたと考えられる。また第2層群に含まれる須恵器は追葬に伴う遺物と思われ、第3層群に含まれる土師器は埋葬行為に伴わない遺物であると考えられる。

2) 羨道、玄室

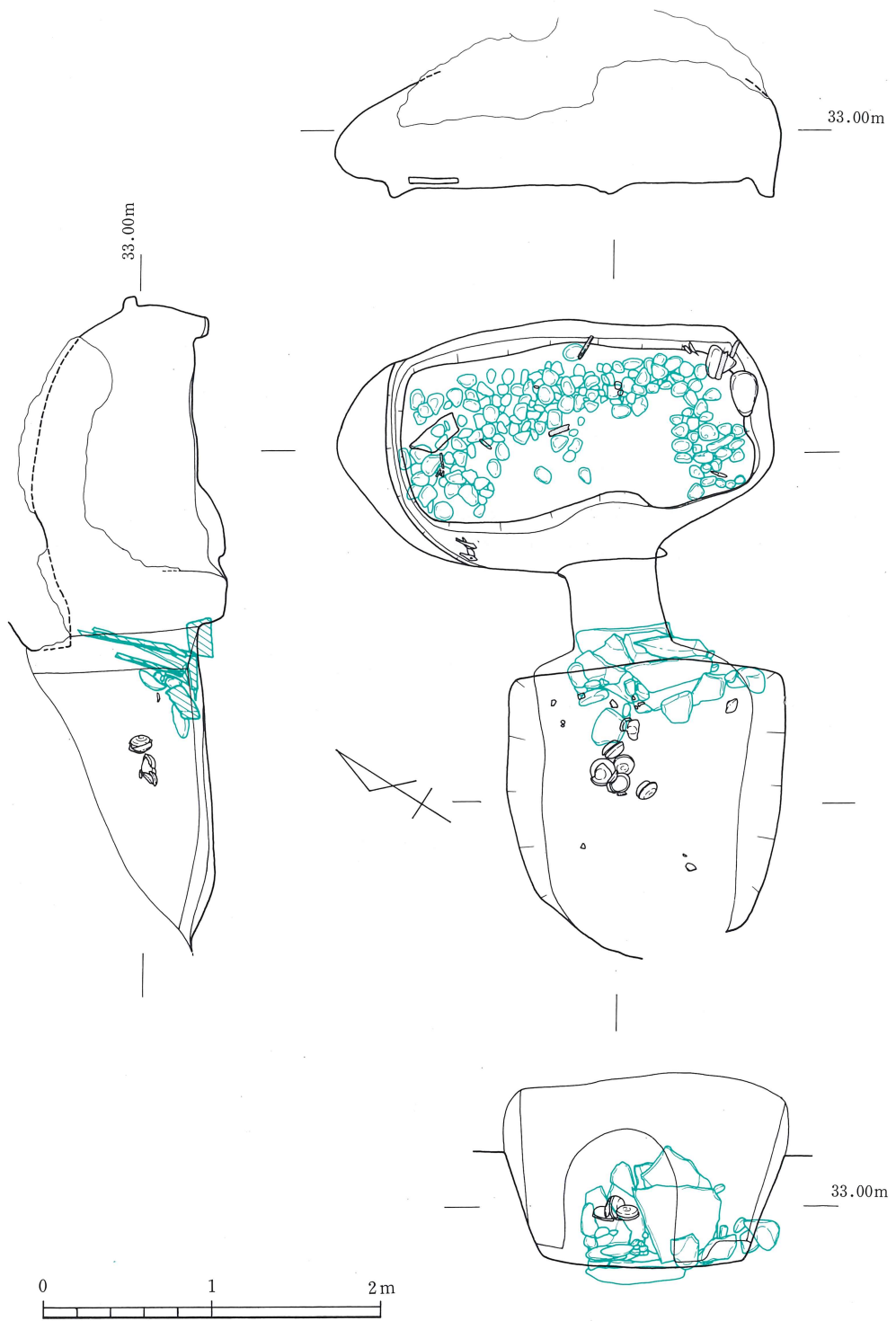
羨道部は床面で0.57m、長さ0.44mを測る。床面は前庭部、玄室の床面より一段低い。天井部は崩落しているが、床面とほぼ平行であると思われる。玄室はドーム形を呈し、長さ1.4m、幅2.55m、高さ0.9mを測る。床面は標高32.7mで、ほぼ平坦である。玄室には長さ、幅とも10～20cm前後の河原円礫を利用した礫床を設ける。また玄室東側には幅12cm、長さ25cmを測る板石、西側には幅15cm、長さ25cmを測る河原石を使用した枕石を設けている。なお中央部の奥壁に近い部分に、礫床の重複した部分が見られるが、これは羨門部に近い床面の敷石を、追葬に際して奥に押しやっ

62号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
I	褐色	粘質土層	バネ	テラスの墳丘土の流入土?
II	暗褐色	粘質土層	ソフト	追葬時墓道埋土-ピット墓道をおおうやや風化している。
III	茶褐色	粘質土層	ソフト	土器埋置のためのピット埋土
IV	黄茶褐色	粘質土層	バネ	第1次追葬埋土
V	暗茶褐色	粘質土層	ソフト	
VI	茶褐色	粘質土層	ソフト	風化がややすすむ初葬埋土
VII	黄褐色	粘質土層	バネ	



第358図 62号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



第359图 62号横穴墓平·断面图

たものと考えられる。

玄室内には天井部の崩落による堆積土が認められたが、礫床部分の大半は埋没から免れていた。

3) テラス状遺構、墳丘

本横穴墓羨門壁の斜面上約3.5m付近に階段状の地山整形が認められた。地山整形は斜面に沿って直行しており、ほぼ直線状となる。上場線は標高37.6mであり、約40cmの段となっている。整形に直行する土層観察が不十分なために、盛土など墳丘に関する遺構の存在は不明である。

3. 遺物の出土状況

1) 玄室内

玄室内には、礫床上に置かれた枕石の位置より、頭位を北側に向けた被葬者と南側に向けた被葬者の二体の人骨の存在が予測される。北側人骨に付属する副葬品としては、玄室西隅に鉄鏃4（第360図11～13）、枕石近くに刀子1（第360図14）が認められる。南側人骨に付属する副葬品としては、玄室南隅に刀子1（第360図15）、玄室中央やや南寄りに貝輪1（第360図19）、貝の加工品1（第360図18）が認められる。その他、弓付属金具2（第360図16、17）が出土しているが、詳細な位置は不明である。また、玄室内埋土の水洗によって玉類多数（第360図19～208）が検出された。

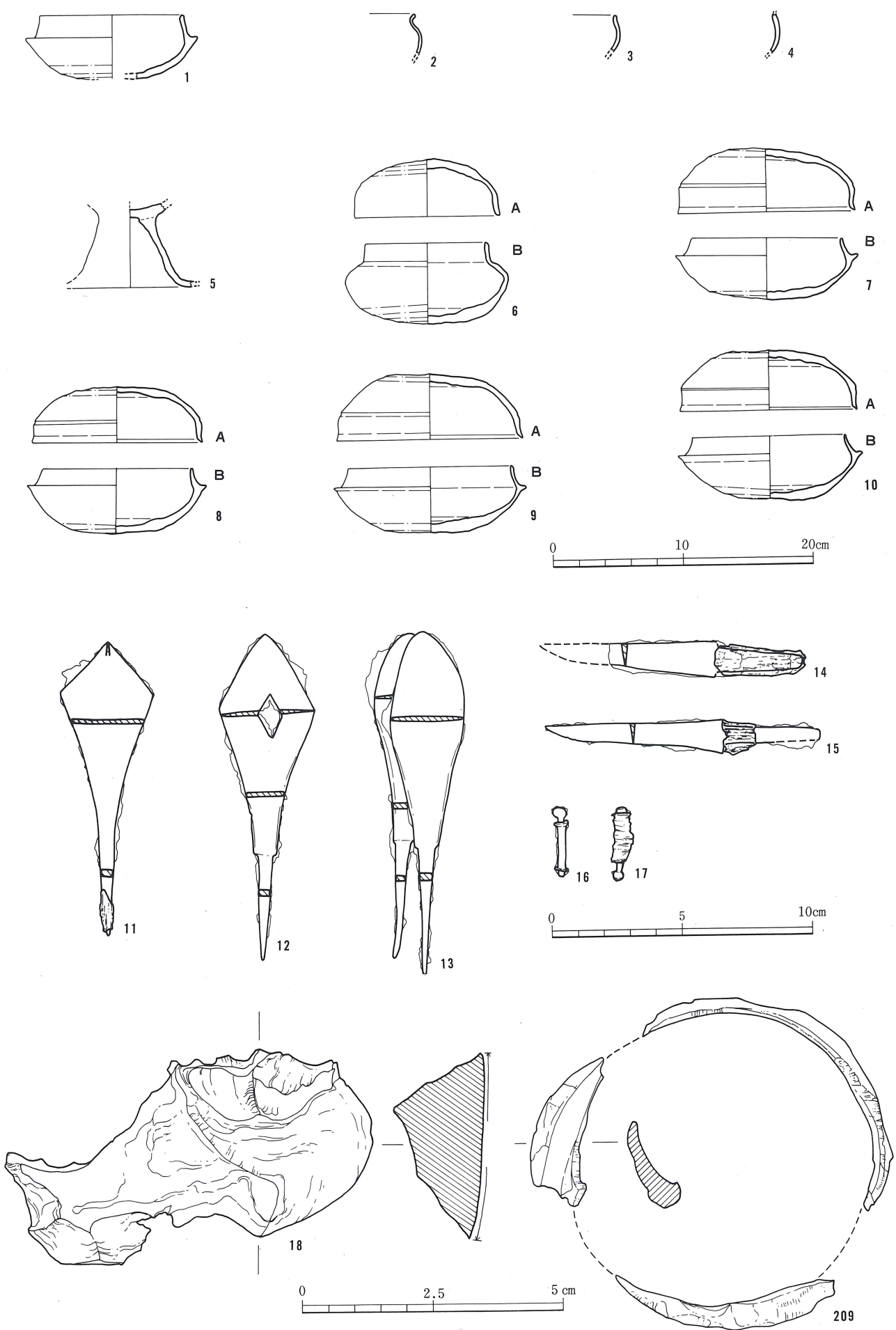
2) 前庭部内

前庭部の埋土中位で、須恵器短頸壺1セット、蓋坏4セットを配列状態で検出した。これらは追葬時の遺物である。またこの土器群の上位より、土師器高坏1（第360図5）を検出している。さらに前庭部埋土中より、遊離した状態ではあるが、須恵器坏1、土師器3（第360図1～4）が出土している。これらは原位置を離れているが、初葬時の遺物である可能性がある。（吉田 寛）

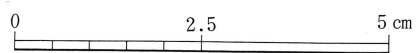
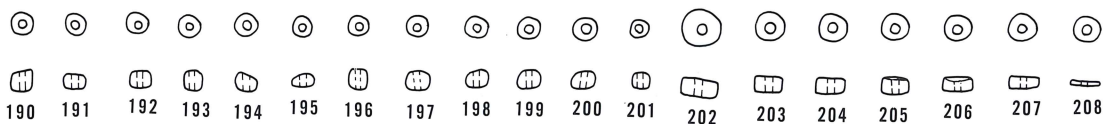
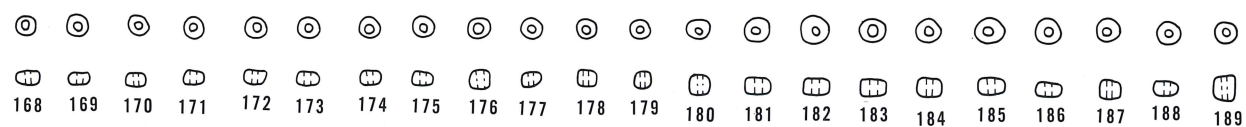
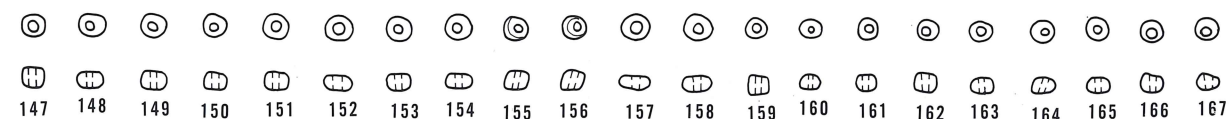
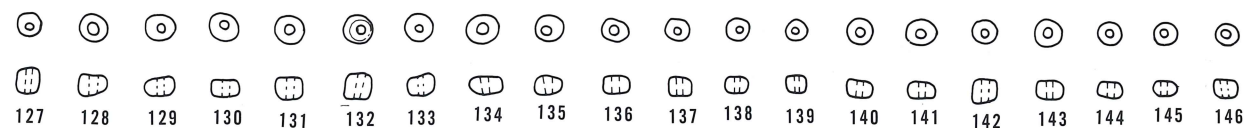
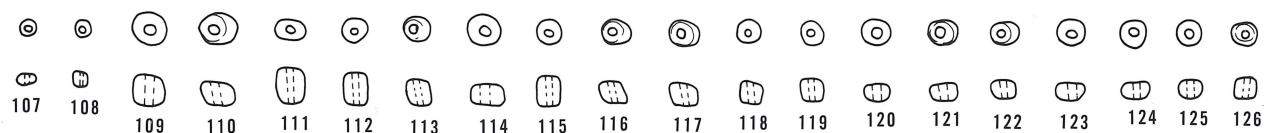
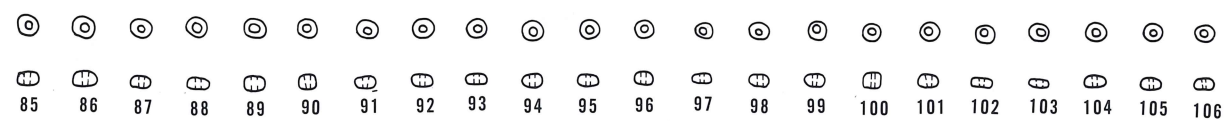
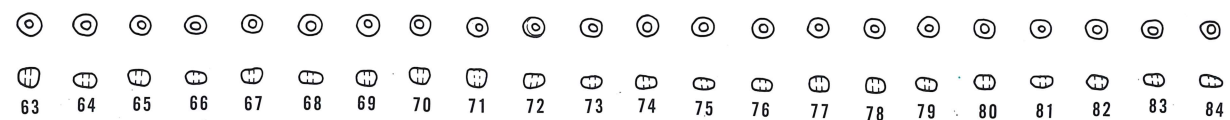
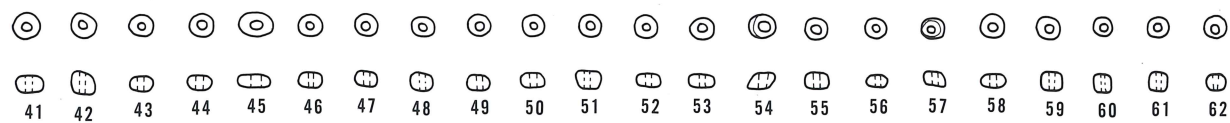
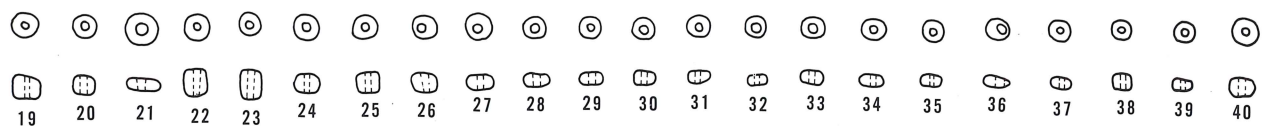
第146表 62号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏身	・11.0 ・4.9+α ・13.0	たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段をなす。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1～4mmの石英粒を少量含む	やや不良		
2	埴	・— ・— ・—	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で外反する。端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	明橙色	0.5～2mmの石英粒を少量含む	良好	土師器	
3	埴	・— ・— ・—	口縁部は内湾しながらのび、端部で肥厚しわずかに外反する。端部は丸い。	器面の磨滅のため調整不明	器面の磨滅のため調整不明	明橙色	1mm前後の石英粒を含む	良好	〃	
4	埴	・— ・— ・—		器面の磨滅のため調整不明	器面の磨滅のため調整不明	明橙色	1mm前後の石英、雲母、の微細粒を少量含む	良好	〃	
5	高坏	・— ・6.3+α ・—		ヨコナデ	器面の磨滅のため調整不明	赤褐色 明橙色	1mm前後の石英粒を少量含む	良好	〃	
6 A	蓋	・11.0 ・4.3	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面をなす。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1mm前後の石英粒を少量含む	良好 堅緻		



第360图 62号横穴墓出土遗物实测图(1)



第361图 62号横穴墓出土遗物实测图(2)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
6 B	短頸壺	・9.2 ・6.2 ・12.4	たちあがりほぼ直立してのび、端部は丸い。胴部はややゆるい。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1~3mmの石英粒を少量含む	良好 堅緻		
7 A	坏蓋	・13.4 ・4.8	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部でわずかに外反し内傾する面をなす。天井部は高く丸みをおびる。外面には稜がみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡黄褐色	石英、長石粒を含む	やや 不良		
7 B	坏身	・11.5 ・4.6 ・13.9	たちあがり内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒茶褐色 茶褐色 黒褐色	1~2mmの石英粒を少量含む	良好		
8 A	坏蓋	・13.0 ・4.2	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部は内傾する面をなす。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	長石粒を含む	良好		
8 B	坏身	・11.4 ・5.0 ・13.7	たちあがり内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄褐色 青灰色	1mm大の石英、長石の微細粒を含む	良好		
9 A	坏蓋	・14.2 ・5.0	口縁部は外反しながらのび、端部でわずかに外反し内傾する段をなす。天井部は高く丸みをおびる。外面には稜が深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄褐色 青灰色	石英粒をやや多量に含む	やや 不良 やや軟質		
9 B	坏身	・12.4 ・5.0 ・14.7	たちあがり内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
10 A	坏蓋	・13.5 ・4.5	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面をなす。天井部は高く丸みをおびる。外面には稜がみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
10 B	坏身	・11.6 ・4.8 ・14.0	たちあがり内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		

第147表 62号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
11	鉄鏃	11.1	6.3	3.5	0.5	0.15	0.25	木質残存
12	同上	12.4	8.4	3.6	0.5	0.15	0.2	
13	同上	13.0	8.2	2.9	0.5	0.2	0.25	
14	刀子	7.4以上	4.0以上	0.9	0.7	0.2	不明	鹿角製柄残存
15	同上	10.4	6.7	0.8	0.6	0.2	不明	同上
16	弓付属金具							
17	同上							

第148表 62号横穴墓出土貝製品計測表

(単位: mm)

番号	器種	内径	断面径	備考
18	不明			マガキ 内面を研磨
209	貝輪	57	16×6	イモ貝、横切り

第149表 62号横穴墓出土玉類計測表

(単位: mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
19	小玉	ガラス	白緑	3.5	3	1		
20	〃	〃	〃	3	〃	〃		
21	〃	〃	〃	4	1.5	1		
22	〃	〃	〃	3	3	〃		
23	〃	〃	〃	4	〃	0.5		
24	〃	〃	〃	3	2.5	〃		
25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
26	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
27	〃	〃	〃	3.5	2	1		
28	〃	〃	〃	〃	1.5	0.5		
29	〃	〃	〃	3	〃	〃		
30	〃	〃	〃	〃	2	〃		
31	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
32	〃	〃	〃	2.5	1.5	〃		
33	〃	〃	〃	3	〃	〃		
34	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
35	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
36	〃	〃	〃	3.5	1	1		
37	〃	〃	〃	2.5	1.5	0.5		
38	〃	〃	〃	〃	2	〃		
39	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
40	〃	〃	藍	3.5	2.5	1		
41	〃	〃	〃	〃	2	〃		
42	〃	〃	〃	3	2.5	0.5		
43	〃	〃	〃	〃	2	1		
44	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
45	〃	〃	〃	3.5	1.5	1.5		
46	〃	〃	〃	3	2	1		
47	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
48	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
49	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
50	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
51	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
52	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
53	〃	〃	〃	3	1.5	0.5		
54	〃	〃	〃	〃	2	1		
55	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
56	〃	〃	〃	3.5	1.5	〃		
57	〃	〃	〃	3	2	〃		
58	〃	〃	〃	3.5	1.5	〃		
59	〃	〃	〃	2.5	2	〃		
60	〃	〃	〃	2	〃	〃		
61	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
62	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
63	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
64	小玉	ガラス	藍	2.5	2	1		
65	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
66	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
67	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
68	〃	〃	〃	3	〃	〃		
69	〃	〃	〃	2.5	2	〃		
70	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
71	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
72	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
73	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
74	〃	〃	〃	3	〃	〃		
75	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
76	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
77	〃	〃	〃	〃	2	〃		
78	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
79	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
80	〃	〃	〃	〃	〃	1		
81	〃	〃	〃	3	〃	0.5		
82	〃	〃	〃	〃	〃	1		
83	〃	〃	〃	2.5	〃	0.5		
84	〃	〃	〃	3	〃	1		
85	〃	〃	〃	2.5	2	0.5		
86	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
87	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
88	〃	〃	〃	3	2	0.5		
89	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
90	〃	〃	〃	2	〃	〃		
91	〃	〃	〃	2.5	1.5	1		
92	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
93	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
94	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
95	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
96	〃	〃	〃	2	〃	〃		
97	〃	〃	〃	〃	1	〃		
98	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
99	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
100	〃	〃	〃	2	2	〃		
101	〃	〃	〃	2.5	1.5	〃		
102	〃	〃	〃	〃	1	〃		
103	〃	〃	〃	2	〃	〃		
104	〃	〃	〃	2.5	1.5	〃		
105	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
106	〃	〃	〃	〃	1	〃		
107	〃	〃	〃	2	〃	〃		
108	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
109	〃	〃	青緑	4	4	1		
110	〃	〃	〃	〃	3	〃		
111	〃	〃	〃	5	4	〃		
112	〃	〃	〃	4.5	〃	〃		
113	〃	〃	〃	3.5	3	0.5		
114	〃	〃	〃	4	〃	1		
115	〃	〃	〃	〃	3.5	〃		
116	〃	〃	〃	3	3	〃		

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
117	小玉	ガラス	青緑	3	3	1		
118	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
119	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
120	〃	〃	〃	3.5	2	1.5		
121	〃	〃	〃	〃	〃	1		
122	〃	〃	〃	3	〃	0.5		
123	〃	〃	〃	4	〃	1		
124	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
125	〃	〃	〃	3	2.5	〃		
126	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
127	〃	〃	〃	〃	3	0.5		
128	〃	〃	〃	4	3.5	1		
129	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
130	〃	〃	〃	3.5	2	〃		
131	〃	〃	〃	4	3	〃		
132	〃	〃	〃	3	〃	〃		
133	〃	〃	〃	3.5	2.5	〃		
134	〃	〃	〃	4	2	〃		
135	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
136	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
137	〃	〃	〃	3	〃	〃		
138	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
139	〃	〃	〃	2.5	2	〃		
140	〃	〃	〃	3.5	2.5	1		
141	〃	〃	〃	〃	2	〃		
142	〃	〃	〃	3	3	〃		
143	〃	〃	〃	3.5	2.5	〃		
144	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
145	〃	〃	〃	3	2	〃		
146	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
147	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
148	〃	〃	〃	3.5	2	〃		
149	〃	〃	〃	3.5	2.5	1		
150	〃	〃	〃	3	〃	〃		
151	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
152	〃	〃	〃	〃	2	〃		
153	〃	〃	〃	3	〃	〃		
154	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
155	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
156	〃	〃	〃	3	2.5	〃		
157	〃	〃	〃	4	2	〃		
158	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
159	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
160	〃	〃	〃	3	〃	0.5		
161	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
162	〃	〃	〃	〃	〃	1		
163	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
164	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
165	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
166	〃	〃	〃	〃	2	〃		
167	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
168	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
169	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
170	小玉	ガラス	青緑	3	1.5	0.5		
171	〃	〃	〃	〃	2	〃		
172	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
173	〃	〃	〃	〃	1.5	1		
174	〃	〃	〃	〃	2	〃		
175	〃	〃	〃	2.5	1.5	0.5		
176	〃	〃	〃	〃	2	1		
177	〃	〃	〃	2	〃	0.5		
178	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
179	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
180	〃	〃	〃	2.5	2.5	〃		
181	〃	〃	〃	3.5	2	1		
182	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
183	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
184	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
185	〃	〃	〃	〃	2	〃		
186	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
187	〃	〃	〃	3	〃	〃		
188	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
189	〃	〃	〃	〃	3	0.5		
190	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
191	〃	〃	〃	〃	2	〃		
192	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
193	〃	〃	〃	2.5	〃	〃		
194	〃	〃	〃	〃	〃	1		
195	〃	〃	〃	3	1.5	0.5		
196	〃	〃	〃	2.5	2.5	〃		
197	〃	〃	〃	3	〃	〃		
198	〃	〃	〃	〃	2	〃		
199	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
200	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
201	〃	〃	〃	2	〃	〃		
202	白玉	滑石	灰	5	2.5	1		
203	〃	〃	〃	4	〃	〃		
204	〃	〃	〃	〃	2	〃		
205	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
206	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
207	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
208	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		

63号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

63号横穴墓は南支群北寄りの斜面にあり、南西方向に開口する。全長は6.9mを測り、主軸方向をN-43°-Eに取る。保存状態は良好であった。斜面の遺構検出中に墓道埋土の土色の変化を認め、横穴墓発見の契機となった。調査前には横穴墓の存在を示すような墓道の落ち込みなどは認められなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞部、玄室内の調査等を行った。閉塞施設除去後、埋葬人骨の遺存が確認されたため、九州大学医学部第2解剖学教室室員の参加協力の上で、玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ4.18m、幅は1.14mを測る。墓道床面は凹凸を持ちながらも約10°の緩やかな傾斜で羨門に向かって上がる。側壁の傾斜は約70~80°を測る。

羨門部は天井部・側壁部の削平、崩落のために、旧状を大きく損なっている。側壁の立ち上がり部分で測ると、幅は約0.5mである。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用しているが、その構造は比較的簡単である。閉塞施設と土層の関係から、配石は最終埋葬時になされたものと思われる。閉塞の配石は形状と使用部位によって2群に分けられる。第1群は安山岩板石を4枚使用し、立てかけるようにして羨門部を覆う。第2群は長さ、幅とも20~50cmを測る比較的大形の河原円礫を使用し、第1群を覆う。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で5層群12層に分層した。

第1層群(Ⅵ層)は初葬時の墓道埋土と推定され、上面は若干風化土を形成する。

第2層群(Ⅴ層)は第1次追葬時の墓道埋土と推定される風化の著しい基盤層の2次堆積土である。

第3層群(Ⅳ層)は最終埋葬時の墓道埋土と推定され、閉塞石を覆う。上面は風化土を形成する。

第4層群(Ⅰ~Ⅲ層)は第1・2層群の堆積が終了した後に形成された流入土である。

第5層群(Ⅷ~Ⅹ層)は中世以降に掘削された溝を覆う埋土である。埋土はほぼ水平に堆積している。Ⅹ層上面はやや性状が異なり、風化土を形成している可能性があるが、断定できなかった。

墓道埋土の状況および風化土層のあり方から、都合3回の埋葬が行われたと考えられる。

2) 羨道、玄室

羨道部は長さ0.47m、玄門幅0.43mを測る。玄室は長さ2.3m、幅2.58mの略隅丸形状を呈し、床面は標高32.6mである。床面には幅8~15cm、深さ5cm前後の排水溝が周壁のほぼ全周と玄室中央部に十字状に設けられている。これらの溝は羨道部を経て、墓道付近まで延びている。床面は墓道に向かって若干の傾斜があり、玄室内に人頭大の石を敷き詰めている。この敷石は排水溝の上から左右に広げるように敷かれているが、その造りは簡略化されている。天井部は崩落が著しいが、ドーム状を呈すると推定され、床面からの高さは中央付近で0.9m前後と考えられる。羨道部とは段で境界を設けている。(吉田 寛)

3. 遺物の出土状況

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 人骨は3体が検出され、いずれも羨門に頭を向けていた。1号人骨は、羨門からみて左に位置する成年前半の男性で、頭から下肢まで遺存している。落石のため骨が部分的に破損・移動しているが、埋葬された本来の位置を保っているものである。左上腕骨の脇に鉄鏃をもつ。